150th anniversary since 1877

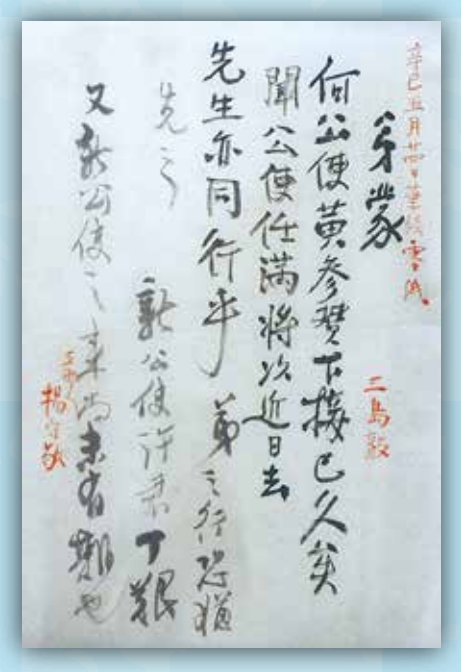
三島中洲と近代

Chushu Modern

―筆談と東アジア文化交流―

―其十二―





企画展

三島中洲と近代　其十二

―筆談と東アジア文化交流―

目次

はじめに　3〜5

本学所蔵の筆談文献　（町 泉寿郎）

Ⅰ 筆談文献　6〜29

1 『占春園筆談』二巻（明治十一年 1878 四月） 芳野家旧蔵
——芳野金陵の占春園における金陵門下と清国公使館員の筆談

2 円山溟北書簡（芳野世経宛、明治十二年 1879 十月六日付） 芳野家旧蔵

3 『三島中洲・崔成大・張滋昉筆談』一巻（明治十四年 1881 六月二十五日）
——朝鮮紳士遊覧団随員崔成大と三島中洲の筆談（1） 西三島家旧蔵

4 『三島中洲・崔成大・川北梅山筆談』一巻（明治十四年 1881 七月九日）
——朝鮮紳士遊覧団随員崔成大と三島中洲の筆談（2）（掛軸巻子 0261）

5 『迎春筆談』一巻（明治十五年 1882 一月七日） 日笠斐夫旧蔵
——清人張滋昉と三島中洲・川北梅山・南摩羽峰・桜井竹崖の筆談
（掛軸巻子 0277）

6 『三島中洲・楊守敬筆談』（明治十四年 1881 五月二十四日） 西三島家旧蔵

7 『三島中洲・孫点筆談』（明治二十年 1887 五月二日） 西三島家旧蔵

8 『瓊浦筆談』一冊、三島中洲自筆本（文久二年 1862 十一月二十二日・二十四日）
——三島中洲と清人林雲逵の長崎における筆談（和装本 0026）

9 『林島筆話（瓊浦筆談）』一冊 阪谷朗廬旧蔵

10 『瓊浦筆談』一冊、加藤復斎写本 （kf465）

11 『瓊浦筆談』一冊 西三島家旧蔵

12 『瓊浦筆談』一冊——山田琢氏による訓読版 西三島家旧蔵

13 黄遵憲撰『日本雑事詩』（三島中洲書入本）（漢籍目録 p.96 下 2）

Ⅱ 書画　30〜40

14 書画帖『万花縁』（昭和三〜五年 1928 〜 1930）清宮宗親旧蔵（2-64）

15 書画帖『翰墨因縁』（昭和六年 1931）清宮宗親旧蔵（2-63）

16 『占春園詩文巻』一巻（明治八年 1875 四月）芳野家旧蔵
——芳野金陵の占春園雅宴における金陵門下たちの詩文

17 葉松石書幅（明治九年 1876）（掛軸巻子 0216）

18 張斯桂書幅（明治十二年 1879）（掛軸巻子 0076）

19 黄遵憲書額「日本雑事詩二首」（書 0046）

20 厳永世書幅（明治十四年 1881 七月）（掛軸巻子 0045）

21 崔成大書幅（明治十四年 1881 七月）（掛軸巻子 0055）

22 諸家寄合書送別書幅（明治四十一年 1908）清宮宗親旧蔵（2-16）

23 諸家寄合書幅（大正期頃、松井石根、朱大符、張群、戴季陶、善明、宋伯魯、余維謙、彭程万、宮崎滔天、新田不孤）清宮宗親旧蔵（2-47）

Ⅲ 資料編　42〜68

凡例

一 本書は二松学舎大学所蔵の筆談および関連資料を収録した。

一 人物の呼称は通行に従い、年齢は数え歳によった。

一 漢字は原則として通常の印刷標準字体を使用した。

一 本書の執筆は町泉寿郎が担当した。

一 本書は、二松学舎大学大学資料展示室企画展「三島中洲と近代 其十二」（会期 2026.7.27 〜 10.17）の展示図録を兼ねるものである。

本学所蔵の筆談文献

二松学舎大学文学部教授／東アジア学術総合研究所長
町　泉寿郎

はじめに

東アジア文化圏において、漢字は古代から現在に至るまで、コミュニケーションツールとして機能してきた。漢字によるミュニケーションの事例として、近年国内外の研究者の関心を集めている各種の筆談文献がある。

筆談が行なわれる具体的な場面としては、事前に予定されていた人的交流の場面で行われる場合と、偶発的な事件によって発生する場合が想定される。外交使節などの公的交流には、古代日本の遣隋使・遣唐使、高麗・李朝や越南や琉球による燕行使節、また近世日本の朝鮮通信使の記録、長崎唐人屋敷における交流、明治日本の清国公使館員との筆談などが挙げられる。偶発的な例としては、鉄砲伝来として記憶される一五四三年（天文十二）の種子島西村浦におけるポルトガル船漂着時の西村時貫と明人五峰による砂浜に杖を用いた筆談をはじめとして、漂着船乗組員との筆談の例も比較的多く、資料集「江戸時代漂着唐船資料集」（関西大学東西学術研究所）も早くから刊行されている。筆談に関する研究は、今世紀に入って特に盛行し、主に中国人研究者による多くの研究が蓄積されている。

ところで、筆談は予定された交流であれ偶発的な交流であれ、それが一種の会話である以上は、不可避的に即興性を持つものである。即興的に生み出されその場で消費された筆談の多くは、整理や編集が施されないままに散逸したものが多いに違いないが、偶然に残されることになった筆談もあり、また整理・編集が施されて意図的に後に伝えられた筆談もあった。意図的に残された「大河内文書」や「宮島誠一郎文書」のような大量の筆談が出現する可能性は低いかもしれないが、今回の展示で紹介するような規模の筆談文献であれば、今後更に新資料が出現することも期待できるであろう。新資料の出現によって、従来知られていなかった事実が明らかになることも少なくない。

本学の所蔵資料を例にとってみよう。本図録に収録した筆談文献のうち、筆者が本学に奉職する二〇〇三年以前からの所蔵品は、『三島中洲・崔成大・川北梅山筆談』（一八八一年七月九日、展示資料４）の一点のみであり、それ以外はすべて近年、寄贈や購入などによって本学所有となったものである。

遥か昔のことになってしまったが、21世紀ＣＯＥプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」（二〇〇四～二〇〇八年度）、次いでＳＲＦプロジェクト「近代日本の「知」の形成と漢学」（二〇一五～二〇一九年度）にも採択され、この間に本学附属図書館と東アジア学術総合研究が所蔵する漢学関係資料は確実に増加した。例えば、以下の資料群を挙げることができる（順不同）。これらの資料は、大学資料展示室における企画展と展示図録、および日本漢学研究センターの活動（「日本漢学画像データベース」等）を通して逐次公開につとめてきた。これらの新収資料の中に、少なからぬ筆談文献が見いだされたので、その都度、資料紹介の論考も発表してきた。

以下に掲出した資料群のうち、丸印を附したものは筆談文献が含まれていた資料群である。

○芳野金陵旧蔵書（田中藩士、昌平黌教授）
・大沼枕山・鶴林旧蔵資料（幕末明治初期の漢詩人、およびその養子）
○阪谷朗廬旧蔵書（備中興譲館主、明六社同人）
・牧野黙庵・松村・藻洲文稿（高松出身の漢学者、早稲田大学教授）
・南摩羽峰詩文稿（会津藩士、東京大学・東京高師教授）
・新妻荘五郎旧蔵書（浅田宗伯門の漢方医）
・市村瓚次郎宛来翰（東大古典科卒、東大東洋史教授）
・山田済斎詩文稿（山田方谷養孫、東大古典科卒、陽明学者）
○加藤復斎旧蔵書（二松学舎塾頭、閑谷中学校教諭）

・清宮宗親旧蔵書画（貴陽師範学堂教習、通訳官）
・加藤虎之亮文書（香淳皇后に漢籍進講、『周礼』校勘研究）
・佐久間峻斎旧蔵書（名洋行、字儀卿、医師、漢詩人）
・小野家文書（三島中洲の母柳の生家、備中浅口郡大谷村庄屋）
○宝塚三島家文書（三島中洲の生家西三島家、備中窪屋郡中島村庄屋）
・芦屋三島家文書（三島中洲の生家西三島家、備中窪屋郡中島村庄屋）
・神戸秋山旧蔵文書（山田方谷の後任の備中松山藩元締）
・野崎万三郎来簡（備前西幸西村庄屋、岡山県官吏）
・石川岳堂旧蔵書（本学名誉教授石川忠久氏の蔵書）

以下に各資料の概要を記しておきたい。

現在二巻の巻子本に装丁されている『占春園筆談』（展示資料1）は、故芳野赳夫氏から寄贈を受けた芳野金陵旧蔵書のうちの未整理資料から発見されたもので、従来その存在が知られていなかった。金陵が旧守山藩邸を買い取って住んだ広大な占春園において、明治十一年（一八七八）四月に行われた筆談は、清国公使館員（沈文熒、廖錫恩、黄遵憲、および公使何如璋）と金陵およびその門人知友（青山延寿、川田甕江、木原老谷、小永井小舟、信夫恕軒、塩谷時敏、亀谷省軒）らが参加した。廖錫恩と黄遵憲が記した自作の詩には塗抹や書直しの痕があり、これらが本当に即席の作であったことを伝えている。青山延寿の詩に対して黄遵憲が即座にその平仄の誤りを指摘していることも、黄遵憲の学才と人物を窺わせる。内容的には、何如璋と亀谷省軒との詩文に関する応酬が日清文人の文章に関する認識の懸隔を表していて興味深い。

三島中洲の筆談については、従来知られている『三島中洲・崔成大・川北梅山筆談』に加えて、その二週間前（明治十四年六月二十五日）に行われた中洲と崔成大の最初の筆談録『三島中洲・崔成大・張滋昉筆談』（展示資料3）が、宝塚三島家の寄贈資料から今回新たに発見された。この時の筆談には、岡山県から上京して中洲宅に滞在中であった中洲の兄舒太郎と妹増子（藤戸村大庄屋日笠武一郎の妻）が同席し、彼らが六月二十九日に帰郷する際に土産話の材料に供するために贈られ、以来一四〇年あまり西三島家に保管されて今日に至った。内容上最も注目すべきは、中洲がこの時期に黄遵憲からの委嘱を受けて社友二人に託して治罪法と刑法の漢訳に取り組んでおり、出来あがり次第それを黄遵憲に贈り、副本を崔成大にも提供すると約していることである。その後、治罪法と刑法の漢訳版は黄遵憲と崔成大に贈られたと考えられ、崔成大の上司厳永世は帰国後まもなく『日本司法省視察記』七冊を提出しており、その中に漢訳された治罪法と刑法が収録されている。後に黄遵憲が刊行した『日本国志』（一八九八年刊）にも漢訳の治罪法（巻二十七～二十九）と刑法（巻三十・三十一）が収められている。

次いで、従来から知られている同年七月九日の筆談（展示資料4）は、三島中洲と崔成大の他に、中洲の旧友川北梅山が遅れて加わり、内容としては中洲が道徳を儒教に採り技術は西洋に採る「取長捨短の説」を主張したのに対して、崔は取捨選択の判断基準は東洋の儒教道徳に存すると主張して譲らなかった。六月二十五日筆談ともども、崔成大と中洲の筆談には、西洋と東洋の学問をいかに取捨選択して実用に生かすかという点に関する中洲の意見がよく表れていると思う。

文字通り「断簡零墨」に類するものではあるが、楊守敬と中洲の筆談、孫点と中洲の筆談も、宝塚三島家寄贈資料から今回新たに発見された。

楊守敬と中洲の筆談（展示資料6）は、初代公使何如璋の任期が満了したが、明治十三年十二月に次期公使に任命された許景澄が尊属の服喪によって赴任せず、黎庶昌が翌十五年二月に着任するまで何如璋が離任できなかった時期の状況を反映した記述になっている。

孫点と中洲の筆談（展示資料7）は、先に陳捷氏によって翻刻された孫点の日記『夢梅華館日記』（国文学研究資料館『調査研究報告』三二号）を参照することによって、明治二十年（一八八七）四月下旬に孫点と中洲らが山梨県南部に旅行し、帰京後の五月二日に中洲宅で行われたものであることがわかる。

明治十五年（一八八二）一月七日に中洲宅で張滋昉と三島中洲と川北梅山によって行われた『迎春筆談』（展示資料5）は、中洲の門人で甥にあたる日笠斐夫が学業を終えて帰郷する際に贈られたもので、二十年程前に市場に流出したものを購入した品である。張滋昉の洒脱な人柄を反映して、くだけた内容が多いが、むしろこうしたものが明治期の筆談交流の標準的な内容であったのではないだろうか。

ところで、上述の黄遵憲・崔成大・張滋昉・楊守敬・孫点と中洲が交流をもったこと自体は従来知られていることである。例えば、中洲が残した詩文から清国人について拾えば、何如璋・黎庶昌・李経方（以上清国公使）・黄遵憲・姚文棟・孫点・楊守敬・劉慶汾・沈文熒ら公使官員や張文成・唐家楨・馮国勲ら公使館の留学生、江標ら本国から来遊した官吏、それ以外に張滋昉・王治本・王韜・黄夢畹らの名が見いだせる。朝鮮修信使については金宏業の名が見えるほか、紳士遊覧団についても、その帰国にあたって、中洲は厳永世と崔成大に送別の詩を贈っている。また、本図録に収録した通り、本学所蔵の諸家から中洲に贈られた書の中にも、清人では葉松石・張斯桂・黄遵憲ら（展示資料17・18・19）、朝鮮紳士遊覧団では厳永世と崔成大（展示資料20・21）の揮毫した書幅も見いだせる。しかしながら、これらの詩文だけでは具体的な交流の実態までは分からず、筆談は彼らの交流の実態を具体的に知るまたとない資料である。したがって、交流のあった上述の諸家と中洲のまだ見ぬ筆談の出現が期待される。

また、文久二年十一月二十二日・二十四日に、中洲が西国探索の途次、長崎で清商林雲逵と行った『瓊浦筆談』（展示資料8）は、現在知られているかぎり中洲にとって最早期の筆談である。この資料は「中洲三島先生年譜」（『二松学舎六十年史要』）や「中洲書誌」（『三島中洲―二松学舎の創立者』）にも記録されているものだが、長らく所在不明となっていた自筆本が二十年ほど前に関係者から本学に返還された。西国探索途中に纏められた原本と考えられ、内容的には欧州列強に蚕食される清国の現状についての質疑応答が注目される。『瓊浦筆談』は、清国人から入手した清国の現状に関する情報として、幕末当時一定の価値を持ったらしく、阪谷朗廬旧蔵にかかる写本（展示資料9）、阿万豊蔵による写本（宮崎県立図書館所蔵）、西三島家所蔵の近世写本（展示資料11）など、写本によって流通していたことが分かる。これらは、筆談がその場限りで消費されて終わらなかった事例である。

以上、幕末明治前期の筆談文献の事例からは、例えば知識人間の交流において詩がコミュニケーションツールとして不可欠であったことが確認できる。『古春園筆談』にせよ、『瓊浦筆談』にせよ、初対面の知識人同士はまず詩を贈り合い、それから具体的な話題に移っていくものであったらしい。詩の応酬もできないようでは、一人前の人交わりはできず、まして情報収集など覚束なかったのである。

崔成大と中洲の筆談からは、中洲が黄遵憲から依頼されて刑法・治罪法の漢訳に従事したという新事実も判明する。筆談は酒食や遊興の話ばかりではなかったことが分かる。

草卒に行われた筆談のうちのいくつかが中洲から親族に贈られていることから、中洲自身はこれらの筆談内容に手元に残すほどの価値を認めていなかったことも窺える。だが、中洲の手で筆談者名や筆談順の記入など一定の整理を経たうえで贈られたことによって、後世の者にとってはこれが単なる古反古ではなく中洲と外国人との筆談文献であることが意識されやすくなり、これによって散逸を免れた面もあったと考えられる。また、筆談を贈られた者にとっては、これを帰郷後の土産話の「話柄」とすることによって、異文化コミュニケーションの経験が他者に享受されることにもなったのである。こういうところにも筆談文献の面白さがある。

一人でも多くの方に筆談文献の実物を見ていただき、幕末明治期の日本・清国・朝鮮の人々の交流のあり方やその内容に関心を持つきっかけとなることを期待する。

二〇二六年七月二十五日

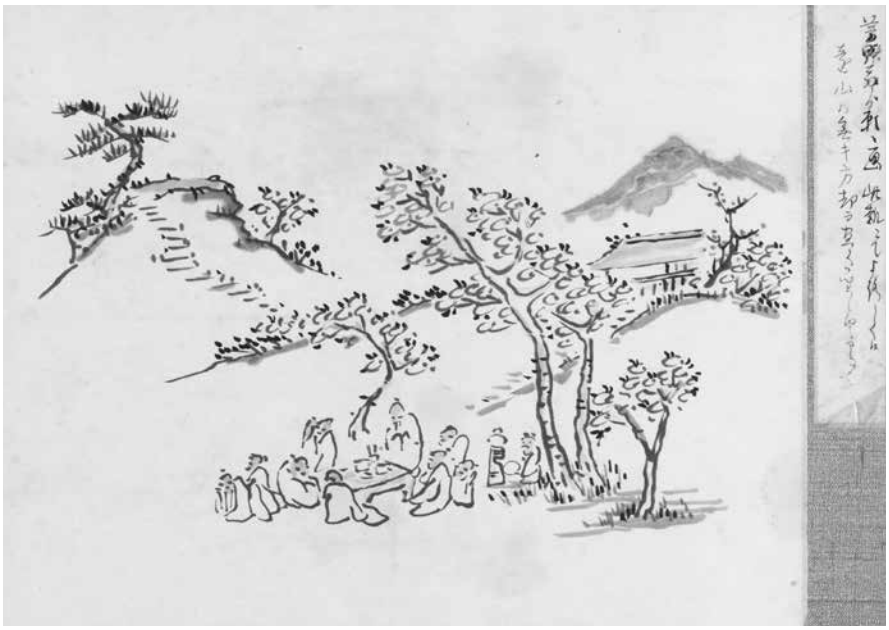
Ⅰ 筆談文献

巻一：明治 11 年 4 月 21 日





大学免官時の芳野金陵



橋本雪蕉による題画の下絵

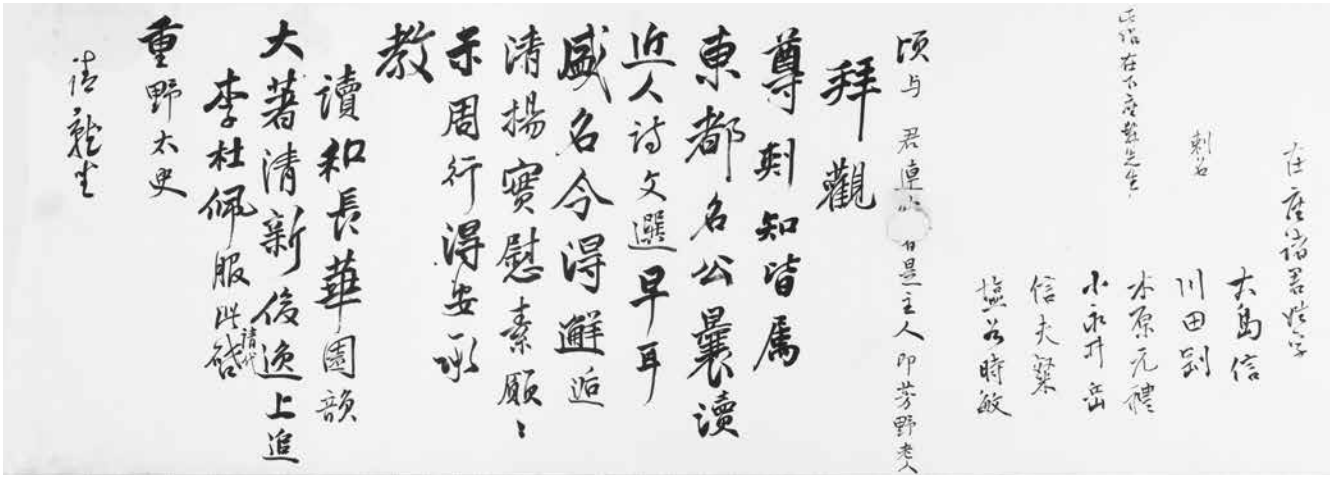
1 『占春園筆談』二巻（明治十一年1878四月二十一日・二十四日）芳野家旧蔵
―芳野金陵の占春園における金陵門下と清国公使館員の筆談

元昌平黌教授の芳野金陵はこの年 77 歳で、清国公使館の開設当初、館員たちが接した日本の文人の中でも最高齢というべき人物であった。

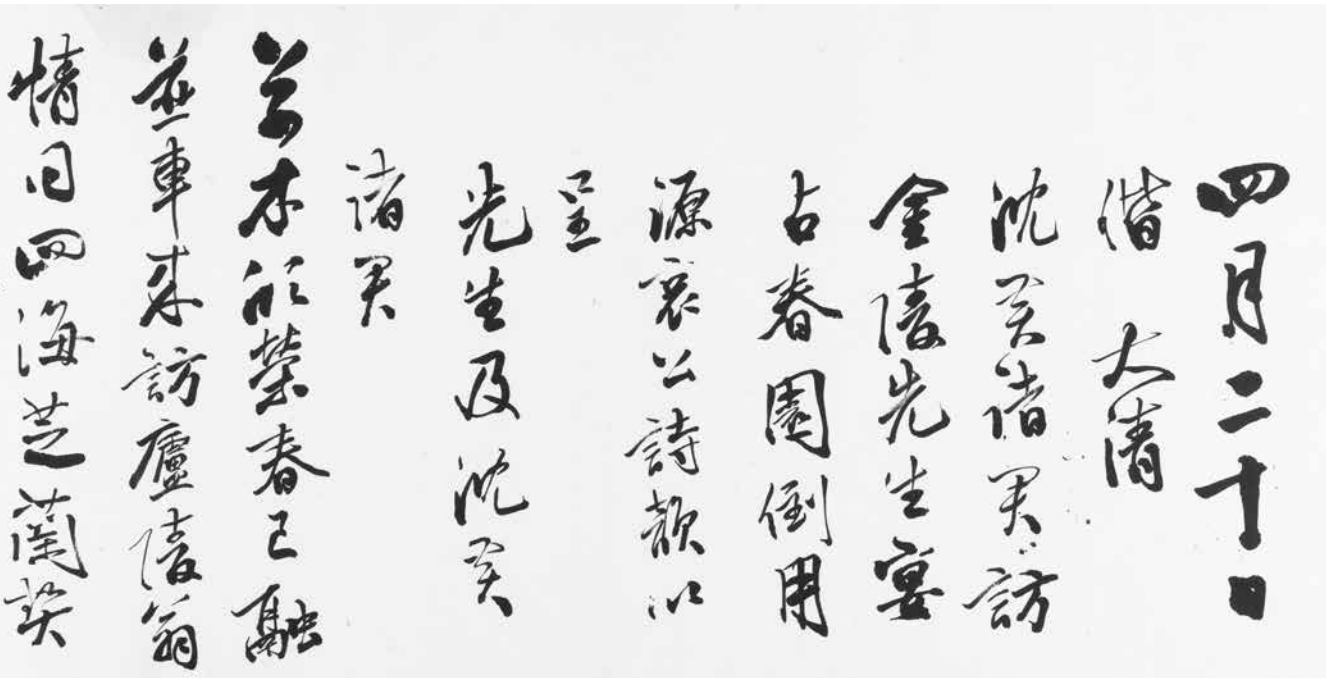


右は、重野成斎がこの日欠席することを芳野金陵に知らせるとともに、事前に贈って寄こした七律二首。「長華園招飲、晤清国公使、中村敬宇有詩、歩其韻。」と「金陵先生邀清国公使於其占春園、適余有疾不能赴、畳長華園詩韻以呈。」

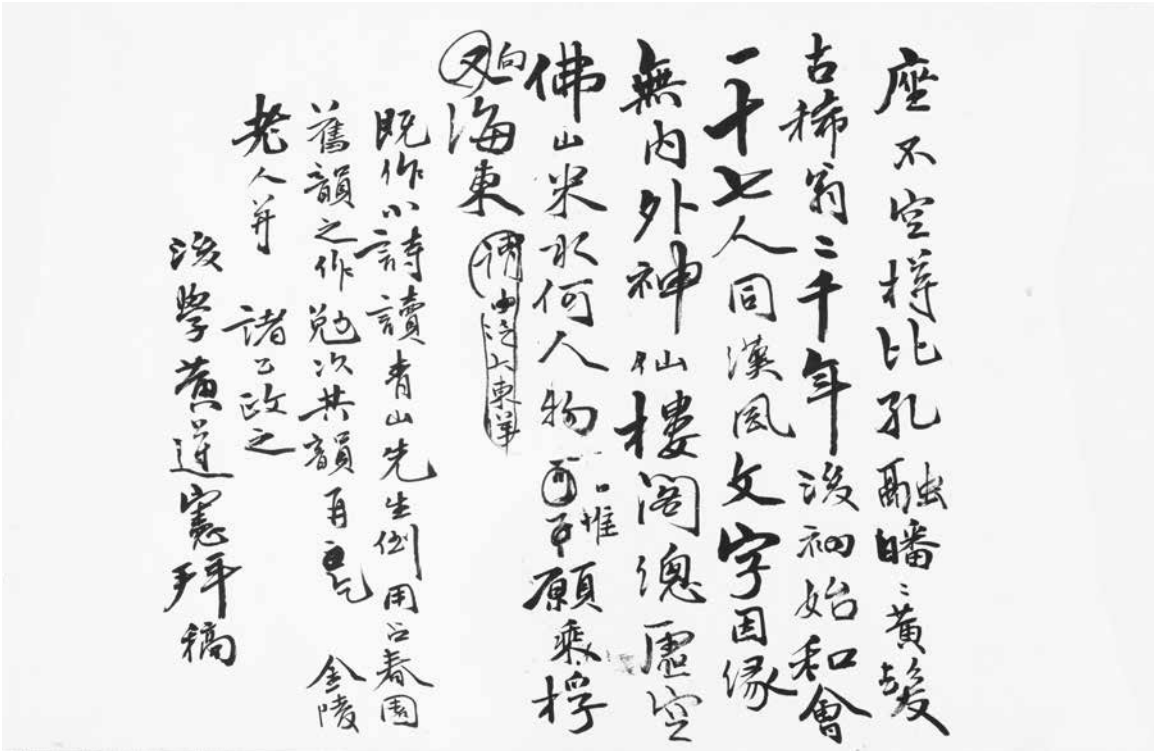
左は、清国公使館員の名刺。



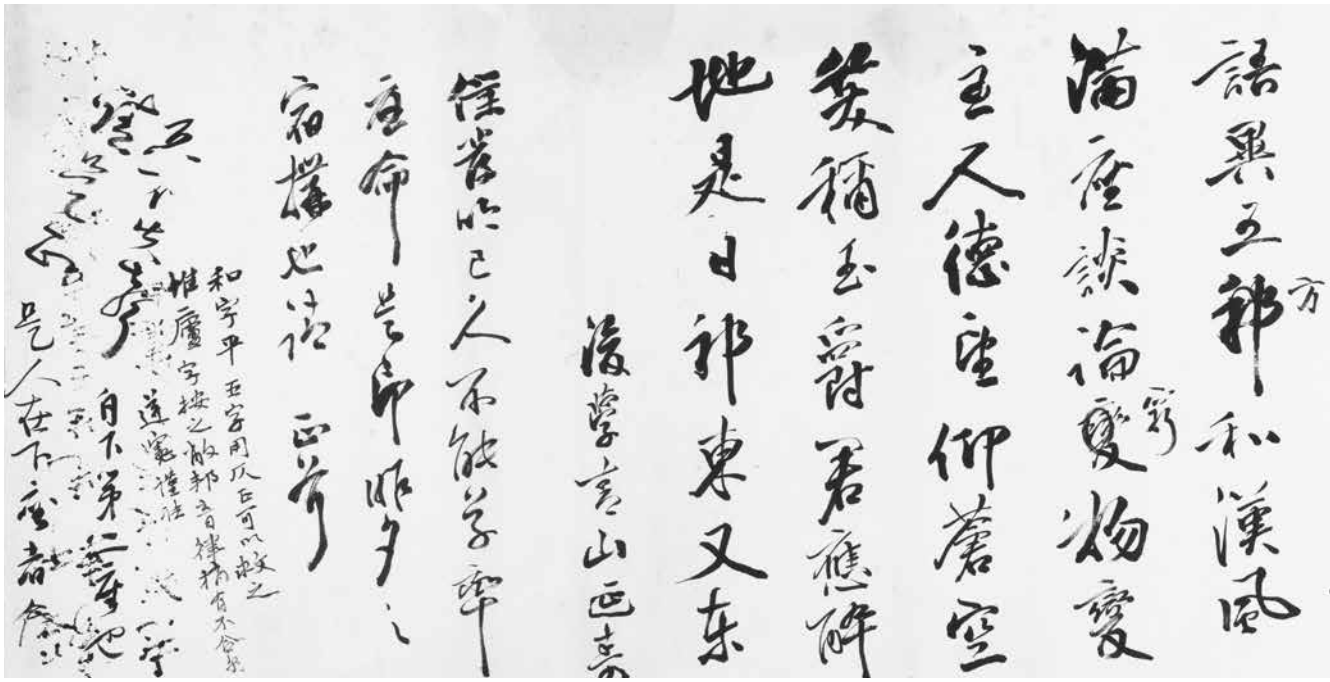
右側は、この席に参会した日本人たちの名を列挙している。
左側は、沈文熒の応答。この時に披露された重野の七言律詩についても言及している。



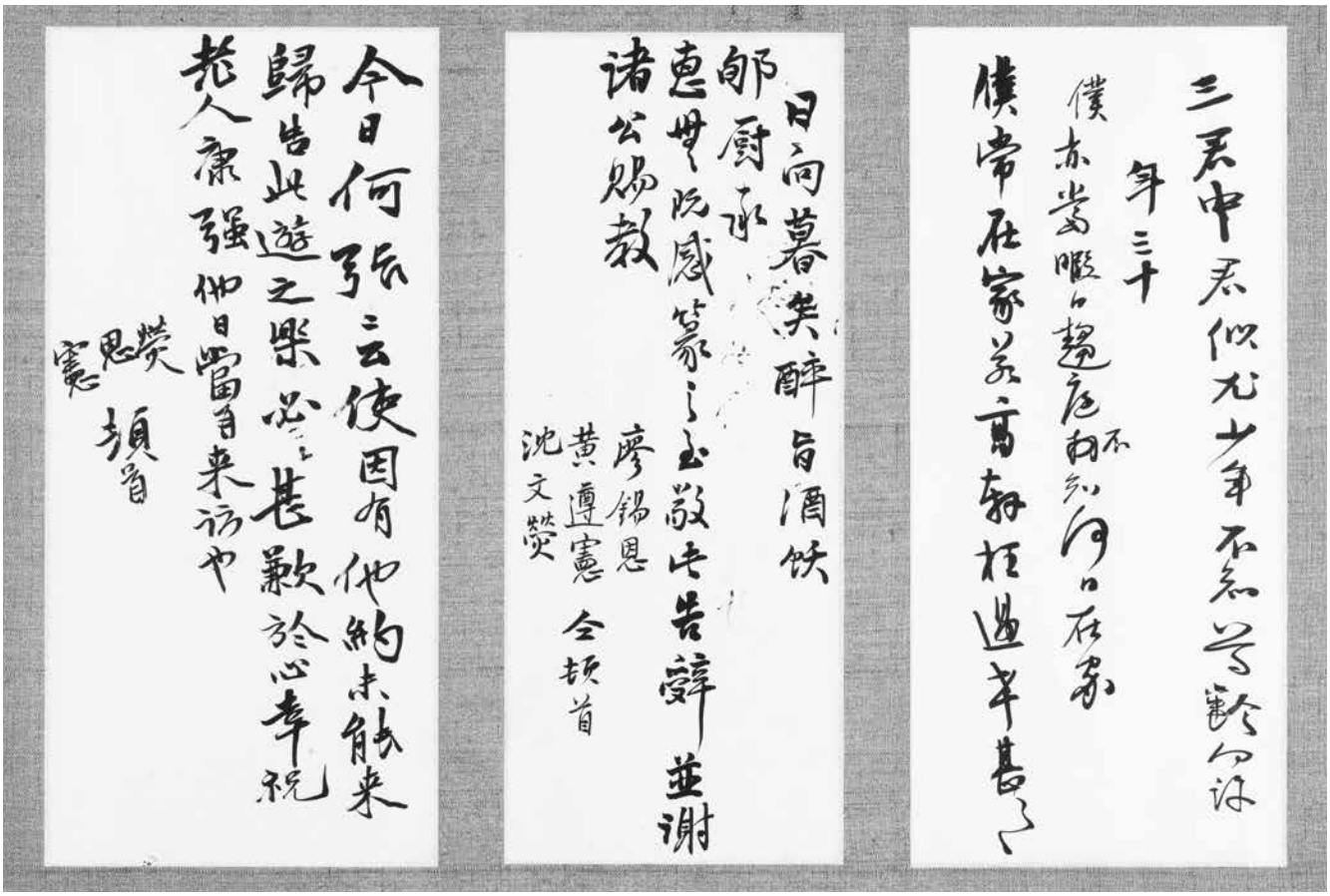
水戸藩８代斉脩の詩韻を倒用した青山延寿の七言律詩、「四月二十日、偕大清沈黄諸君、訪金陵先生、宴占春園、倒用源哀公詩韻、以呈先生及沈黄諸君。」



青山延寿の詩韻に次韻した黄遵憲の七言律詩、
「既作小詩、読青山先生倒用占春園旧韻之作、勉次其韻、再乞金陵老人并諸公政之。」

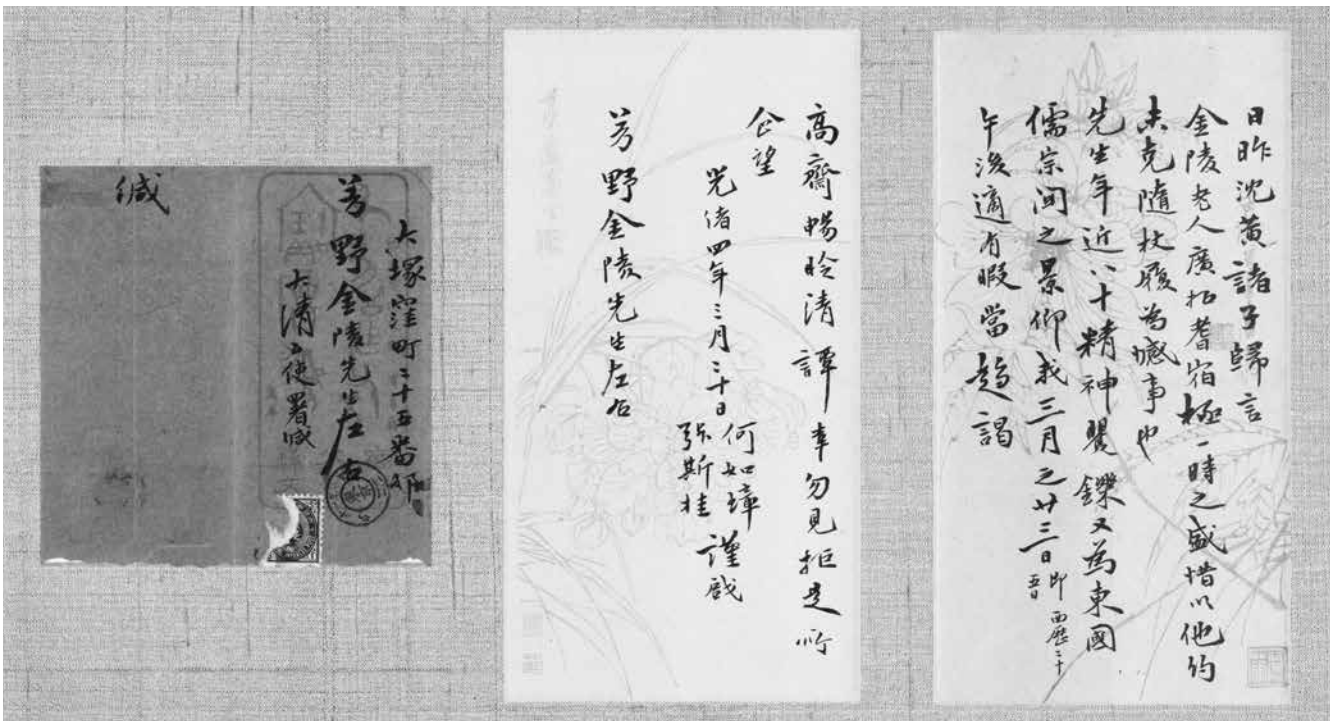


左端の小字は、黄遵憲が青山延寿に詩の平仄に誤りがあることを指摘したもの。

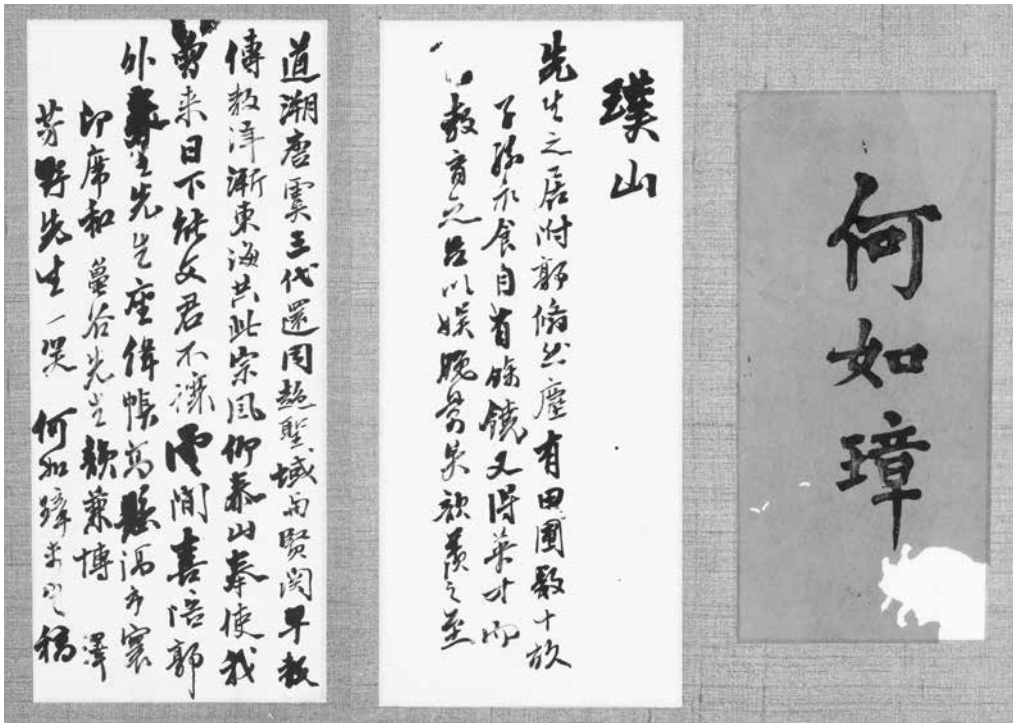


芳野金陵宅を辞去する際に、廖錫恩・沈文熒と黄遵憲が残した言葉。

第二巻：明治 11 年 4 月 25 日

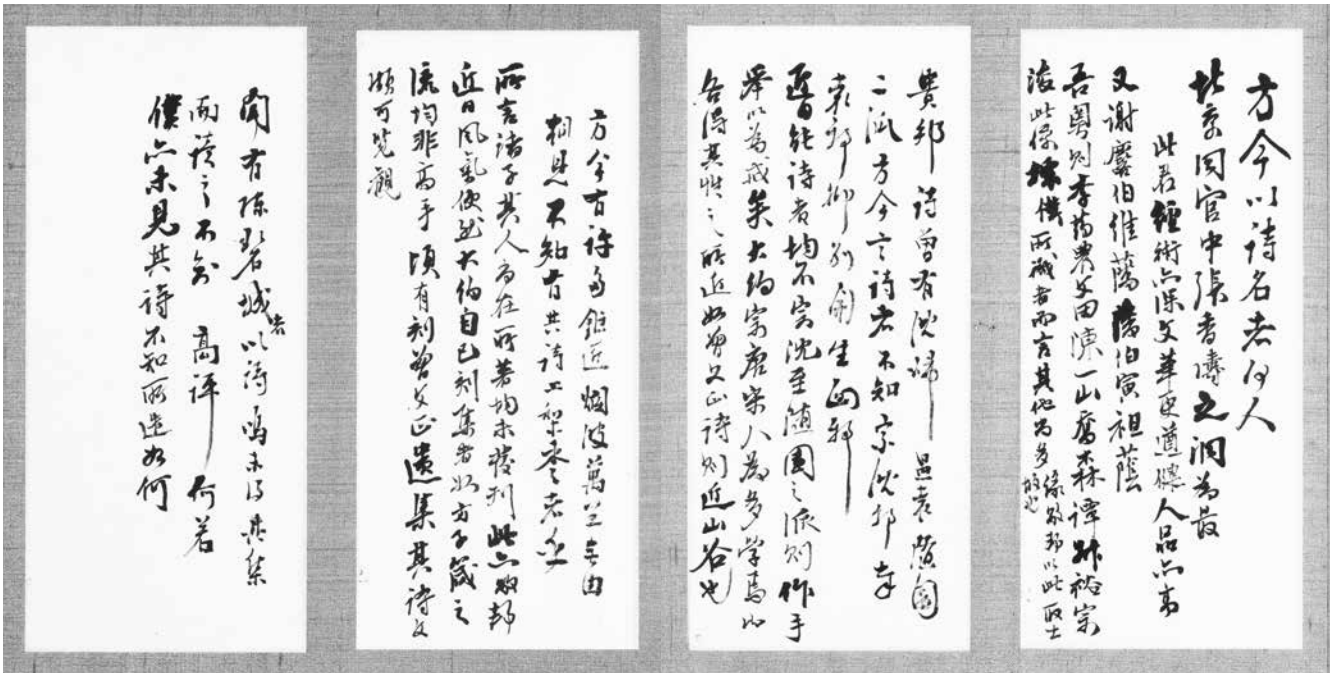


前回訪問できなかった公使何如璋・副使張斯桂から、4 月 25 日（旧暦 3 月 23 日）に訪問したい旨の手紙（黄遵憲代筆）が送られた。

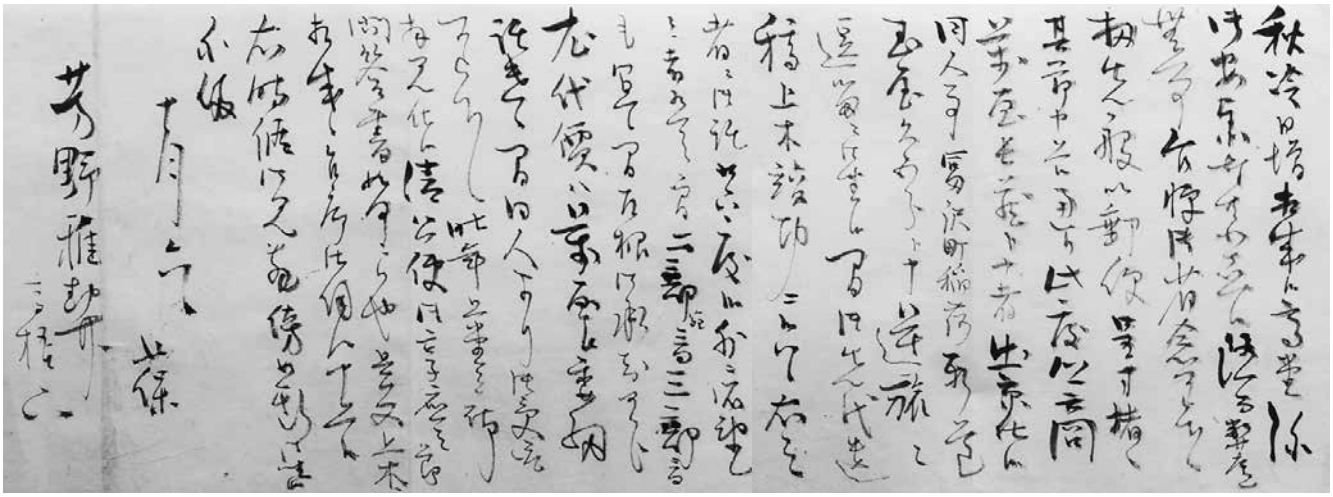


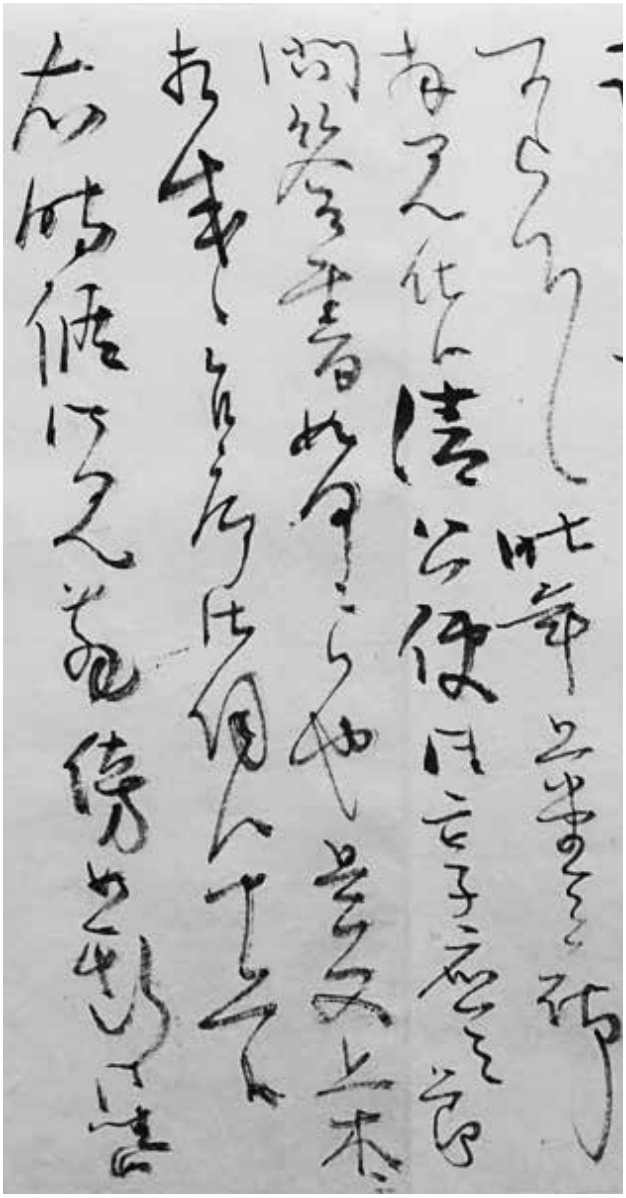
何如璋の名刺、およびその筆跡。芳野金陵の悠々自適な生活を称する。





亀谷省軒と何如璋の詩文に関する応酬。後半４枚の清末当時どのような詩文が評価されているかをめぐるやりとりでは、日清間の認識の差がうかがえる点が興味深い。



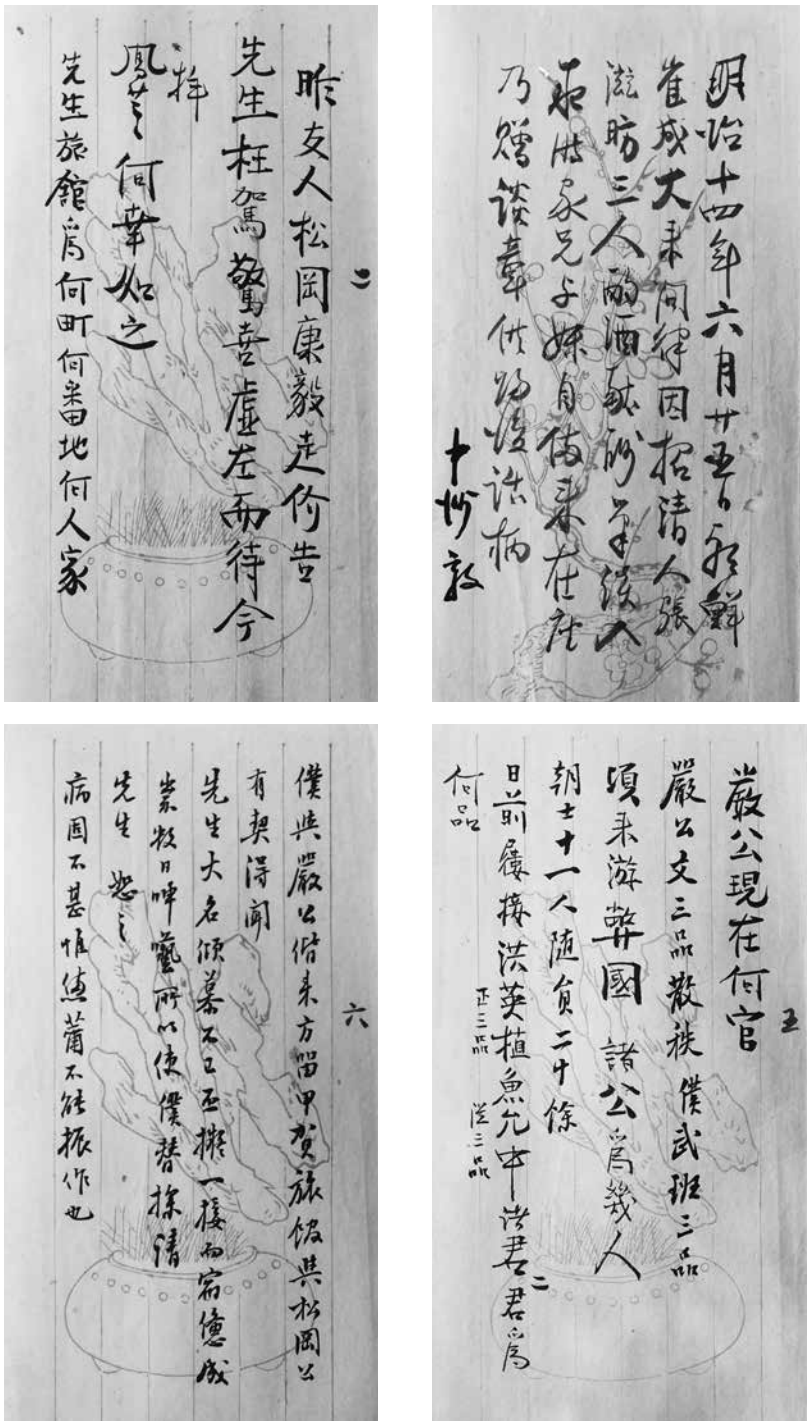


2　芳野世経宛　円山溟北書簡
明治十二年（1879）十月六日付、芳野家旧蔵

芳野金陵は筆談から３か月余り後の明治 11 年８月５日に歿した。後継者世経（1850 ～ 1927）は父の業を継いで自邸に農業と漢学塾逢原堂を営み、また東京市会議員・衆院議員などを歴任した。

展示品は、佐渡出身で亀田綾瀬塾における芳野金陵の後輩にあたる漢学者円山溟北（1818 ～ 1892、名葆、字子光）の芳野世経宛書簡である。書中に「昨年上堂之砌拝見仕候清公使御享応之節問答書」とあるのは前年４月の『占春園筆談』のことを指すと考えられ、溟北は世経に金陵の別集『金陵遺稿』とともに、筆談を出版することを勧めている。

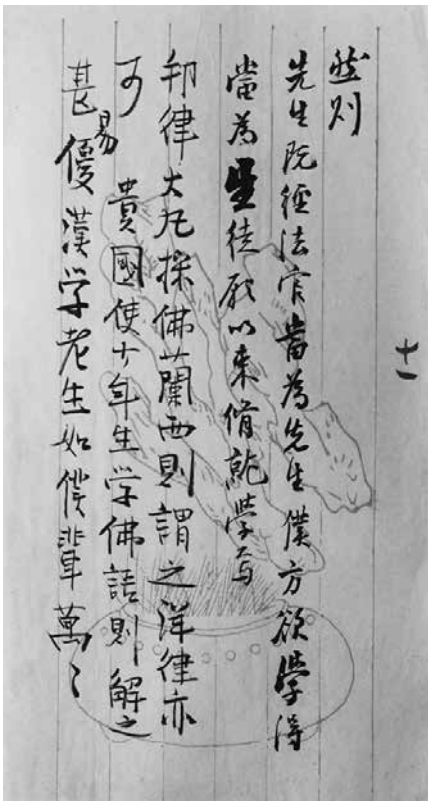
ところで現存する『占春園筆談』では芳野金陵の筆談部分は極めて少なく、金陵の遺稿として刊行するものとしては違和感がある。恐らく、本来は出版するに足る分量の芳野金陵と公使館員の筆談があったと推定される。

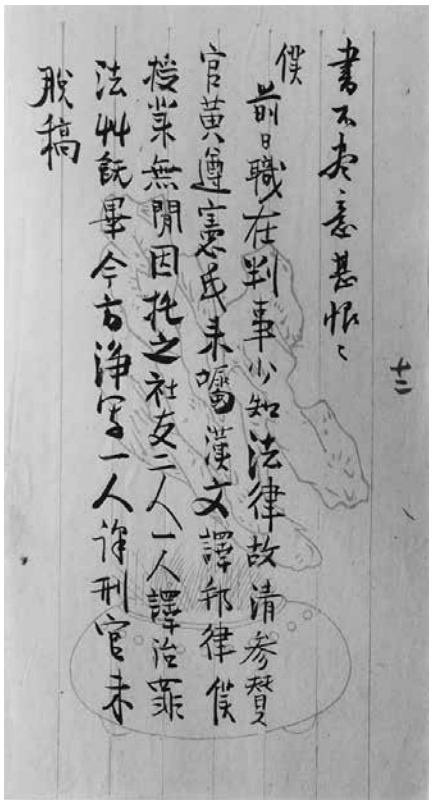


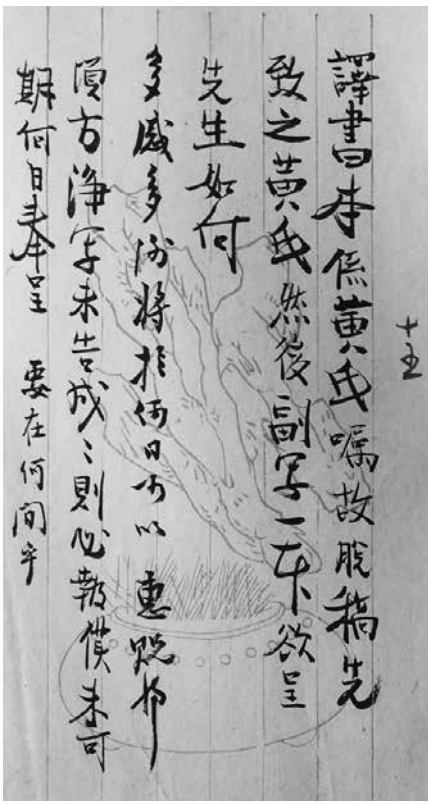
3 『三島中洲・崔成大・張滋昉筆談』（明治十四年1881六月二十五日）西三島家旧蔵 ——朝鮮紳士遊覧団の随員崔成大と三島中洲の筆談（1）

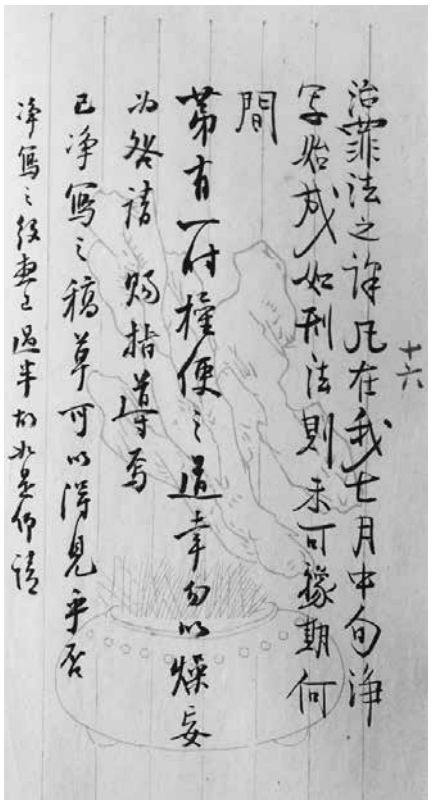
三島中洲と朝士視察団の最初の面識の機会は、明治 14 年（1881）6 月 23 日に「興亜会」によって開かれた神田・開花楼における宴会の席であった（『興亜会報告』第 18 集、1881 年 8 月）。中洲は古海長義（旧米沢藩士、海軍主計局）とともに七絶二首を詠じ、洪英植・魚允中・李鳳植（趙準永の随員）がこれに次韻している記事が掲載されている。翌 24 日には、司法省大書記官松岡康毅から中洲に宛てて紳士遊覧団に対する協力依頼の書簡が届けられている。中洲の快諾をうけて、この日、崔成大が中洲を訪問した。

筆談は詩箋を使用して書かれていて、中洲によって 1 から 53 までの進行順が書かれている。この時上京中の中洲の兄と妹が同席していたため、この筆談は帰郷する兄に土産として贈られた。



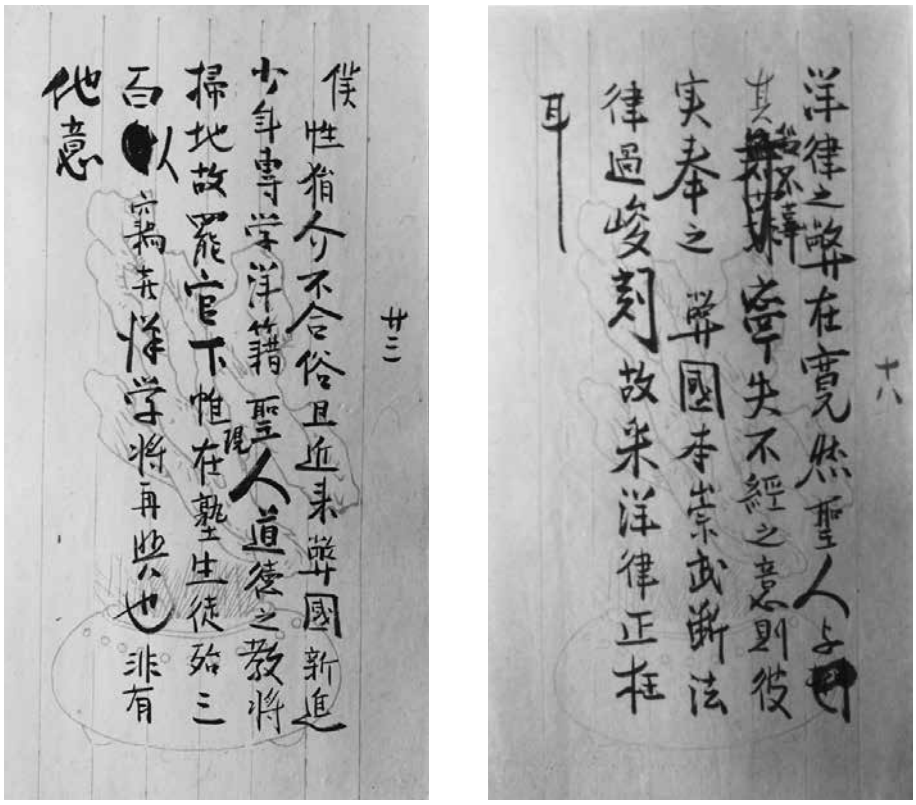




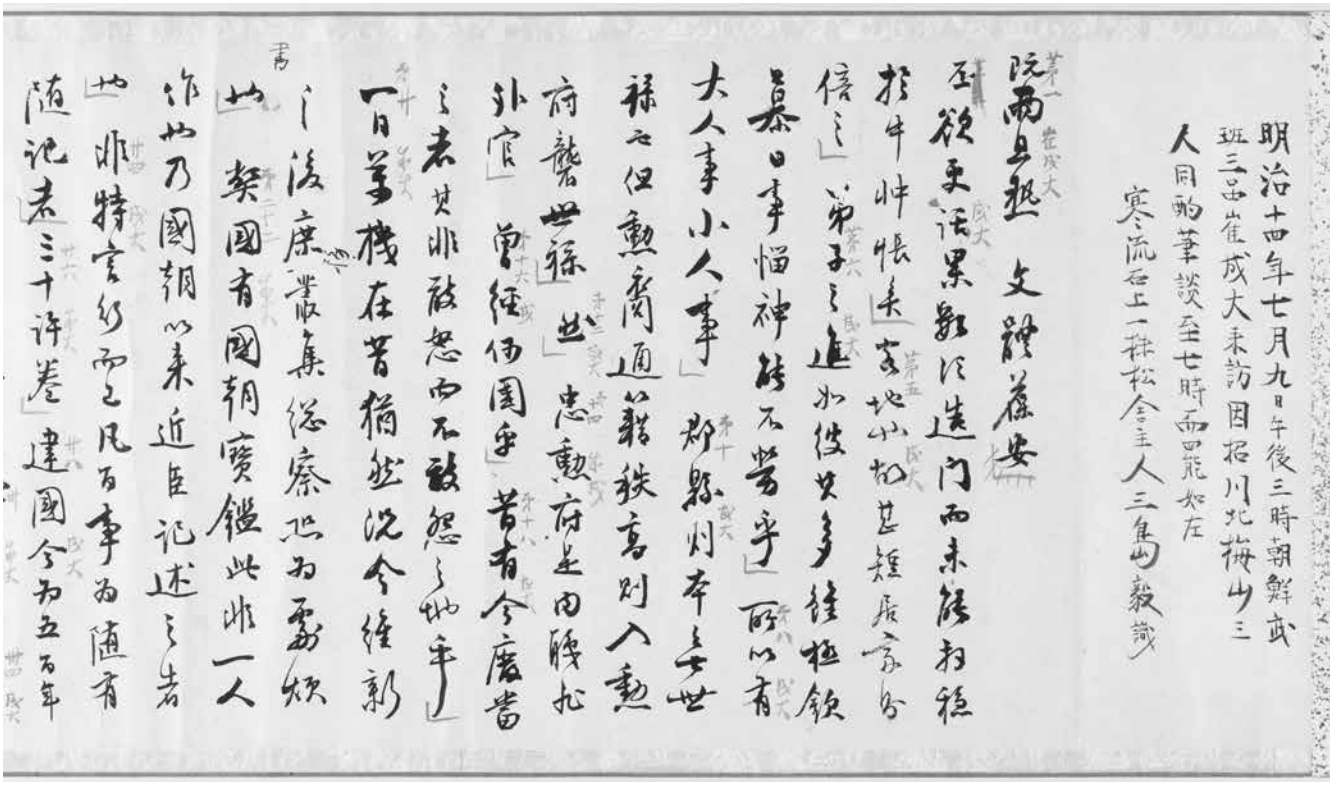


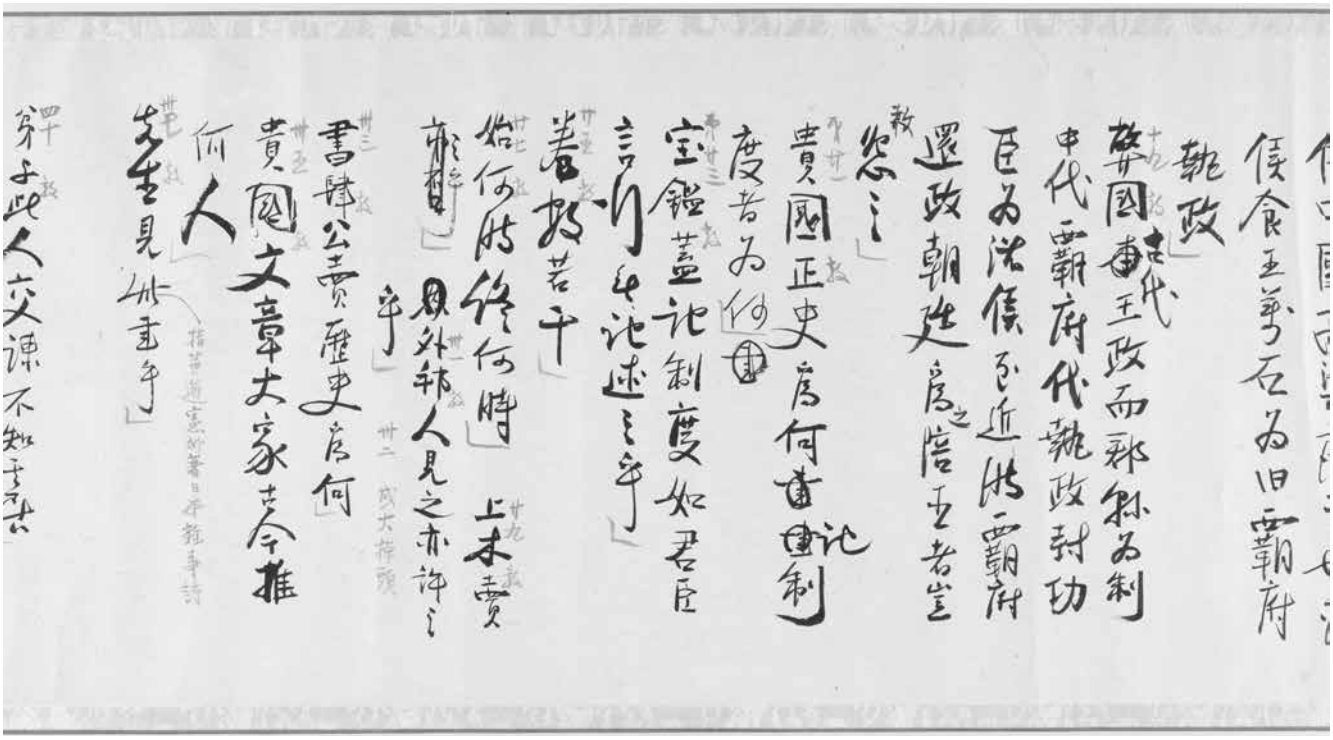
中洲監修のもとで治罪法と刑法（ともに1880年7月17日公布、1882年1月1日施行）の漢訳が行なわれていることは、司法省関係者間である程度知られていたらしい。

中洲は日本の法律がフランス法に基づくことから、崔成大に朝鮮人学生にフランス語を学習させることを勧めたが、崔はあくまで漢訳の入手を求めた。中洲の回答から、治罪法と刑法の漢訳が黄遵憲に依頼によることが分かる。中洲は、漢訳ができたら、黄遵憲に贈ったあと、副本を崔成大にも贈ることを約束している。



中洲はフランスの法学者ボアソナード（1825 ～ 1910）から西洋法学（特に性法に基づく民法）を学び、本質において古代聖人の道と西洋法学の所説は大同小異であると考えていた。この点において、洋学を敵視し儒学を中心とする崔成大とは意見が食い違った。崔成大が辞去した後に、中洲が清人張滋昉に対して、「韓人畏洋人如虎。彼亦人耳。言忠信行篤敬、彼無將奈我何。」と言い、西洋人や洋学に対して公平な態度をとっている点も注目される。

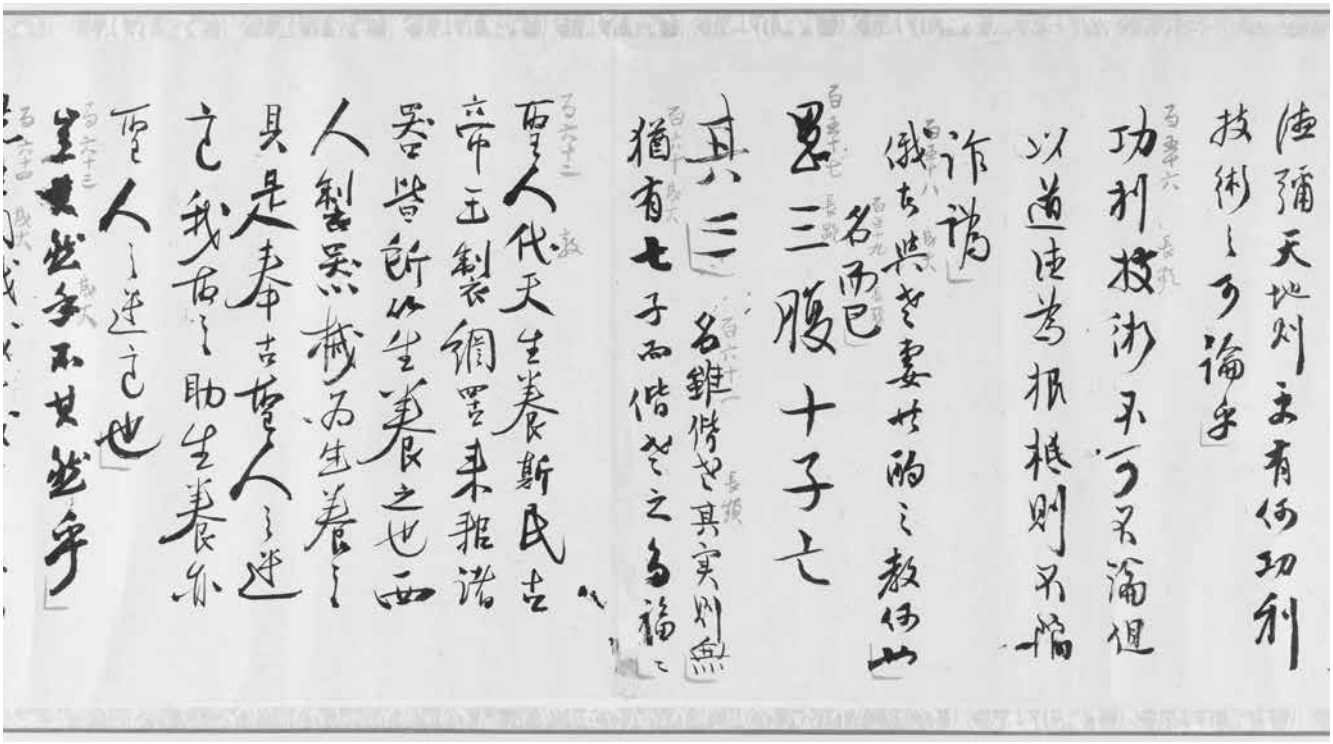


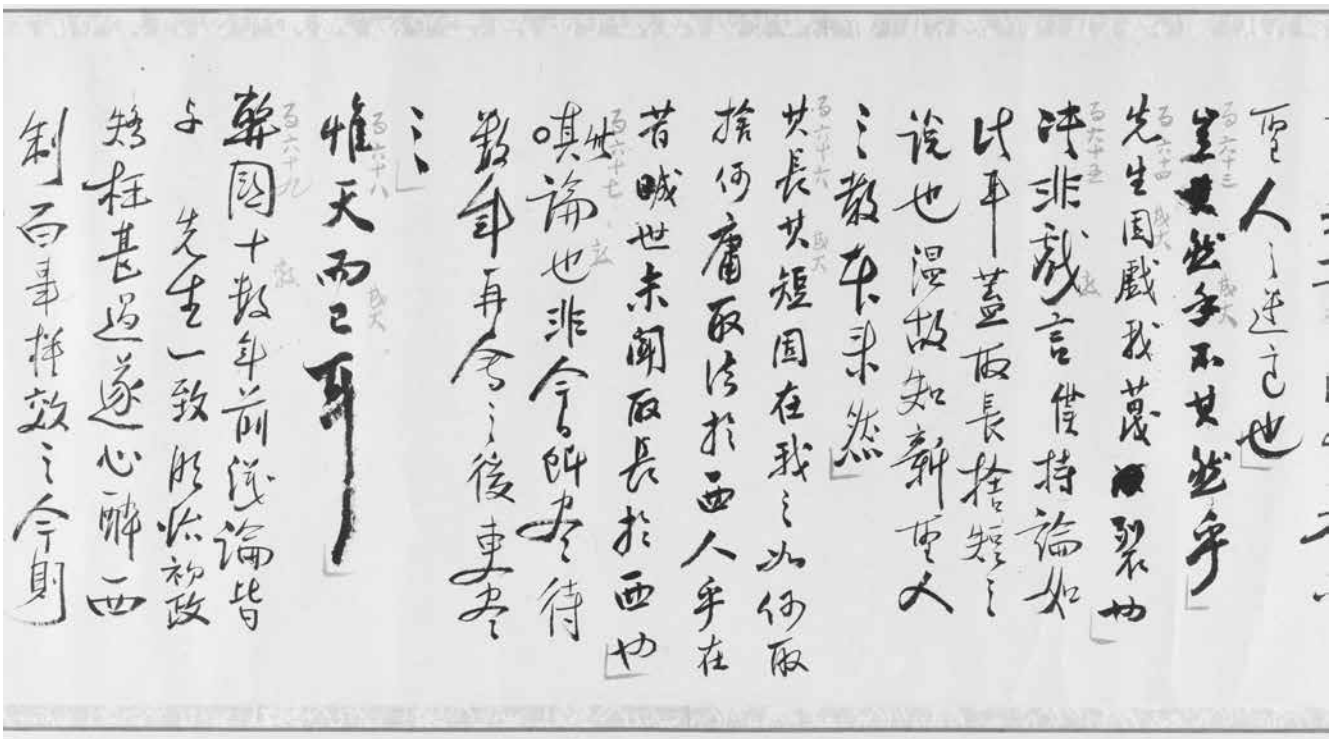


4　『三島中洲・崔成大・川北梅山筆談』一巻（明治十四年1881七月九日）
――朝鮮紳士遊覧団の随員崔成大と三島中洲の筆談（2）（掛軸巻子0261）

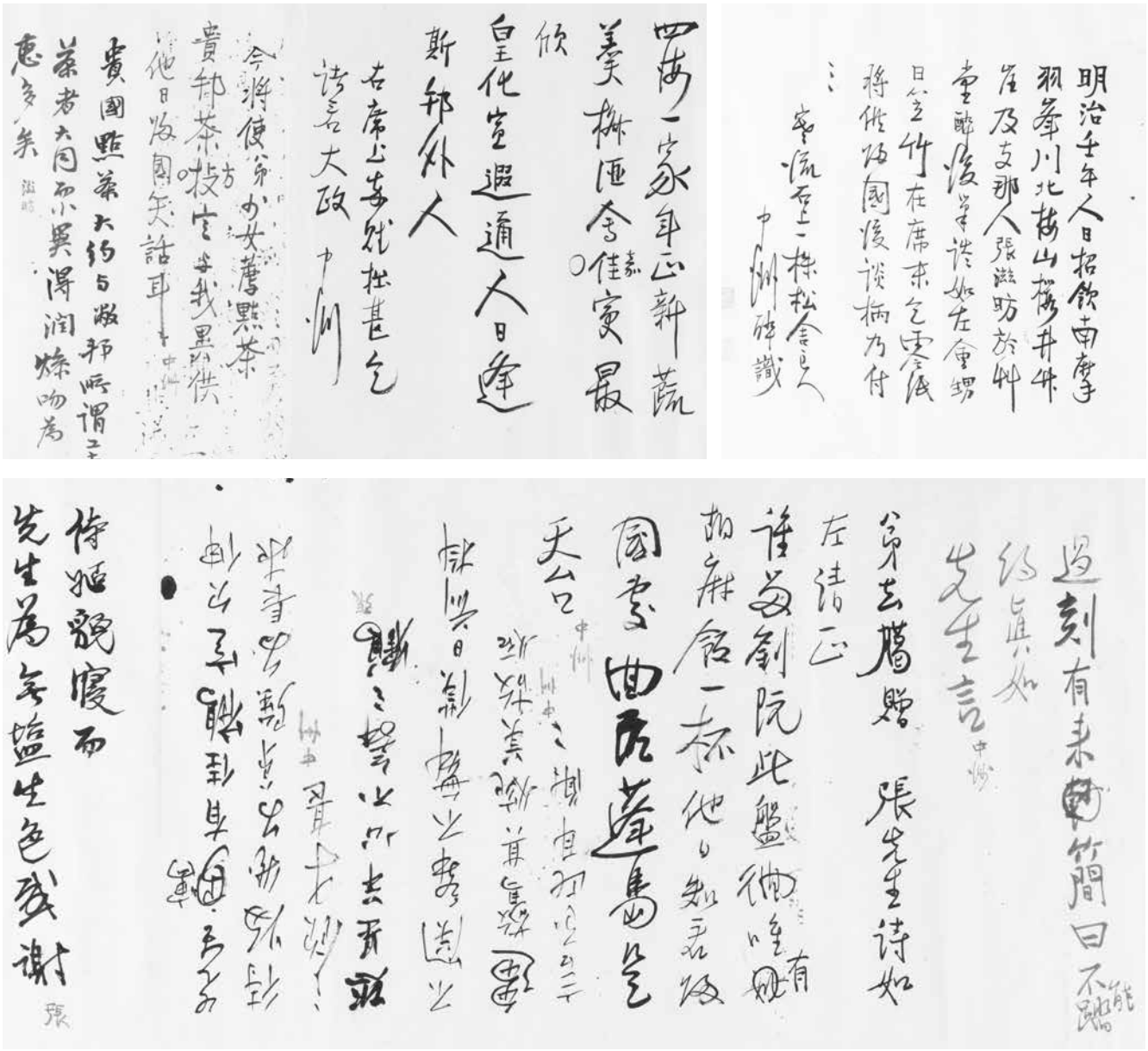
この日の筆談は、詩箋ではなく中洲と崔成大が各自が巻紙を使って書き進めていった。後に中洲が整理番号と筆談者名を朱筆で書き加えた。

中洲の方から近刊の黄遵憲『日本雑事詩』を示して話題にし、これに応じて崔成大は石川鴻斎序にある「悉網羅無遺」を事実かと尋ね、中洲は「蓋諛言耳」と応じている点も注目される。



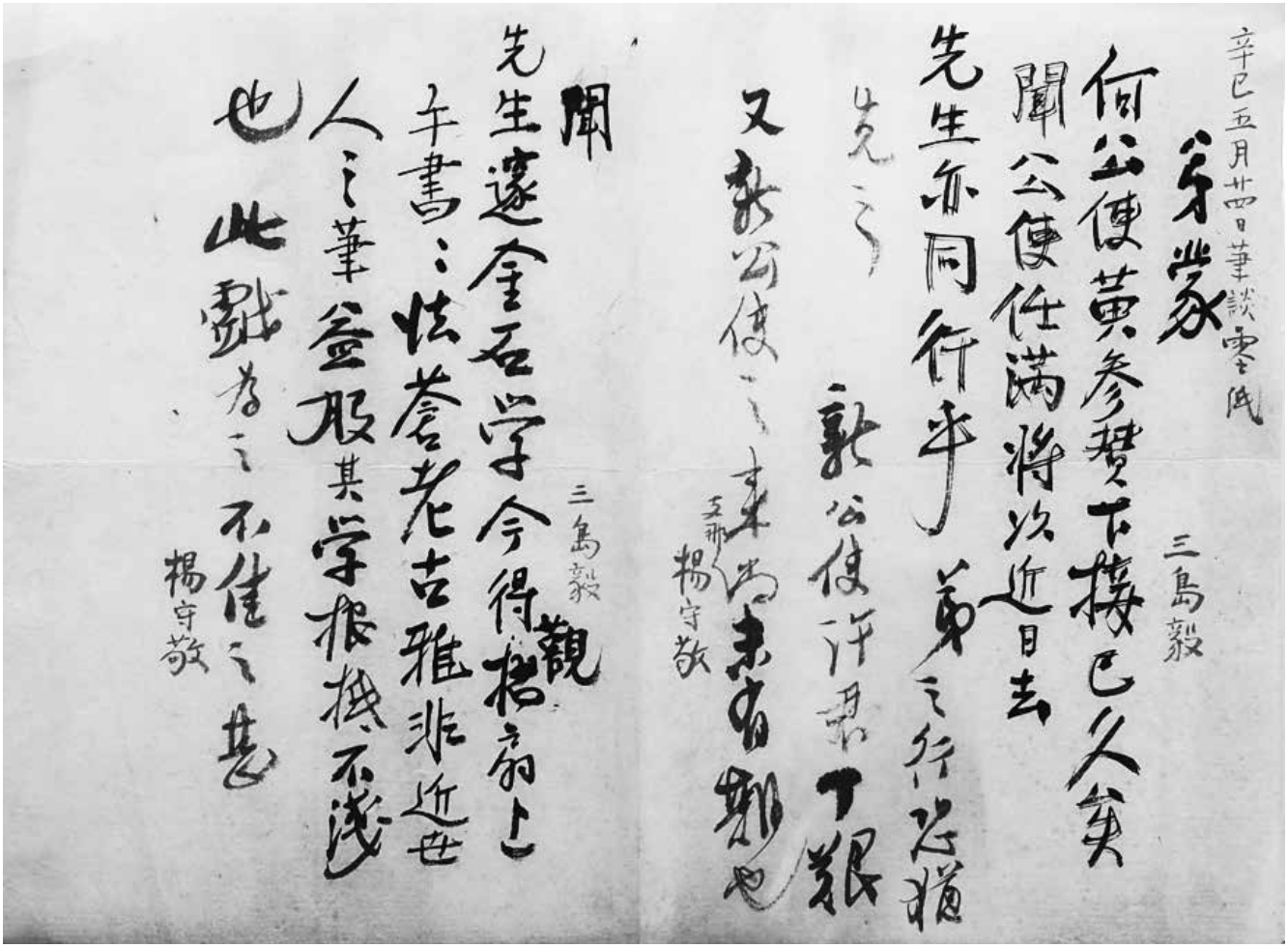


中洲は西洋東洋それぞれの長所を採り短所を捨てる「取長捨短」を主張する。「取長捨短」は「東洋道徳、西洋芸術」と同義のようにも見えるが、崔成大が根幹である東洋の道徳を堅持し西洋文明に対する自律的な取捨選択を主張する典型的な「東洋道徳、西洋芸術」の考え方であるのに対して、中洲は為政者が天に代わって民衆の生活を扶助する点において中国古代の聖人も西洋の科学技術も天から見れば同等であると言っている点、また「忠信」というような人間関係の基本的徳目において東洋人も西洋人もなく同胞であるとする点などから、崔成大とは考え方を異にしていることが分かる。



5　『迎春筆談』一巻（明治十五年1882一月七日）　日笠斐夫旧蔵（掛軸巻子0277）
――清人張滋昉と三島中洲・川北梅山・南摩羽峰・桜井竹崖の筆談

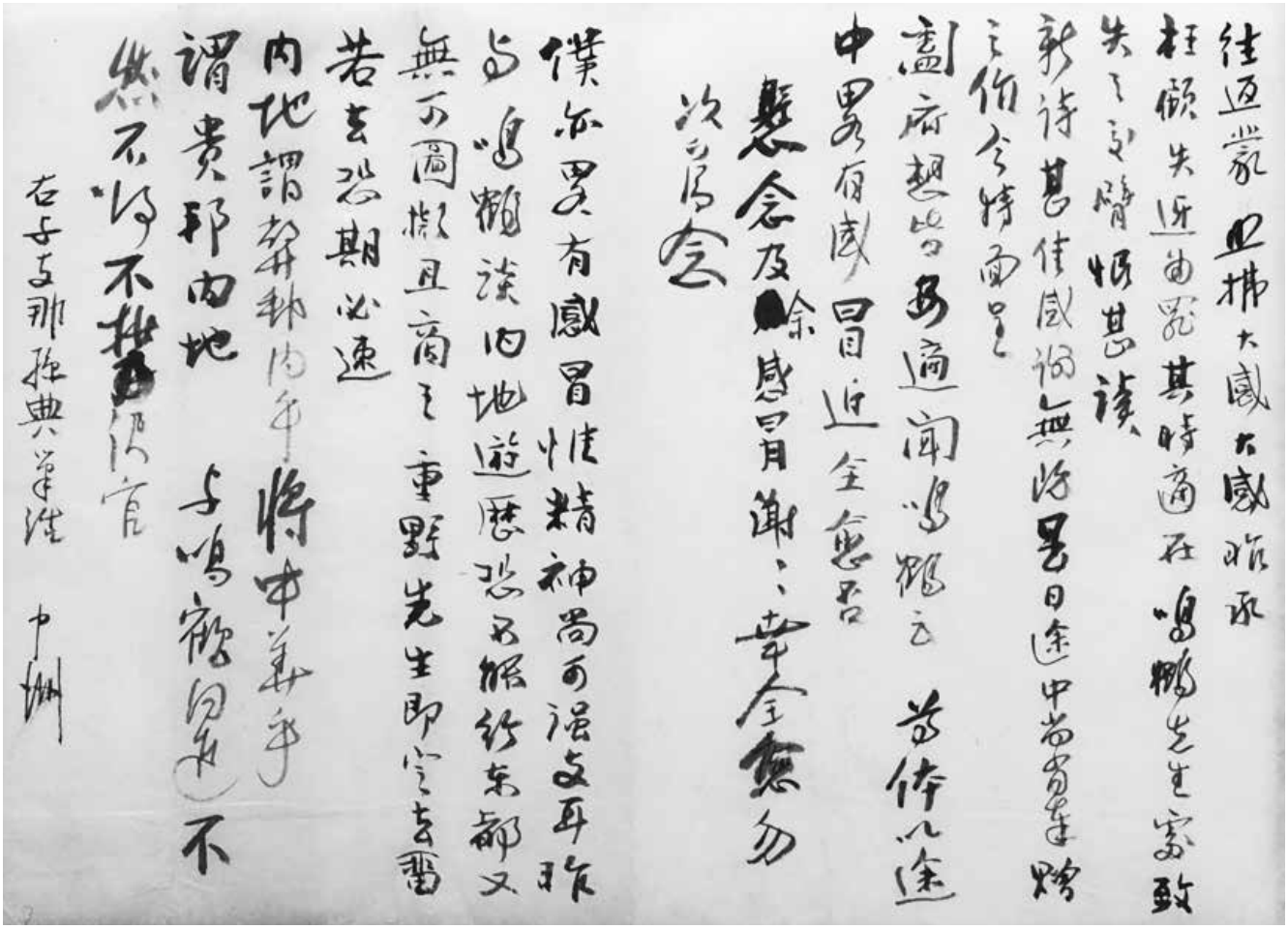
張滋昉（1839 ～ 1900）は、明治 9 年に台湾問題の外交交渉のために北京を訪れた副島種臣と交流し、軍人曽根俊虎に北京官話を教えたことがきっかけで、明治 12 年に来日し 20 年間日本に滞在した。興亜会支那語学校、慶應義塾、帝国大学文科大学漢学科、東京高等商業学校で中国語を教えた。明治 15 年正月、自宅に南摩羽峰・川北梅山・桜井竹崖・張滋昉を招いた中洲は、茶菓や酒肴を饗しながら、張滋昉との筆談を楽しんだ。張が一緒に暮らしていた日本女性を話題に大いに盛り上がっている。



6 『三島中洲・楊守敬筆談』一紙（明治十四年1881五月二十四日）　西三島家旧蔵

三島中洲の生家である西三島家の子孫から寄贈を受けた資料の中に含まれていた中洲と楊守敬の筆談。これまで知られていなかった新出資料である。中洲は、楊守敬の金石学に関する造詣と書法に対して強い印象を受けたらしく、ちょうど約１か月後に行われた崔成大・張滋昉との筆談（展示資料４）に際にも、張滋昉に対して最近来日した金石学に造詣の深い楊守敬のことを知っているかと尋ねている。

この筆談は、前半部分が、明治 14 年 5 月当時の清国公使館の状況をめぐるやり取りである。中洲は、任期満了に伴い初代公使何如璋の帰国も近いであろう、その時に楊守敬も一緒に帰国するのかと質問し、これに対して楊守敬は次期公使に任命（明治 13 年 12 月）された許景澄が尊属の服喪（丁艱）によって赴任せず、新公使の来任までにはまだ間があるだろうと答えている。第２代公使黎庶昌が翌 15 年２月に着任するまで何如璋が離任できなかった時期のことである。

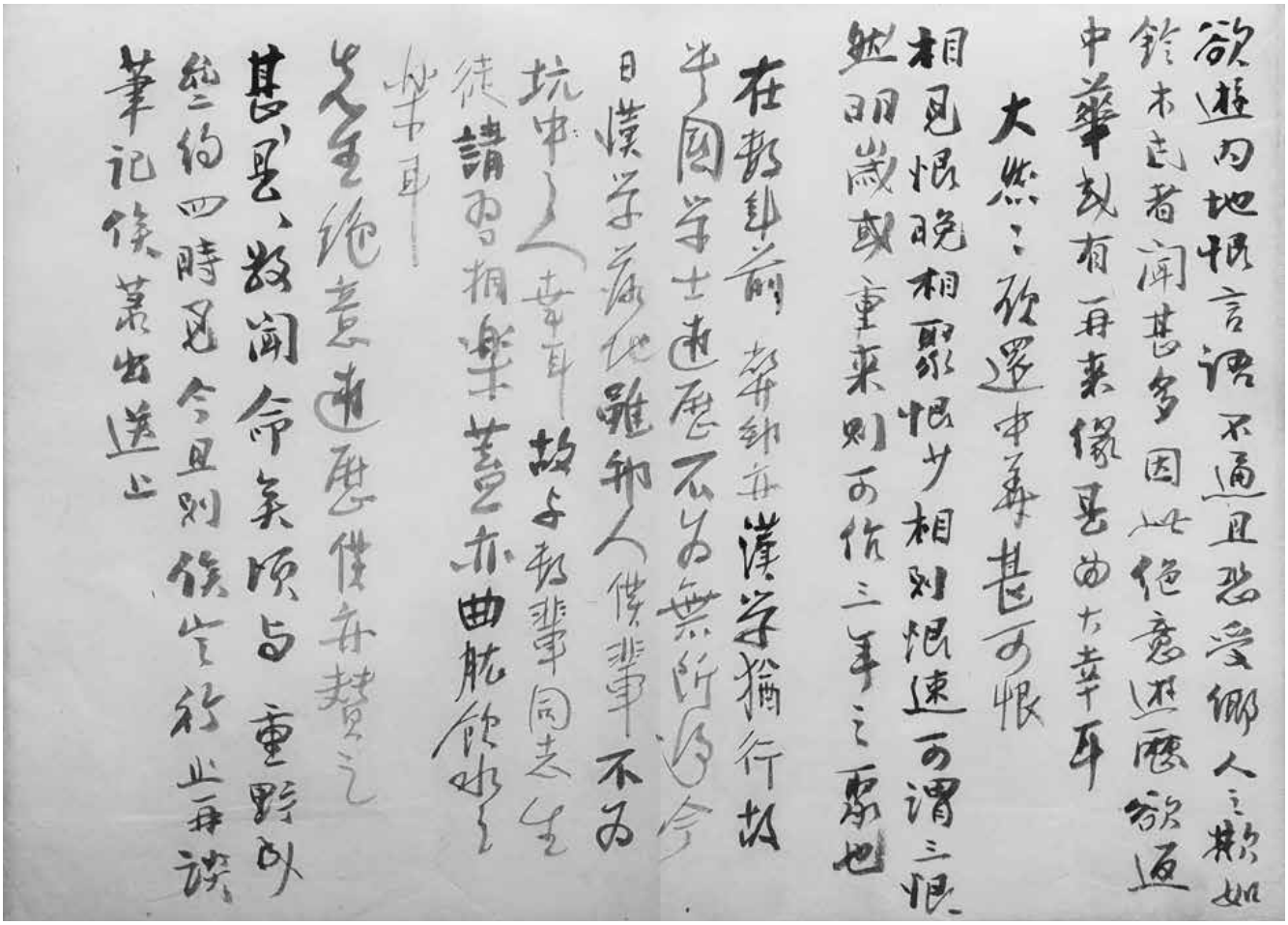


7　『三島中洲・孫点筆談』二紙（明治二十年1887五月二日）　西三島家旧蔵

清国公使館随員の孫点（1855 ～ 1891、字君異、号頑石）と中洲の筆談も、従来その存在が知られておらず、西三島家資料の中から今回新たに見つかった新出資料である。

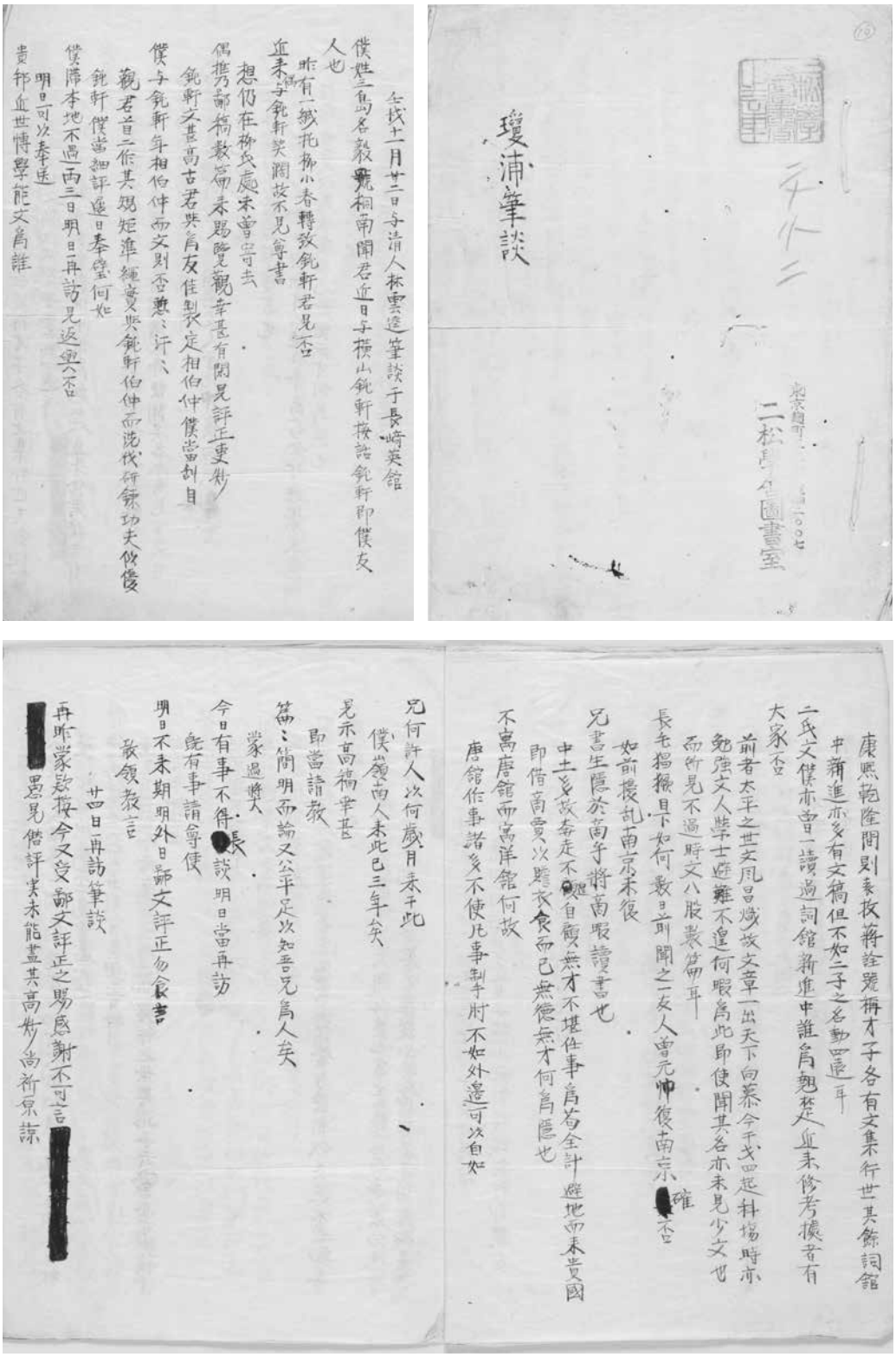
孫点の「三恨」（P.21 写真 5 行目）云々の言葉から、両者は最近急速に親交するに至ったことが分かる。

陳捷氏によって翻刻された孫点の『夢梅華館日記』を参照すると（『日記』巻 20）、孫点と中洲が初めて会ったのは、明治 20 年 4 月 1 日のことであり、その後、甲州の書画商鈴木善次郎の要請によって、彼らは山梨県南部で開かれる「南甲文墨会」のために 4 月 22 日に出発することになった。外に書家日下部鳴鶴や政治家後藤象二郎、実業家大江卓らが同行した。彼らは南都留郡谷村の西涼寺を宿所として書画会や名所見物をして、4 月 29 日に帰京した。



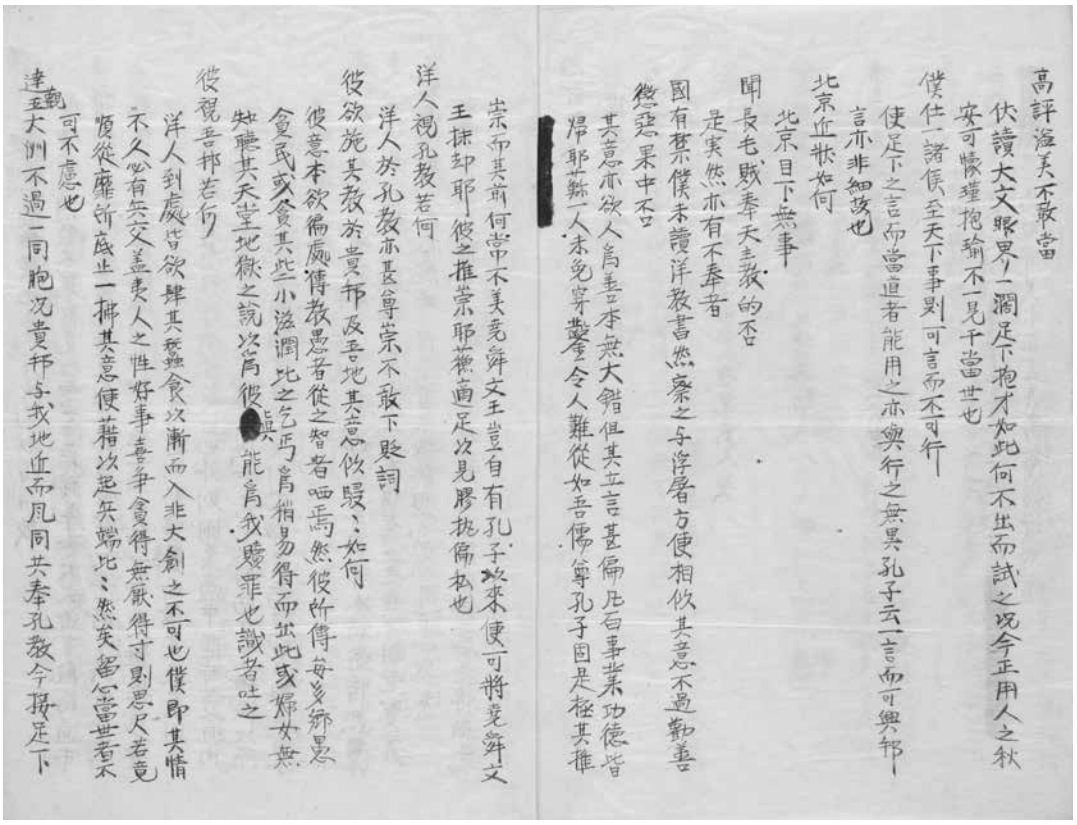
筆談が5月2日（旧暦4月10日）に行われたものであることは、孫点『日記』4月9日条に日下部鳴鶴を訪問してあらためて内地歴遊について相談し、4月10日条に「午後訪中洲久談」とあり、その後「四時到重野成斎家、尚未返…」とあることが、筆談の内容とよく一致することから分かる。

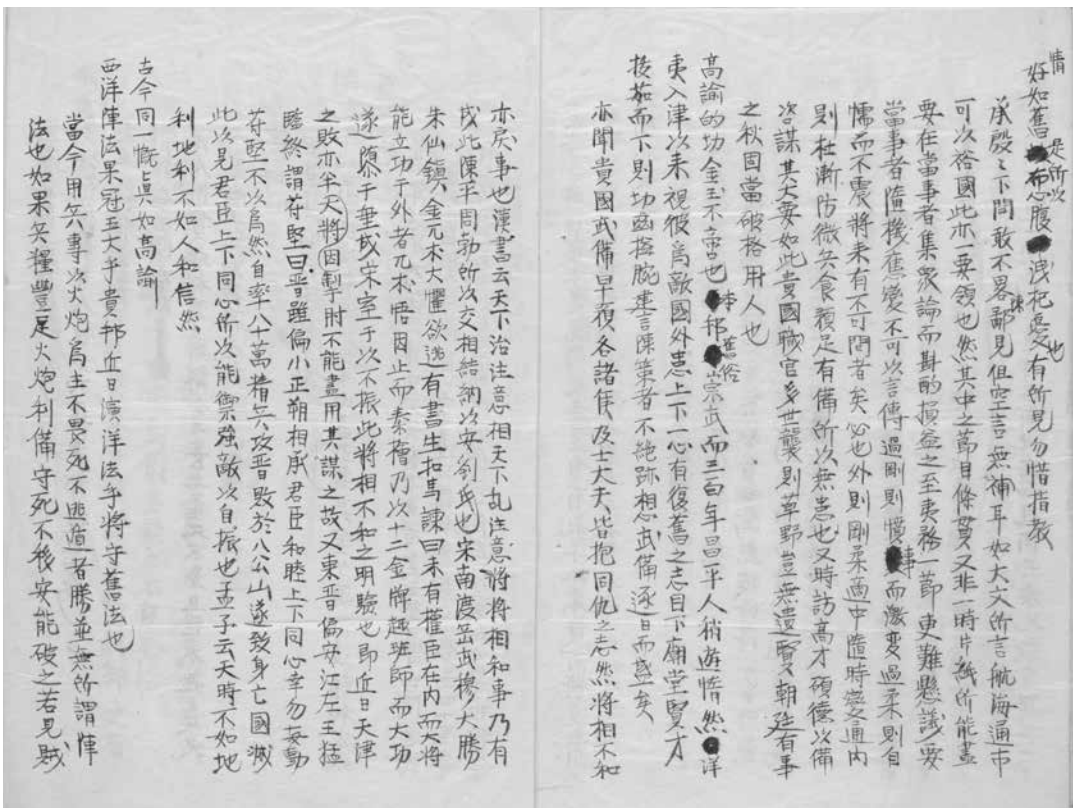
孫点にとっては、書画会における潤筆料の少なさは全く想定外のものであったらしく、その原因を書画商に欺かれたと考えている。これに対して、中洲は同年7月に再び鈴木善次郎の招きに応じて甲州に赴いていることから、問題は西涼寺における書画会の主催者の側にあると判断していた模様である。



8 『瓊浦筆談』一冊、三島中洲自筆本（文久二年1862十一月二十二日・二十四日）——三島中洲と清人林雲逵の長崎における筆談（和装本0026）

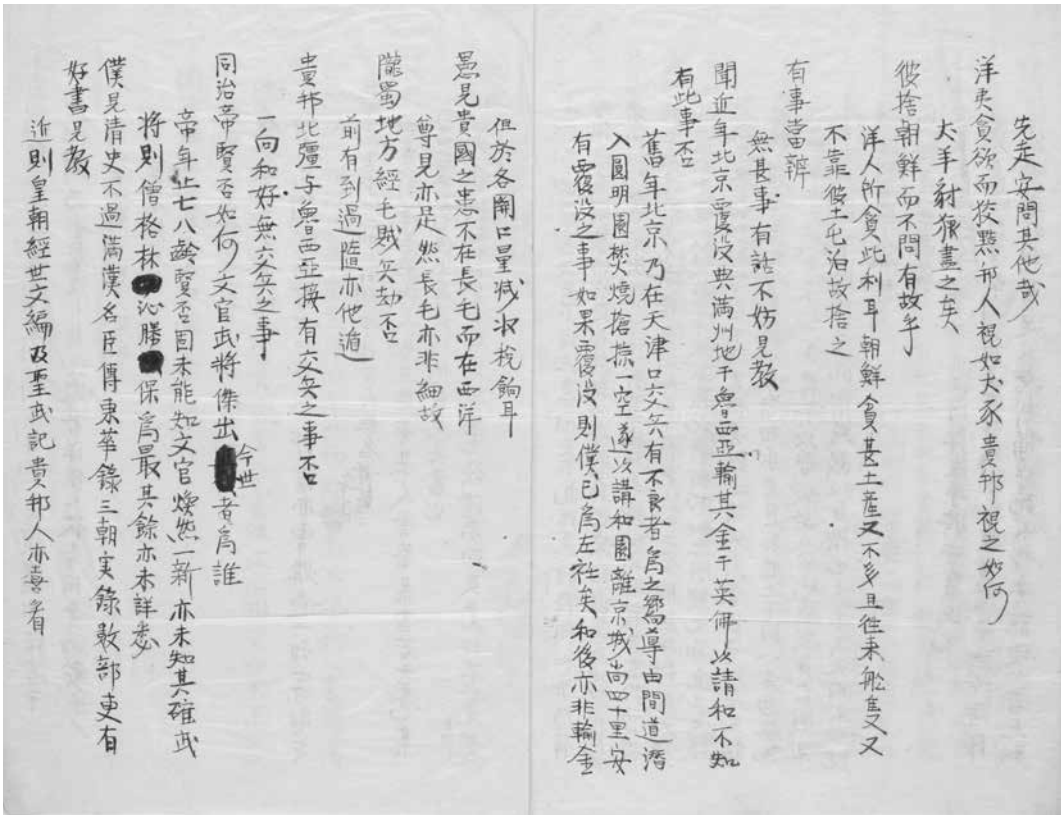
中洲が藩命を受けて西国探索中の文久２年 11 月 22 日・24 日に、長崎大浦の英館に身を寄せていた清商林雲逵と筆談した際の筆談録。記録用に携行していた薄い用箋に記され、折りたたまれた皺の痕も残ることから、西国探索中に纏められた原本と思われる。初日、中洲は自己紹介を兼ねて詩文稿を林雲逵に示し批評を請うた。林雲逵は嶺南出身で、長崎に来て３年になると答えた。



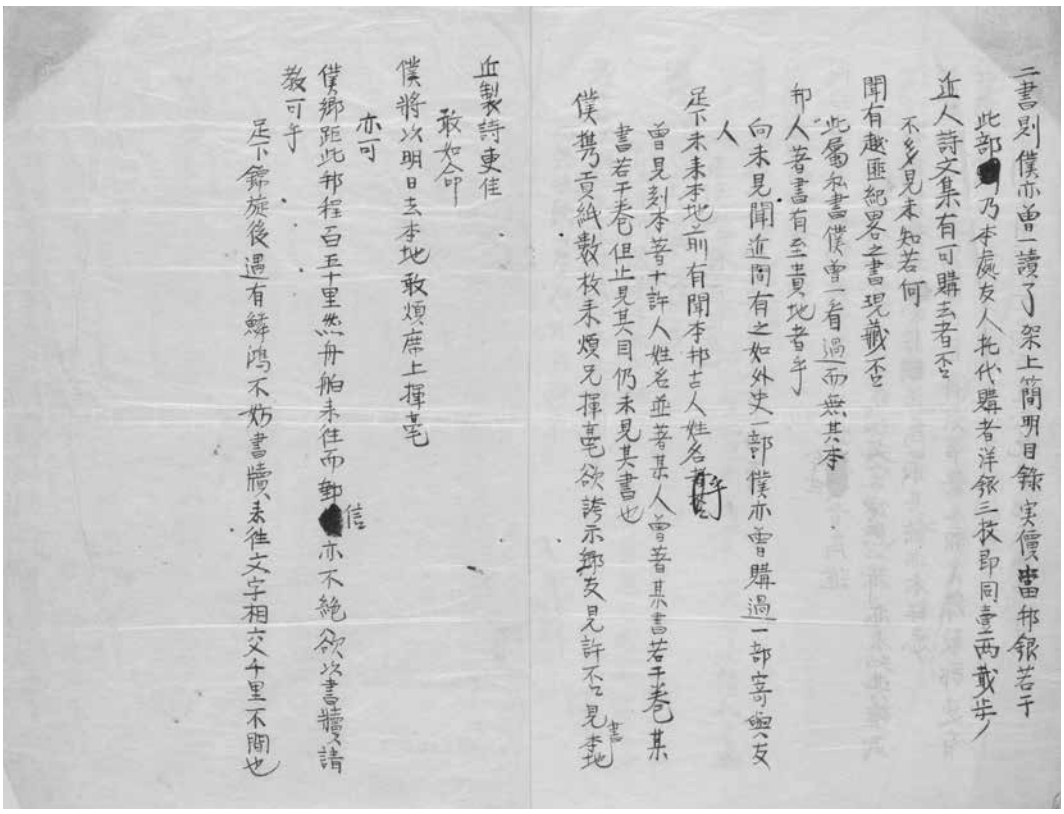


高評溢美不敢當
伏讀大文眼界一濶足下抱才如此何不出而試之況今正用人之秋
安可懷瑾抱瑜不一見于當世也
僕仕一諸侯至天下事則可言而不可行
使足下之言而當道者能用之亦與行之無異孔子云一言而可興邦
言亦非細故也
北京近狀如何
北京目下無事
聞長毛賊奉天主教的否
是実然亦有不奉者
國有禁僕未讀洋教書然察之与浮屠方便相似其意不過勸善
懲惡果中否
其意亦欲人爲善本無大錯但其立言甚偏凡百事業功德皆
帰耶蘇一人未免穿鑿令人難從如吾儒尊孔子固是極其推
崇而其前何嘗不美堯舜文王豈自有孔子以來便可將堯舜文
王抹却耶彼之推崇耶蘇適足以見膠執偏私也
洋人視孔教若何
洋人於孔教亦甚尊崇不敢下貶詞
彼欲施其教於貴邦及吾地其意似駸駸如何
彼意本欲徧處傳教愚者從之智者哂焉然彼所傳每多鄉愚
貪民或貪其些小滋潤比之乞丐爲稍易得而出此或婦女無
知聽其天堂地獄之說以爲彼眞能爲我贖罪也識者吐之
彼視吾邦若何
洋人到處皆欲肆其蠶食以漸而入非大創之不可也僕即其情
不久必有矣交蓋夷人之性好事喜爭貪得無厭得寸則思尺若竟
順從靡所底止一拂其意便藉以起兵端比比然矣留心當世者不
可不慮也
達觀五大洲不過一同胞況貴邦与我地近而風同共奉孔教今接足下
情
好如舊是所以布心腹洩托憂也有所見勿惜指教
承殷殷下問敢不畧陳鄙見但空言無補耳如大文所言航海通市
可以裕國此亦一要領也然其中之節目條貫又非一時片紙所能盡
要在當事者集衆論而斟酌損益之至夷務一節更難懸議要
當事者隨機應變不可以言傳過剛則憤事而激變過柔則自
懦而不震將來有不可問者矣必也外則剛柔適中隨時變通內
則杜漸防微兵食穀足有備所以無患也又時訪高才碩德以備
咨謀其大要如此貴國職官多世襲則草野豈無遺賢朝廷有事
之秋固當破格用人也
高論的功金玉不啻也本邦舊俗崇武而三百年昌平人稍遊惰然洋
夷入津以來視彼爲敵國外患上下一心有復舊之志目下廟堂賢才
接茹而下則功函掩腕建言陳策者不絕跡想武備逐日而盛矣
亦聞貴國武備早復各諸侯及士大夫皆抱同仇之志然將相不和
亦戾事也漢書云天下治注意相天下乱注意將將相和事乃有
成此陳平周勃所以交相結納以安劉氏也宋南渡岳武穆大勝
朱仙鎮金兀朮大懼欲逃有書生扣馬諫曰未有權臣在內而大將
能立功于外者兀朮悟因止而秦檜乃以十二金牌趣班師而大功
遂隳于垂成宋室于以不振此將相不和之明驗也即近日天津
之敗亦半天將因掣肘不能盡用其謀之故又東晉偏安江左王猛
臨終謂苻堅曰晉雖偏小正朔相承君臣和睦上下同心幸勿妄動
苻堅不以爲然自率八十萬精兵攻晉敗於八公山遂致身亡國滅
此以見君臣上下同心所以能禦強敵以自振也孟子云天時不如地
利地利不如人和信然
古今同一慨眞如高論
西洋陣法果冠五大乎貴邦近日演洋法乎將守舊法也
當今用兵專以火炮爲主不畏死不逃遁者勝並無所謂陣
法也如果兵糧豐足火炮利備守死不移安能破之若見賊

11 月 24 日の再訪時は、中洲から林雲逵に対して、西洋人の東洋侵略をめぐる諸問題についてさまざまに質問している。西洋人のキリスト教布教と儒教に対する態度、西洋人の日本に対する見方、西洋式の軍備にすることの是非などである。林雲逵は、従来のやりかたに捉われない破格の人材登用や身分の上下に関係ない一致団結が必要であることを腹蔵なく説いた。

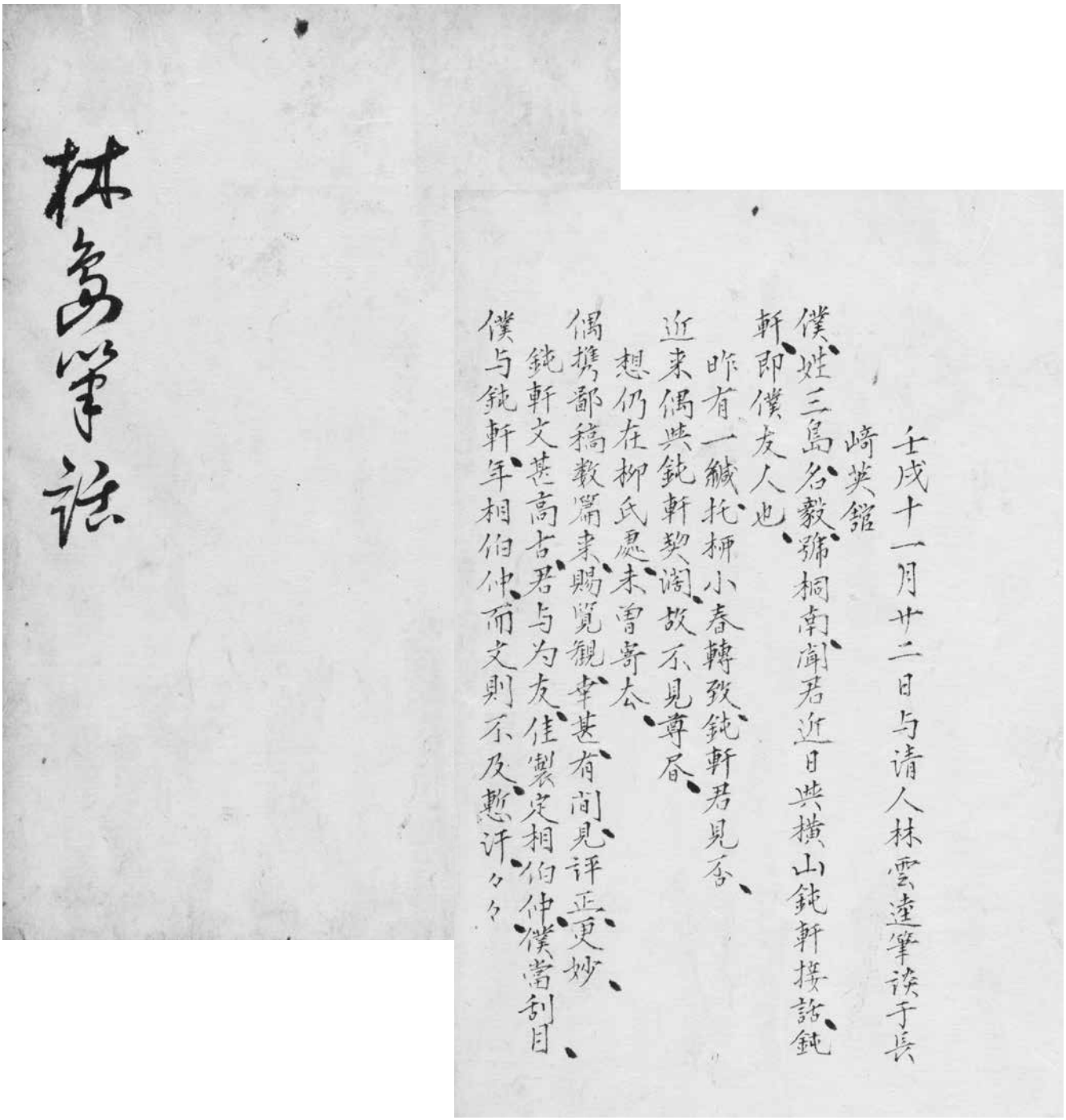


先走安問其他哉
洋夷貪欲而狡黠邦人視如犬豕貴邦視之如何
犬羊豺狼盡之矣
彼捨朝鮮而不問有故乎
洋人所貪此利耳朝鮮貪甚土產又不多且往來船隻又
不靠彼土屯泊故捨之
有事當辨
無甚事有話不妨見教
聞近年北京覆沒與滿州地于魯西亞輸其金于英佛以請和不知
有此事否
舊年北京乃在天津口交兵有不良者爲之嚮導由間道潛
入圓明園焚燒搶掠一空遂以講和園離京城尚四十里安
有覆沒之事如果覆沒則僕已爲左衽矣和後亦非輸金
但於各開口量減收稅餉耳
愚見貴國之患不在長毛而在西洋
尊見亦是然長毛亦非細故
隴蜀地方經毛賊兵劫否
前有到過隨亦他遁
貴邦北疆与魯西亞接有交兵之事否
一向和好無交兵之事
同治帝賢否如何文官武將傑出今世者爲誰
帝年止七八齡賢否固未能知文官煥然一新亦未知其確武
將則僧格林沁勝保爲最其餘亦未詳悉
僕見清史不過滿漢名臣傳東華錄三朝實錄數部吏有
好書見教
近則皇朝經世文編及聖武記貴邦人亦喜看



二書則僕亦曾一讀了架上簡明目錄實價當邦銀若干
此部乃本處友人托代購者洋銀三枚即同壹兩載步
近人詩文集有可購去者否
不多見未知若何
聞有越匪紀畧之書現藏否
此屬私書僕曾一看過而無其本
邦人著書有至貴地者乎
向未見聞近間有之如外史一部僕亦曾購過一部寄與友
人
足下未來本地前有聞本邦古人姓名乎
曾見刻本著十許人姓名並著某人曾著某書若干卷某
書若干卷但止見其目仍未見其書也
僕携貢紙數枚來煩兄揮毫欲誇示鄉友見許否見書本地
近製詩更佳
敢如命
僕將以明日去本地敢煩席上揮毫
亦可
僕鄉距此邦程百五十里然舟船來往而郵信亦不絕欲以書牘請
教可乎
足下錦旋後遇有鱗鴻不妨書牘來往文字相交千里不間也

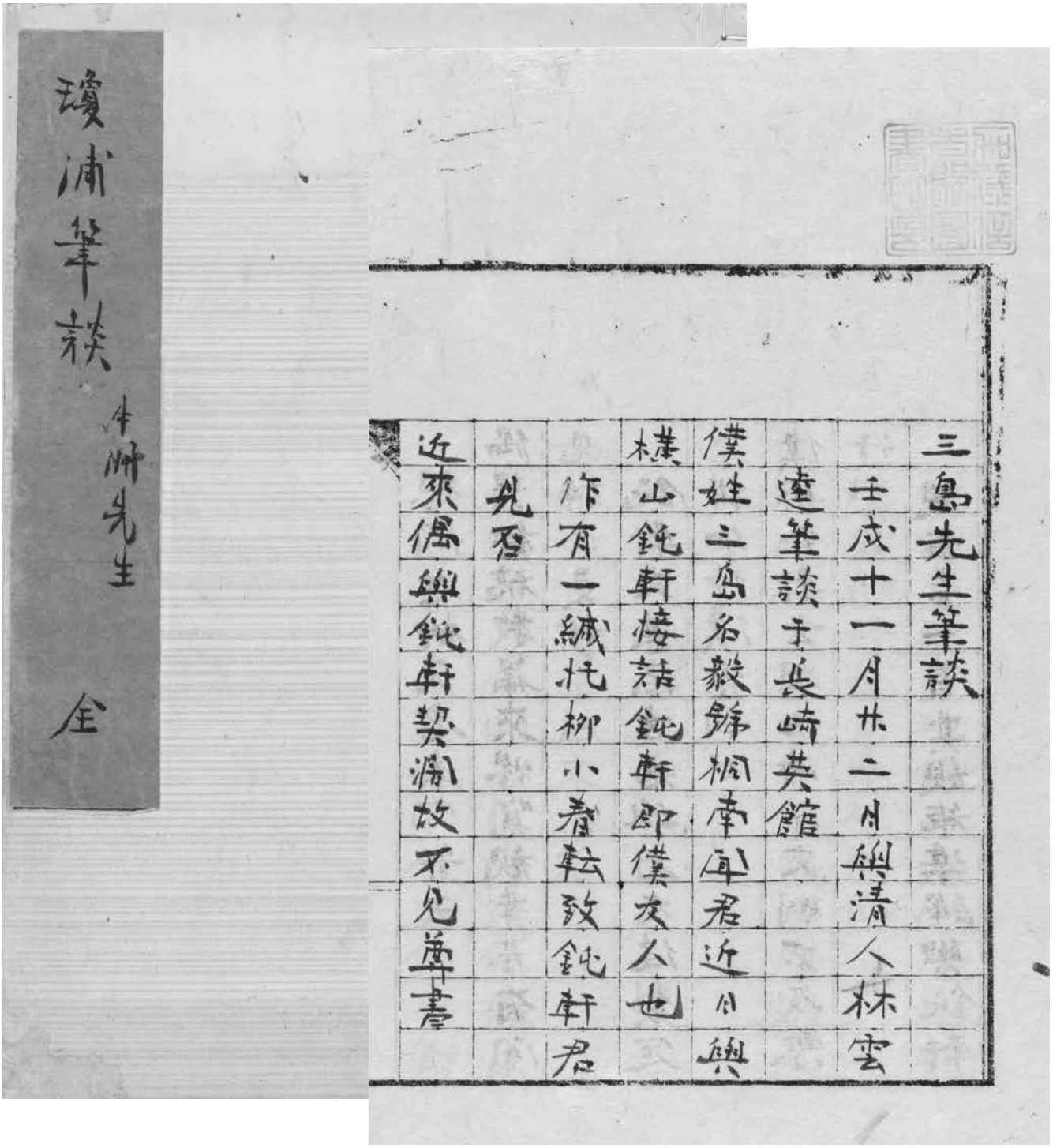
西洋人の朝鮮に対する見方、太平天国軍や西洋列強の北京侵攻の現状、同治帝や文官武官の賢愚、清朝の出版物・詩文をめぐる質疑などである。中洲が積極的に海外情報を収集する様子が看取される。



9 林島筆話（瓊浦筆談）』一冊、阪谷朗廬旧蔵

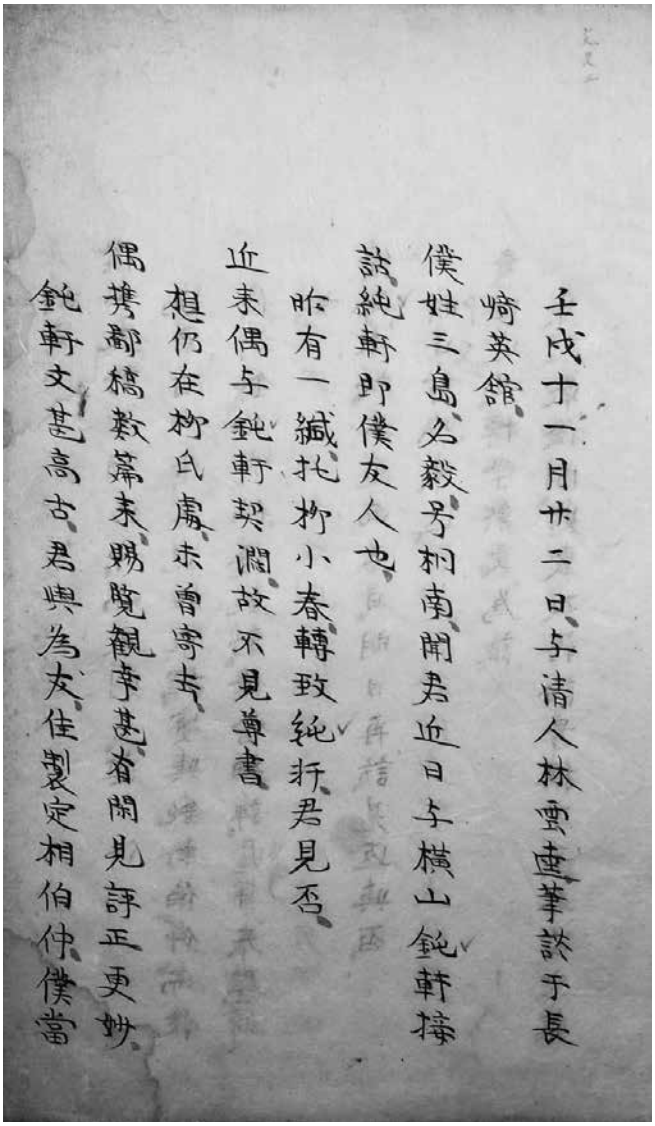
備中井原の漢学者阪谷朗廬（1822 ～ 1881）は中洲と幕末以来親交のあった人物で、中洲が林雲逵と筆談を行ってから一か月後の文久２年 12 月末に、自身も長崎を訪れて林雲逵と筆談して『林阪筆話』（国会図書館憲政資料室や興譲館に伝本あり）を残している。

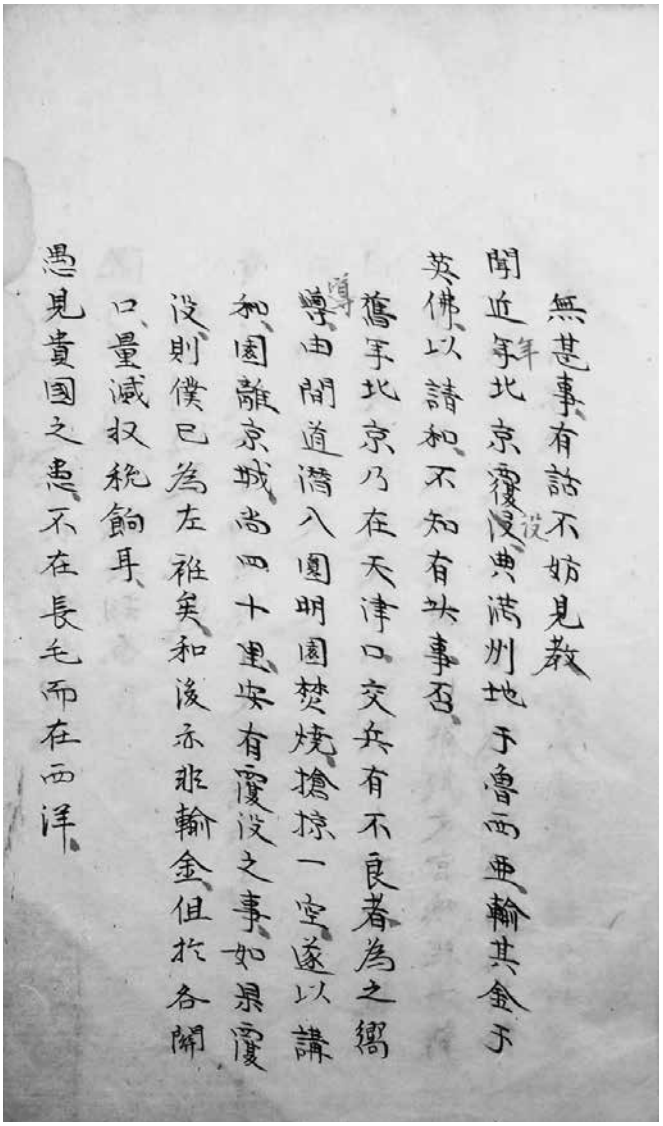
本書は阪谷朗廬の稿本類に含まれている資料で、外題「林島筆話」は阪谷朗廬の筆跡であり、自分自身の筆談「林阪筆話」とセットとして阪谷によって与えられた書名と考えられる。



10　『瓊浦筆談』一冊、加藤復斎写本（明治二十〜三十年代）(kf465)

加藤復斎（信太郎）は陸前遠田郡涌谷（宮城県北部）の出身で、明治 24 年に上京して漢学塾二松学舎に学び、同 28 年 11 月に助教となり、同 35 年に塾頭となる。二松学舎の外、斯文学会などでも聴講し、後に備前閑谷学校や徳島富岡中学校において漢学を授けた。加藤は三島中洲の著書や講義録をよく筆写しており、『瓊浦筆談』もその中の一点である。

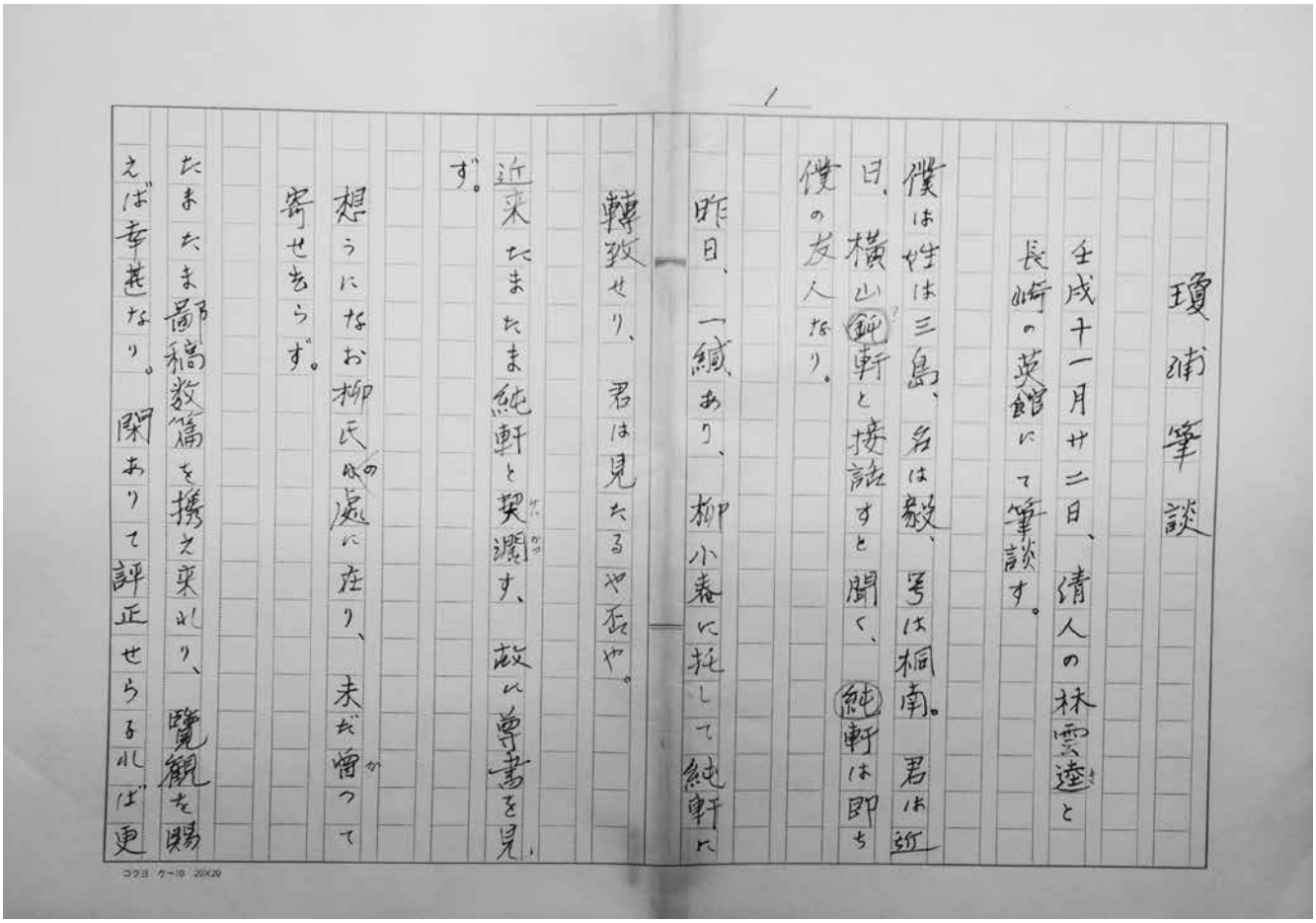




壬戌十一月廿二日与清人林雲壺筆談于長
崎英館
僕姓三島名毅号柯南聞君近日与横山鈍軒接
話純軒即僕友人也
昨有一緘托柳小春轉致純軒君見否
近来偶与鈍軒契濶故不見尊書
想仍在柳氏處未曾寄去
偶携鄙稿數篇来賜覧観幸甚有閑見評正更妙
鈍軒文甚高古君與為友佳製定相伯仲僕當
無甚事有話不妨見教
聞近年北京覆没典滿州地于魯西亜輸其金于
英佛以請和不知有此事否
舊年北京乃在天津口交兵有不良者為之嚮
導由間道潜入圓明園焚燒搶掠一空遂以講
和園離京城尚四十里安有覆没之事如果覆
没則僕已為左衽矣和後亦非輸金但於各關
口量減収稅餉耳
愚見貴國之患不在長毛而在西洋

11 『瓊浦筆談』一冊（江戸末頃写）　西三島家旧蔵

三島中洲の生家である西三島家に伝えられた江戸末期頃と見られる写本『瓊浦筆談』。恐らく、西国探索から戻った中洲から兄舒太郎に宛てて、近隣諸国の動静を知らせるために贈られたものであろう。


瓊浦筆談

壬戌十一月廿二日、清人の林雲逵と
長崎の英館にて筆談す。

僕は姓は三島、名は毅、号は桐南。君は近
日、横山鈍軒と接話すと聞く、純軒は即ち
僕の友人なり。

昨日、一緘あり、柳小春に托して純軒に
轉致せり、君は見たるや否や。

近来たまたま純軒と契濶す、故に尊書を見
ず。

想うになお柳氏の處に在り、未だ曾つて
寄せしらず。

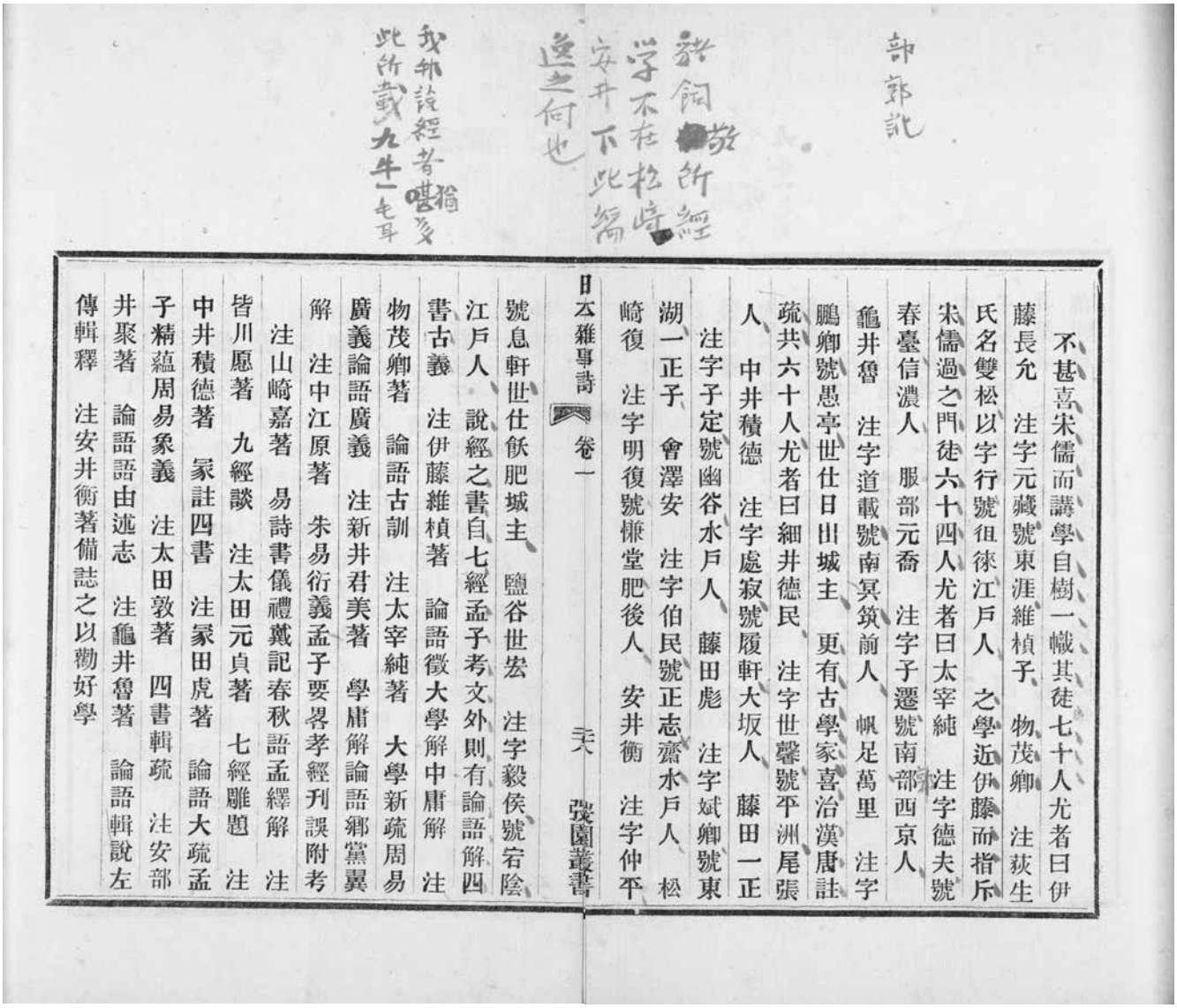
たまたま鄙稿数篇を携え来れり、覽観を賜
えば幸甚なり。閑ありて評正せらるれば更

12　『瓊浦筆談』一冊、西三島家旧蔵
――山田琢によって訓読されたもの

昭和期の漢学者山田琢（1910 ～ 2000）によって訓読された『瓊浦筆談』で、三島中洲の生家である西三島家に伝えられた。

山田琢は山田準（1867 ～ 1952）の六男で、東京帝大の支那哲文学科を卒業し、第四高等学校・金沢大学の教授を務め、定年退官後、郷里高梁に戻って晩年を送った。

『瓊浦筆談』は広く知られた資料とまでは言えないので、恐らく西三島家に残された写本『瓊浦筆談』を西三島家の子孫（三島甫氏か）が山田琢に報じ、山田琢が西三島家の子孫にその内容を知らせるために訓読文を作成したものと推定される。



不甚喜宋儒而講學自樹一幟其徒七十人尤者曰伊
藤長允　注字元藏號東涯維楨子　物茂卿　注荻生
氏名雙松以字行號徂徠江戶人　之學近伊藤而指斥
宋儒過之門徒六十四人尤者曰太宰純　注字德夫號
春臺信濃人　服部元喬　注字子遷號南部西京人
龜井魯　注字道載號南冥筑前人　帆足萬里　注字
鵬卿號愚亭世仕日田城主　更有古學家喜治漢唐註
疏共六十人尤者曰細井德民　注字世馨號平洲尾張
人　中井積德　注字處寂號履軒大坂人　藤田一正
注字子定號幽谷水戶人　藤田彪　注字斌卿號東
湖一正子　會澤安　注字伯民號正志齋水戶人　松
崎復　注字明復號慊堂肥後人　安井衡　注字仲平

日本雜事詩　卷一　三六　聚園叢書

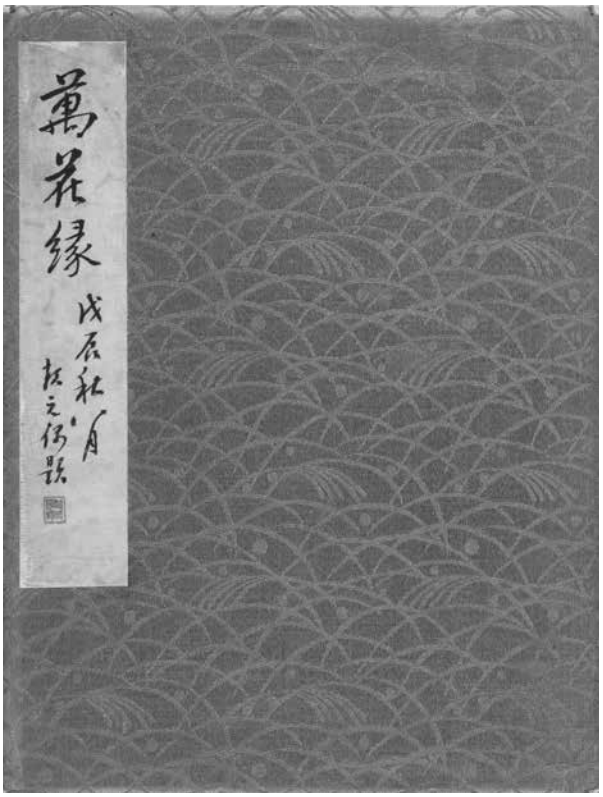
號息軒世仕飫肥城主　鹽谷世宏　注字毅侯號宕陰
江戶人　說經之書自七經孟子考文外則有論語解四
書古義　注伊藤維楨著　論語徵大學解中庸解　注
物茂卿著　論語古訓　注太宰純著　大學新疏周易
廣義論語廣義　注新井君美著　學庸解論語鄉黨翼
解　注中江原著　朱易衍義孟子要畧孝經刊誤附考
注山崎嘉著　易詩書儀禮戴記春秋語孟繹解　注
皆川愿著　九經談　注太田元貞著　七經雕題　注
中井積德著　冢註四書　注冢田虎著　論語大疏孟
子精蘊周易象義　注太田敦著　四書輯疏　注安部
井聚著　論語語由述志　注龜井魯著　論語輯說左
傳輯釋　注安井衡著備誌之以勸好學

13 黄遵憲撰『日本雑事詩』（三島中洲書入本）（漢籍目録P.96下2）

黄遵憲『日本雑事詩』は、光緒5年（1879）正月洪士偉序と光緒六年（1880）2月1日王韜序を冠して、王韜の天南遯屈から金属活字印行された。七言絶句154首を収録している。その後、黄遵憲はロンドン滞在中に原刊本から8首削除し新たに54首を加えて全体に改訂を施し、定本200首として刊行した。七言絶句の後に黄自身による解説の文章が附記され、日本の歴史・地理・風俗・物産・学術・制度等に関する簡要を得た読み物として普及した。

展示資料は三島中洲旧蔵本で、中洲の手で朱筆による句読・批点と批評が加えられている。全体を通覧して、中洲は黄遵憲の詩文の才能や見識を十分に評価したと見てよいが、異論を唱えている点も少なからずあり、その見識に対して単なる称賛ではない中洲なりの評価があったことが分かる。この時期の中洲の考え方を知る上でも、また『日本雑事詩』の発刊当時における評価としても興味深い。

Ⅱ 書画



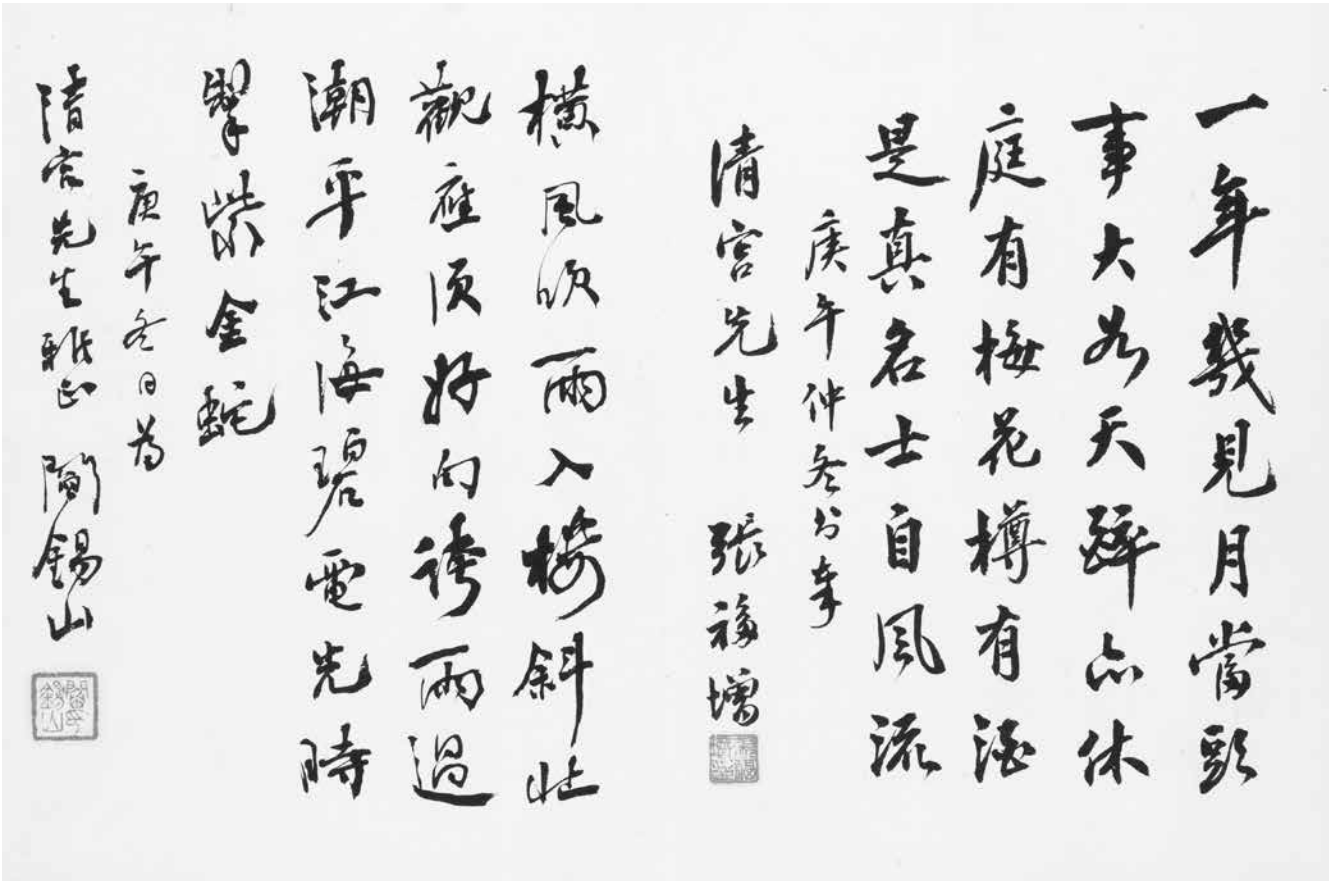
14 書画帖『万花縁』（昭和三～五年1928～1930）

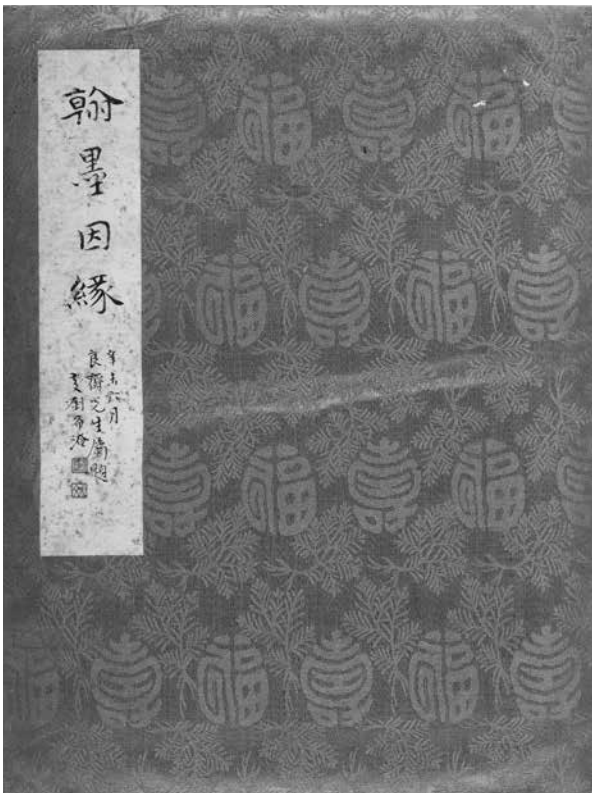
清宮宗親旧蔵（2-64）

清宮宗親（1876 ～ 1936）は漢学塾二松学舎に学び、貴州省貴陽の武備学堂・師範学堂の日本人教習や陸軍の通訳官として中国で活動した人物。30 年に及ぶ中国滞在中、多くの中国人と詩書による交流を続け、中国の学者・軍人・政治家などから贈られた書画を数多く残した。

外題の揮毫は高孟賢（起元）。

主な揮毫者は、曽毓雋（1875~1957）、呉光新（1881~1939）、張弧（1875~1939）、高孟賢、張国淦（1871~1959）、孫伝芳（1885~1935）、張福増（1860~ ？）、閻錫山（1883~1960）、宝熙（1871~1942）、鄒魯（1885~1954）、温都爾親王、車林諾尔布、謝介石（1878~1954）、斎藤恒（1877~1953）、細田剣堂（1858~1945）ら。





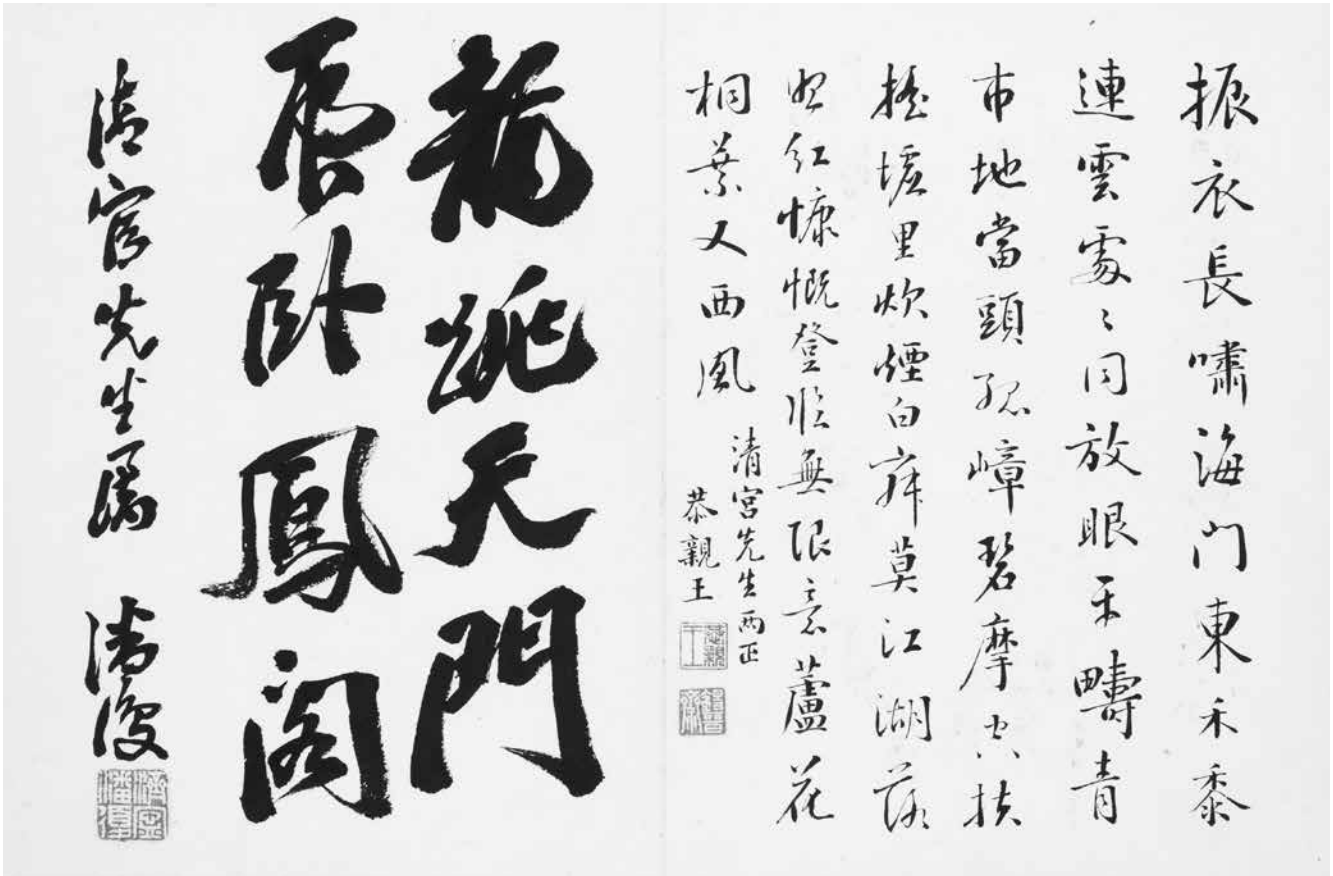
15 書画帖『翰墨因緣』（昭和六年1931）

清宮宗親旧蔵 (2-63)

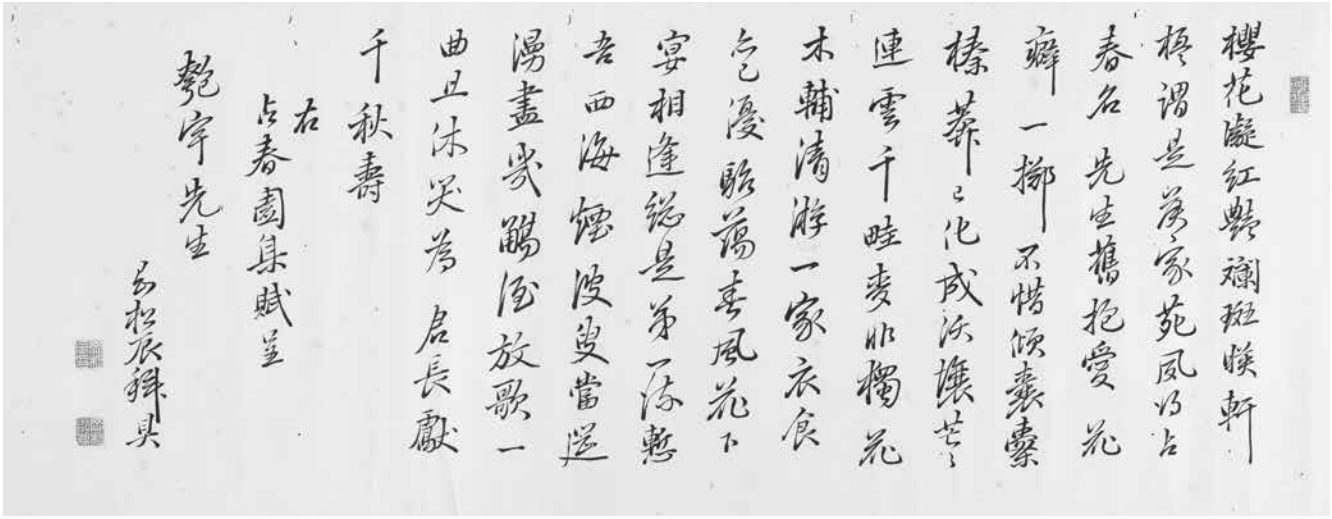
展示資料１４に同じく、清宮宗親が知人の中国人に揮毫を求めた書画帖。

外題の揮毫は劉希淹（叔文）。

1936)、李経方（1855 ～ 1934)、国分三亥（1864 ～ 1962）山田準（1867 ～ 1952)、奥忠彦（1869 ～？)、李思浩（1882 ～ 1968)、西澤道寛（)、菱刈隆（1871 ～ 1952)、呉郁生（1854 ～ 1940)、王**垿**（1857 ～ 1933)、劉希淹。





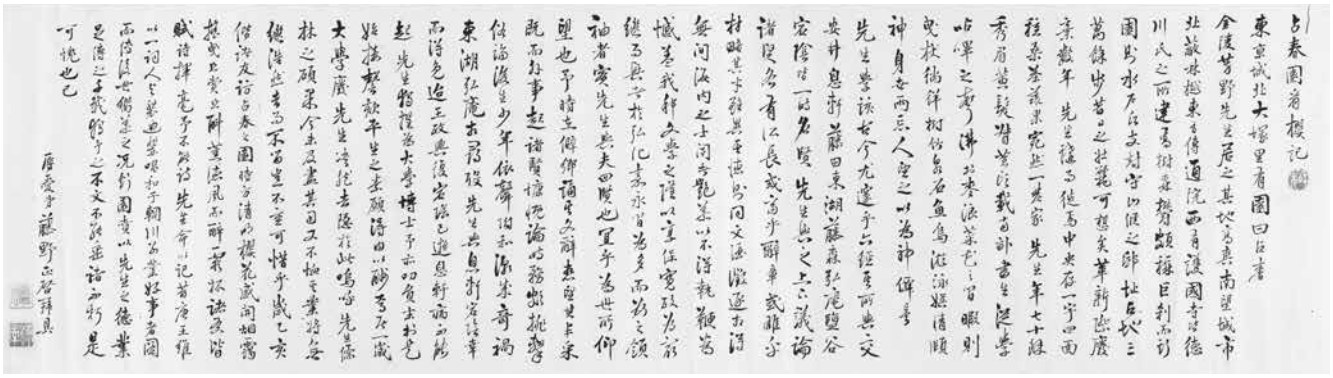


岡松甕谷「占春園集賦呈匏宇先生」

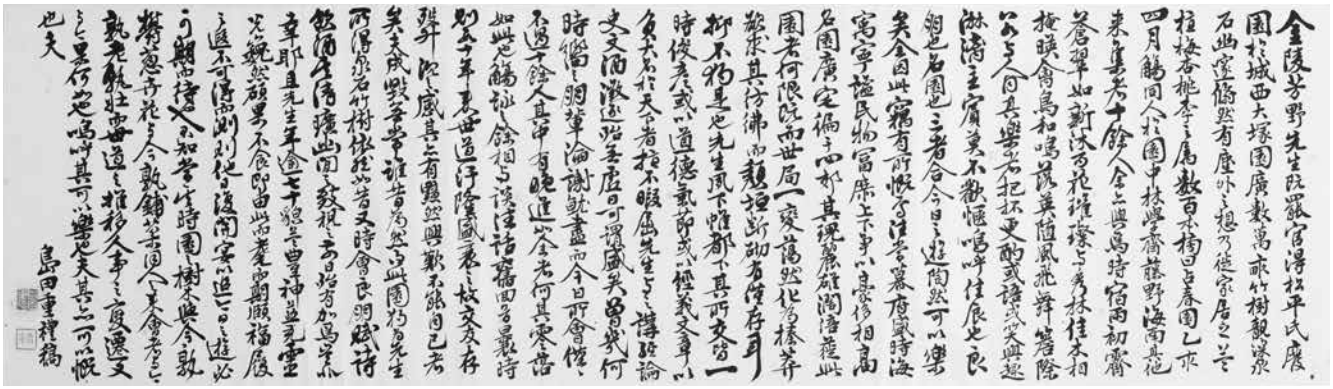
16 『占春園詩文巻』一巻（明治八年1875四月）芳野家旧蔵
——芳野金陵の占春園雅宴における金陵門下たちの詩文

明治３年に大学中博士を免官となった芳野金陵は、「帰農の時勢」になったと考え、明治６年に大塚（小石川窪町）の旧守山藩邸（水戸支藩）33,000 坪あまりを 1600 両で購入。翌年大塚に転居し晴耕雨読の餘生を送った。明治８年４月 16 日に金陵は江戸屈指の大名庭園として知られた自邸内の占春園に観桜の宴を開いた。展示品はその際に製作された詩文を装丁したもの。題画は橋本雪蕉筆。

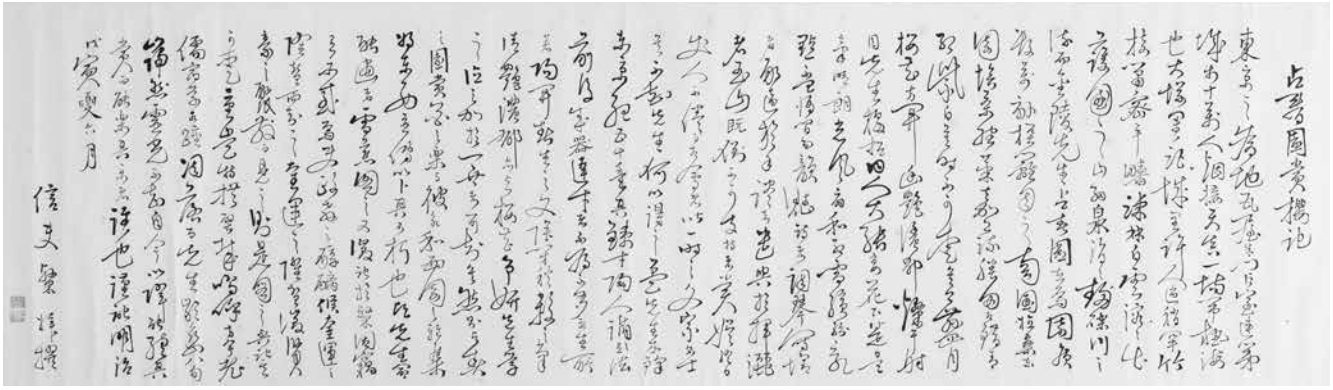
詩文を寄せているのは、林学斎、岡松甕谷、望月毅軒、青山延寿、藤野海南、島田篁村、猪野中行、信夫恕軒、木原老谷。



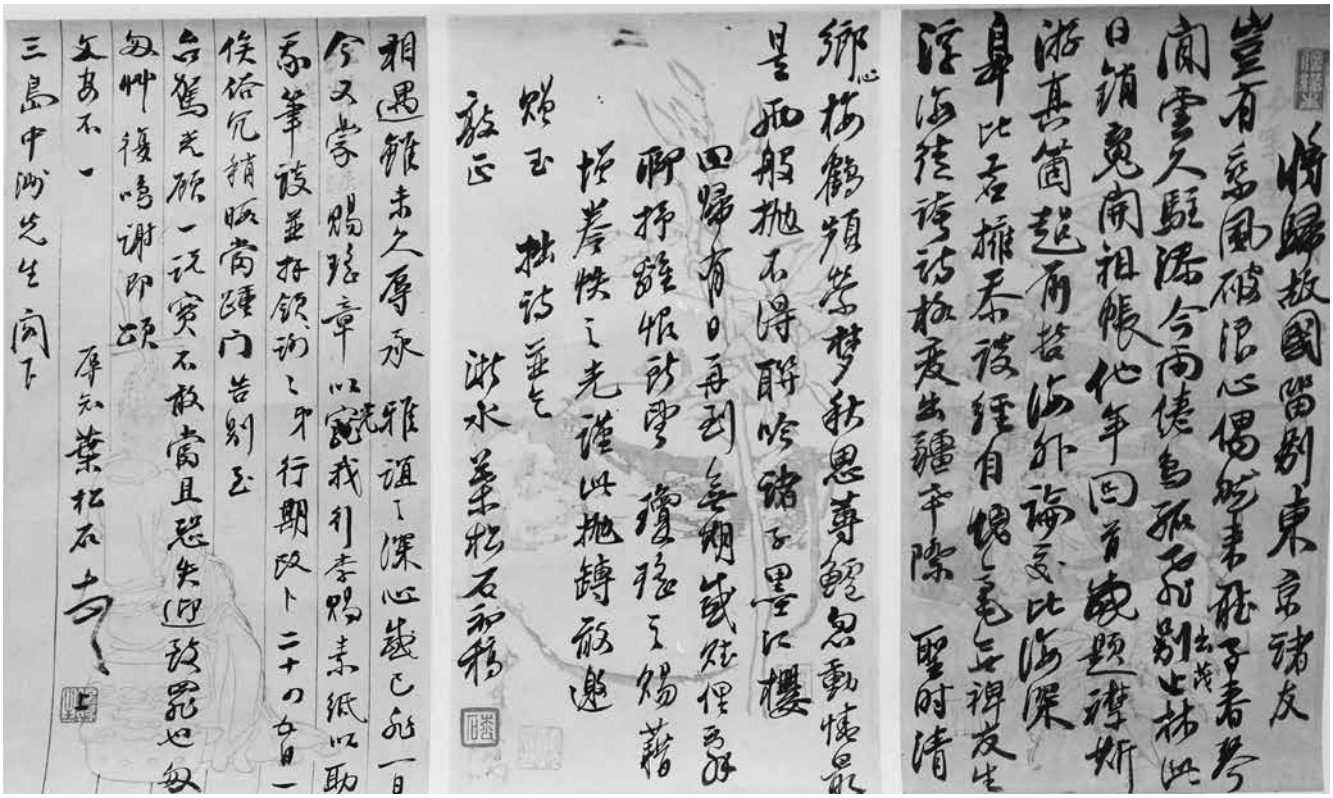
藤野海南「占春園看桜記」



島田篁村「(占春園記)」



信夫恕軒「占春園賞桜記」

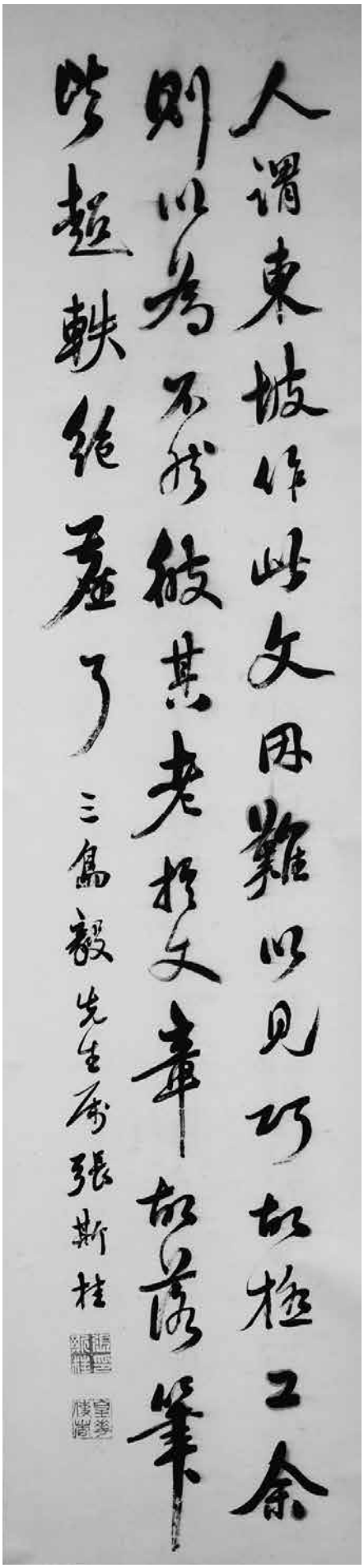


17 葉松石書幅（尺牘・詩、三島中洲宛、明治九年1876）（掛軸巻子0216）

葉松石（名煒、号夢鷗・自由亭・水雲楼）は浙江省嘉興の人で、明治７年（1874）に文部省の招聘によって来日し、東京外国語学校の漢学教師となり、明治９年（1876）まで在職。一旦帰国して、日本に再遊して後年は京阪に居住した。

三島中洲は明治６年（1873）５月に新治裁判所長として赴任して以来土浦に２年間在職したが、明治８年（1875）４月に東京裁判所聴訟に転任して東京に移り、同年６月に麹町一番町 46 の屋敷を購入した。したがって、中洲が葉松石と交流した時期は、中洲が東京に移った明治８年から明治９年に葉松石が帰国するまでの約一年間のことと考えられる。『三島中洲詩存』に徴する限り、明治８・９年は中洲が殆ど詩を残していない時期にあたり、両者の交流を示す資料に乏しい。ただ、三島中洲が土浦滞在中の詩文をまとめた『霞浦游藻』（1876 年６月刊）に葉松石が題詩と評語を寄せている。

尺牘には「賜素紙以助我筆談」をあって、中洲が筆談するための白紙を葉松石に贈っていることも分かる。

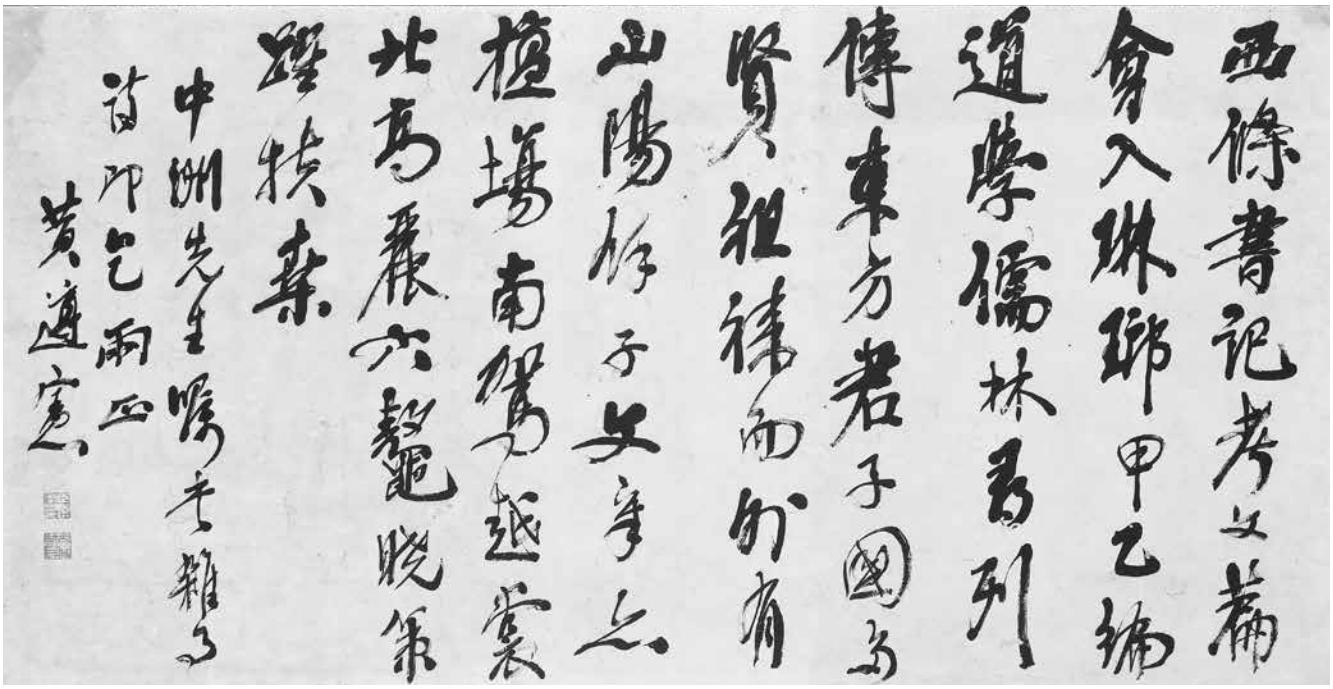


18 張斯桂書幅（明治十二年1879）
（掛軸巻子0076）

本書幅は三島中洲の委嘱に応えて張斯桂が揮毫したもの。張斯桂（1816～1888、字景顔、号魯生）は、寧波出身の清末の外交官。明治10年12月に初めて東京・横浜・神戸・長崎に清国公使館が開設された際に、正使何如璋とともに副使として62歳で来日した。東京使署には正副両使の他に参賛黄遵憲、随員として潘任邦・沈文熒・陳文忠・廖錫恩・張鴻淇・陳衍範・何定求・李郁階・劉寿鏗らがあった。この頃の日中関係は、琉球処分や朝鮮問題をめぐるさまざまな意見対立があったけれども、詩文に堪能な学者・文人たちは政府とは別に様々な機会に交流を深め、中洲もその中の一人であった。公使館員たちとの詩書の交流は多かったはずであるが、二松学舎に伝存するものは必ずしも多くない。

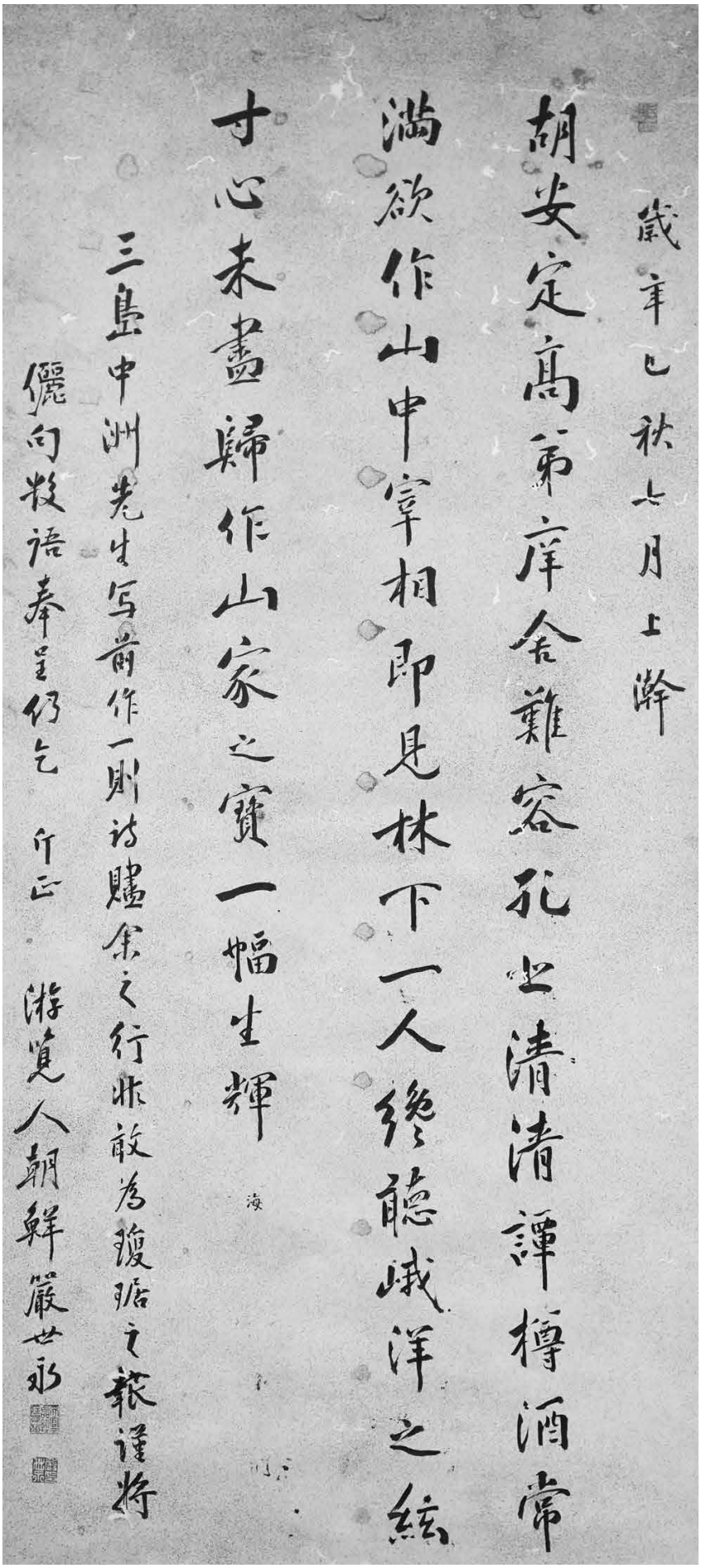


原表装の巻止めに書かれていたと思われる三島中洲の筆跡による外題。
揮毫された年代が判明する。



19 黄遵憲書額「日本雑事詩二首」(書0046)

三島中洲からの需めに応じて、黄遵憲（1848 ～ 1905）が揮毫した書として著名。揮毫の時期や経緯は未詳であるが、黄遵憲 30 歳代前半の筆蹟と見られる。揮毫された二首が黄遵憲の近世日本の儒学と文章家について詠じた詩であることから、恐らく『日本雑事詩』（展示資料１３）を読んだ中洲からのこの詩を揮毫するよう望まれて揮毫したものではないかと考えられる。だが、『日本雑事詩』の当該詩への中洲の書入れを見れば、中洲は黄遵憲の見識に賛意を示しつつも、その不備を指摘し必ずしも黄遵憲の評価を妥当としていないことが分かる。

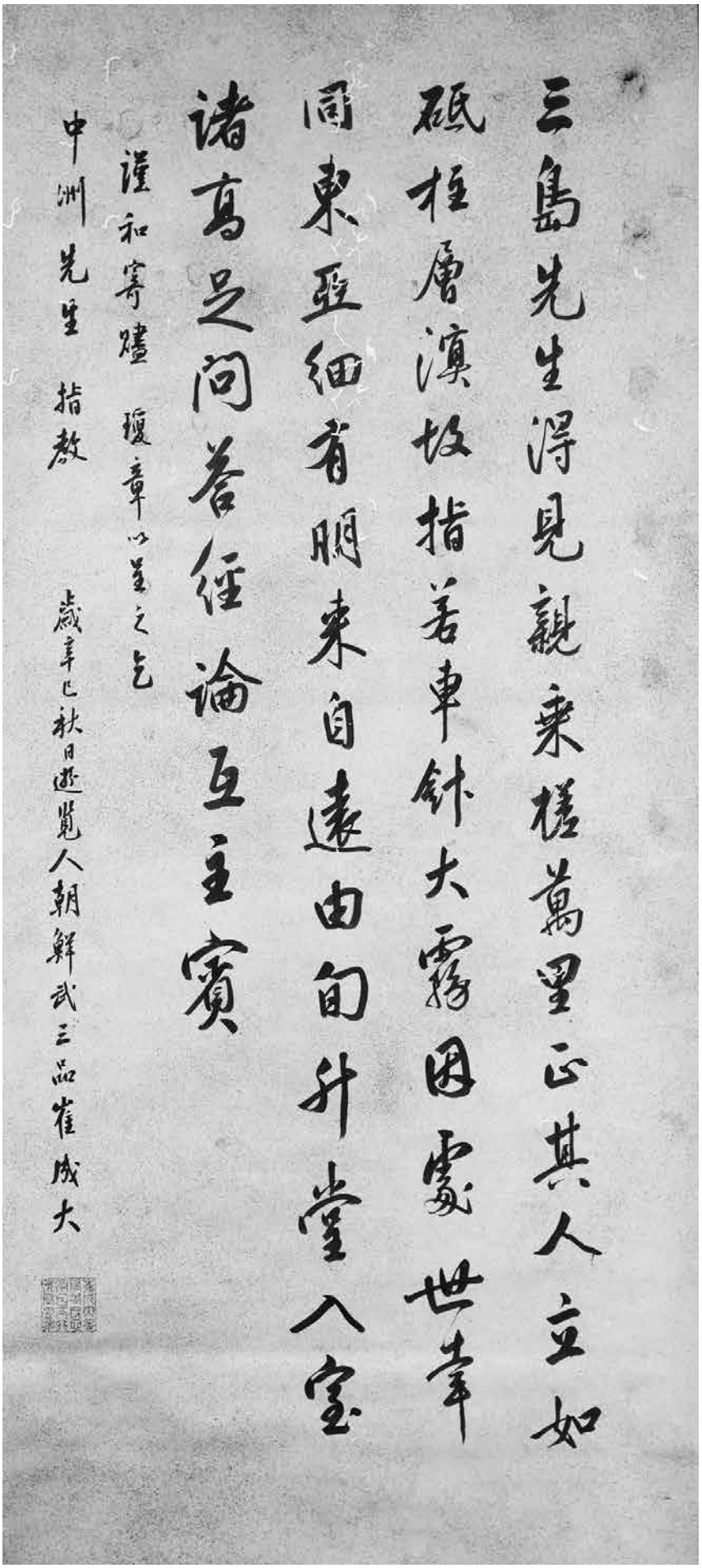


20 厳世永書幅（明治十四年1881七月上旬）

（掛軸巻子0045）

朝鮮紳士遊覧団が帰国する際、中洲が贈った送別詩に対して、厳世永（1831 ～ 1900）が中洲に贈った言葉。中国の学者に擬えつつ、既に官を辞して育英にあたっていた中洲の学徳を讃えている。

厳世永は中洲と同年の 51 歳。江原道南部の寧越郡の出身で、1864 年の科挙に及第し、後に農商務大臣などを歴任した高官。日本での見聞を帰国後、『聞見事件』『日本司法省視察記』にまとめている。

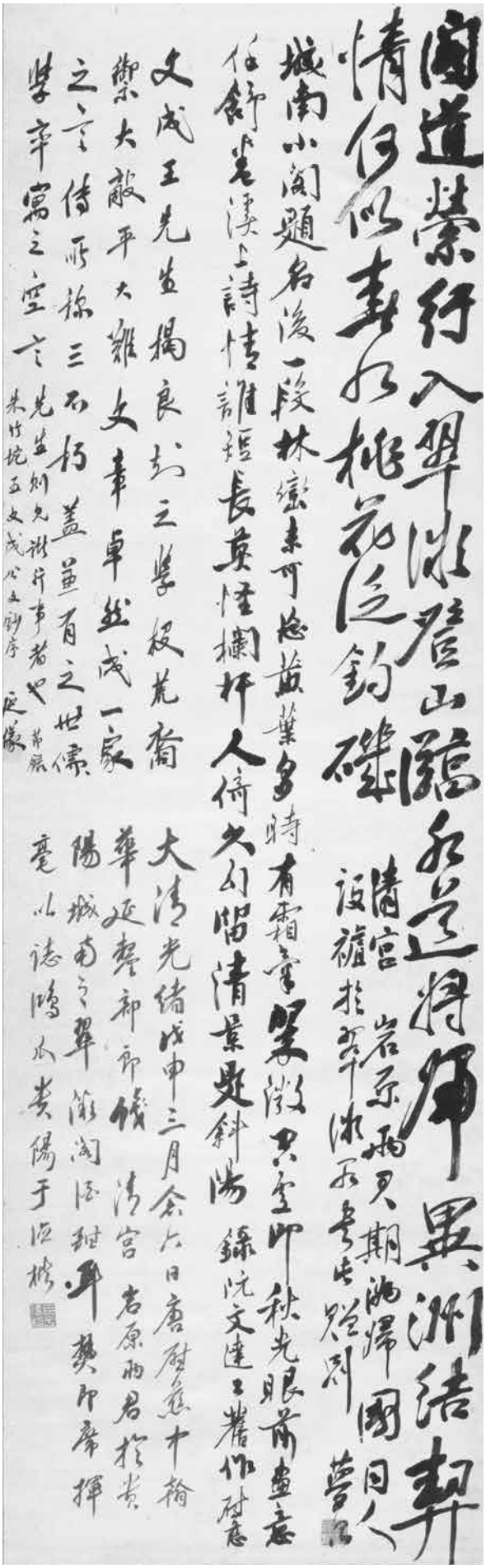


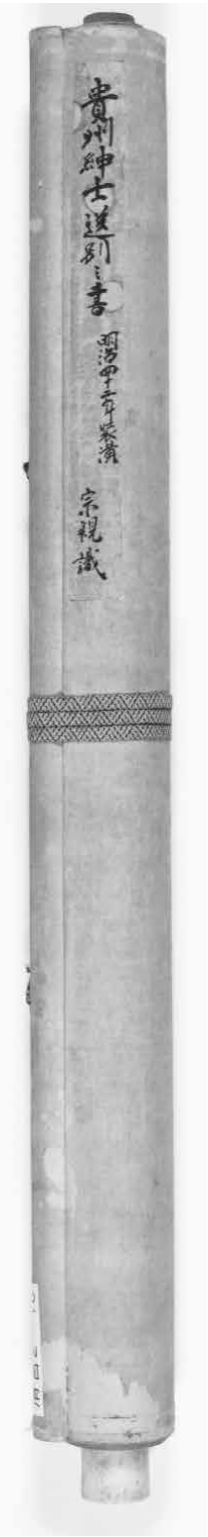
21 崔成大書幅（明治十四年1881七月）

（掛軸巻子0055）

紳士遊覧団の使節には随員・通事・下人が配属され、全体で62名からなる組織であった。中洲との筆談を残した崔成大は厳世永の随員の一人である。展示資料は、中洲から贈られた送別の七言律詩に対して、崔成大が次韻して返した漢詩である。厳世永と同じ用箋に揮毫されていることから、同じ機会に作られたことがうかがえる。

「問答経論互寶主」とは、7月9日の筆談で議論になった東西学術の取捨選択に関する両者の考え方の相違のことを指している。





22 諸家寄合書送別書幅（明治四十一年 1908三月）

清宮宗親旧蔵 (2-16)

清宮宗親が明治 35 年（1902）から 6 年間の教習生活を切り上げて、明治 41 年（1908）3 月に同僚の岩原大三郎と共に帰国する際に、貴陽の知友から贈られた送別の書幅。

外題簽には清宮宗親の自筆で「貴州紳士送別之書　明治四十二年装潢　宗親識」とある。

右から順に以下の四人が揮毫している。

任可澄（1878~1946）：貴州安順の人。貴州省省長、国民党政府府内政部部長を歴任。

唐慰慈（？ ~1912）：貴州貴陽の人。貴陽師範学堂を創設し堂長を務め、貴州教育総会長となる。

華之鴻（1871~1934 字延儀）：貴陽生まれ。同志と公立中学を創設した。

于徳楷（1843~1914）：貴州貴陽の人教育救国を提唱し、同済堂を創設。



23 諸家寄合書幅（大正期頃、松井石根、朱大符、張群、戴季陶、善明、宋伯魯、余維謙、彭程万、宮崎滔天、新田不孤）清宮宗親旧蔵（2-47）

本資料は、清宮宗親の委嘱によって、日本人と中国人が寄書きしたもの。

日本人では、松井岩根（1878 ～ 1948、陸軍大将）、宮崎滔天（1871 ～ 1922）、新田不孤。

中国人では、朱大符（1885 ～ 1920）、戴季陶（1891 ～ 1949、号天仇）、彭程万（1880 ～ 1978）、張群（1889 ～ 1990）、余維謙（1882 ～？）、善明（1882 ～ 1948）らの名が見える。

宮崎滔天が「吾党之士相会」と書している通り、これらの諸氏が一堂に会して寄書きしていることは、これが書かれた時期において、孫文の側近たち（朱大符、戴季陶、張群ら）と松井岩根ら陸軍軍人の一部が同志として交流していたことを示すものである。

Ⅲ 資料編

Ⅰ　筆談文献

一『占春園筆談』二巻（明治十一年四月二十一日、二十五日）

第一巻

題画二種

（附箋）芳野翁より願之画、此趣ニてよろしく候。遠山ハ無キ方却而宜く御座候由申事也。

（重野安繹）本日御招邀、兼日尊命敬領仕居候處、昨日午後より微恙差起り、不能拝趨、折角之御諭命奉辜負、恐縮之極、不知所謝候。二公使其他諸彦へも可然御傳辞被成下度、別紙拙作聊表寸衷候。御叱正之上、御吹聴被下度、且脯修一籠貴厨ニ呈上仕候間、御叱収被成下度奉祈候。書外、藤野・青山二兄へ相托し置候。御聞届可被下候。早々不宣。四月廿一日　重野安繹　金陵先生座下

多謝招邀及令辰　邨荘此處是朱陳　園中花木非生面　欄外黄鸝亦好賓
縞紵須知傾倒極　琴尊莫厭往来頻　停杯重訂明朝約　歩屧相随詠暮春
長華園招飲、晤清国公使、中村敬宇有詩、歩其韻。
時陰暦重三後二日　是正　重埜安繹草。

自幸吾生値此辰　親交境外亦雷陳　筆能通意代鞮訳　酒以合歓忘主賓
求友鶯児矢音好　無言桃李勧杯頻　臥床魂夢猶相逐　酔倒芳園煙景春
金陵先生邀清国公使於其占春園、適余有疾不能赴、畳長華園詩韻以呈。
粲正。　重野安繹拝草。

（清国公使館員名刺）沈文熒　廖錫恩　黄遵憲

（沈文熒）夙慕儒宗、時深景仰。承青山君相邀、趨詣尊府、得晤芝顔幸甚々々。敢請在座諸公台姓尊字官階府居。　廖錫恩、黄遵憲、沈文熒　仝啓。

（塩谷時敏）在座諸君姓字。

大島信
刺名　川田剛
此作在下座髯先生　木原元礼
小永井岳
信夫粲
塩谷時敏

頃与君連坐者是主人、即芳野老人。

（沈文熒）拝観尊郊、知皆属東都名公、曩読近人詩文選、早耳盛名、今得邂逅清揚、実慰素願、々示周行得安。承教、讀和長華園韻大著、清新俊逸、上追李杜、佩服。此請代啓重野太史。

（塩谷時敏）請就坐。

（沈文熒）
春風吹煙色　芳華満庭柯　政平俗亦美　相与楽時和　選勝郊野間　騶従響朝珂
園林旧邸第　亭榭依巖阿　主人神仙伯　黄髪垂皤々　吐辞道徳圃　横胸星宿羅
蒲輪徒往返　夙好在槃遊　謝公不再出　蒼生其如何
占春園雅集、呈金陵先生暨諸公、請郢政。　姚江梅史沈文熒拝稿。

（廖錫恩）
蒙青山先生招、訪金陵老人於占春園、得陪侍諸君子後、即席賦呈吟壇。斧正。
一帋相邀当（勝）帋符　言尋芳野引前途　芳菲（桑麻）満地春常駐　裙屐当筵我躡皃
竊喜中邦疎闊士　得交東国老名儒　酔人不用醇醪飲　況復飛觴倒玉壷
後学廖錫恩未定草。

（黄遵憲）
主人長占好楼台　八十神明尚不衰　諸老紛々裙屐外　冥容惨緑少年来

犹是当年旧邸池　薬欄竹檻影参差　雑花満樹飛鶯乱　莫悵(津似)江南春暮時

不学佐盧写左書　座中人尽古為徒　便除老輩風流事　即此衣冠既画図

飲金陵先生占春園中、作小詩、上主人并同坐諸君子。　後学黄遵憲学詩。

（青山延寿）

春日宴占春園、々係旧守山侯第、即金陵先生居也。有碑鐫、旧藩主哀公詩。

因歩其韻賦呈乞郢政。

占春園在野橋東　地據勝區名不空　人吸芳雲盈盞酒　日烘花影半簾風

拝塵愧我追潘老　帰穎羨君類酔翁　座上交朋尽同調　心兼春気共融々

延寿未定稿。

春日宴占春園、々係旧守山侯第、即金陵先生居也。有碑鐫、旧藩主哀公詩。

歩其韻、賦以乞正。

公侯旧第野橋東　紅緑占春名不空　人吸芳雲盈盞酒　日薫花気一簾風

拝塵愧我追消老　帰穎羨君類酔翁　座上清賓尽同臭　心兼春煦共冲融

青山延寿

四月二十日、偕大清沈黄諸君、訪金陵先生、宴占春園、倒用源哀公詩韻、以呈先生及沈黄諸君。

草木欣榮春已融　並車来訪廬陵翁　情同四海芝蘭契　語異五邦(方)和漢風

満座談論(窮)變物變　主人徳望仰蒼空　笑称玉爵君応酔　地是日邦東又東

後学青山延寿　僕発吟已久、不能草率応命、是即昨夕之宿構也。請正斧。

（黄遵憲）和字平、五字用仄、正可以救之。惟廬字、按之敝邦音律、稍有不合欤。

遵憲謹誌。

（青山延寿）吾有失声、請是正。是人在下座者、自下第二座也。

（黄遵憲）

座不空樽比孔融　皤々黄髪古稀翁　二千年後初(始)和会　一十七人同漢風

文字因縁無内外　神仙楼閣總虚空　仏山米水何人物　可(惟)願乗槎又(向)海東

謂由泛木東洋　既作小詩、読青山先生倒用占春園旧韻之作、勉次其韻、再乞金陵老人并諸公政之。　後学黄遵憲拝稿。

（信夫粲）諸公已経見弊邦所謂桜花、与貴邦桜桃同否。

（沈文熒）蕚跗苞瓣皆同、特候稍晩。

（黄遵憲）其種極似桜桃、想接以他木。又此土膏腴、善於培植、遂作此爛漫奇観。是則五大部洲之所无也。

（塩谷時敏）近都以桜名者、以墨水為称首。不知既游否。　敏

（大嶋信）近時貴邦善書者何人。　信

（黄遵憲）墨江一島既両游之。此月十五之夕、乗月一往、尤奇妙也。

近時敝土称善書者曰、何子貞紹基、鄧頑伯石如、他未及詳。　憲答

（大嶋信）試自東台山上望、西湖何若、小西湖。

（塩谷時敏）東台山下湖、蓋既游之。論其風勝、与貴邦西湖如何。

（黄遵憲）西湖、僕未曾至、歉甚。是沈公之同郷也。請代答。　憲

（沈文熒）小西湖風景甚佳。惟西湖群山四囲、洲渚紛錯、略放大耳。

（川田剛）君籍餘姚、餘姚古有陽明先生焉。不知今尚盛伝其学乎。

（沈文熒）陽明先生之学、至国初無伝、以後人門戸之見所累也。

（川田剛）洵然々々。若湯潜庵先生、其学奉王氏、功業文章、至今赫々。然僕非敢左袒王氏不信朱子。高論所謂後人門戸之見、公平無私之言、僕無所間然。

（沈文熒）陽明之学、原無病。学者悞会其意、攻于吹毛求疵。此等好名之徒致累前賢、可慨亦可笑也。

（廖錫恩）柴舟是韶洲曲江人、僕則恵州羅浮人也。与柴舟同姓而不宗。

（信夫粲）柴舟於貴邦亦有名之流乎。

（廖錫恩）柴舟攻古学、在敝邦頗有才名。可惜、是名家、非大家也。

（大嶋信）懐素曰、人並乗鐙、如不相犯剣鋒。事密射不可言。敢乞教諭。此義如何。　大嶋信

（沈文熒） 撥鐙二字、是当時俗語、取譬鞍鐙。後人亦解作挑燈者、則誤矣。蓋謂運用虚活也。未知是否。請教政。　剜鋒謂蔵鋒也。　文熒

（小永井岳） 久聞沈先生大名、今日得接芝眉、侑幸如甚之。弟交王泰園兄久。前先生曰、訪永坂石埭、得讀便面詩画、意想出塵外。請与泰兄他日再会。小永井小舟

（沈文熒） 他日当偕泰園来拝。

（大嶋信） 一皿筍薇、庭園所生、聊供下物、不知適高口否也。

（木原元礼） 主人庭上有首陽山、此蕨即是。呵々。

東京内、以儒学自樹家塾者、獨有主人芳埜翁耳。最仆旧好知己。幸再邂逅陪高宴、得奏拙技於左右。伏請公緩留尽歓多幸。敢白主人之微意。　恐再拝。

（木原元礼） 君若悪甜酒、則用日本酒否。

（廖錫恩） 日本酒甚重。

（廖錫恩） 侍酒者、想是金陵老人孫曽輩、環観聴者皆其門下士欤。敢問。

（大嶋信） 老輩外総是金陵門人、其女子金陵女之女弟子。此女以漢学立一門戸。

（廖錫恩） 金陵老人是漢伏生、其女想即曹大家也。両世弟子如此之多、盛極一時、可敬々々。

（芳野世育） 告辞。

（川田剛） 三君中、君似尤年少。不知尊齢何許。

（黄遵憲） 年三十。

（川田剛） 樸亦当暇日趨庭、不知何日在家。

（廖錫恩） 樸常在家、若高軒枉過、幸甚々々。

（沈文熒） 日向暮矣。酔旨酒、飫郁厨、承恵無既、感篆之至。敬此告辞、並謝諸公賜教。　廖錫恩、黄遵憲、沈文熒　仝頓首。

（黄遵憲） 今日何・張二公使、因有他約、未能来。帰告此遊之楽、必甚歓於心。幸祝老人康強、他日当再来訪也。　熒・恩・憲　頓首。

第二巻

（何如璋・張斯桂ー黄遵憲代筆） 日昨沈・黄諸子帰言、金陵老人廣招耆宿、極一時之盛。惜以他約、未克随杖履、為憾事也。先生年近八十、精神矍鑠、又為東国儒宗。聞之景仰。我三月之廿三日　即西歴廿五日　午後適有暇、当趁謁高斎、暢聆清譚。幸勿見拒、是所企望。

光緒四年三月二十日　何如璋　張斯桂謹啓　金陵先生左右

〈封筒〉大塚窪町二十五番邸　芳野金陵先生左右　大清公使署緘　緘

〈消印〉「東京／十一年・四・二一・ち」

（芳野世育） 嚮郵、嚮郵便差池、不得挹光霽、洵為憾事。昨午将赴北總、及發会有事、因延捱四五日。薄暮恵書到命、以三月念三日、即我念五日、賜賁臨、欣幸々々。僕昔年患目疾、常病写書、冀或拉訳人来尤妙。僕謭劣無一所長、但抗顔冒儒名、為童子師五十年。因負虚名耳。何能得答盛、愈頗不堪慚懼也。嚮郵便差池、不得挹光霽、洵為憾事。昨午将赴北總、及發会有事、因延捱四五日。薄暮恵書到命、以三月念三日、即我念五日、賜

（黄遵憲） 前辱招飲於占春園中、承尊大人雅教、甚感盛意。今日蒙齎函来、又承恵書伯兄長毅所著、尤感幸。帰為謝老人、并祝万福。

今日何・張二公使既由郵便寄函、約於我月之廿三日、即貴歴四月廿五、命車往謁尊大人。深仰名儒碩徳、思欲一見、幸勿設酒食為禱。

尊大人如廿五日未能回家、則請回家後、由郵便寄一函来告知、庶不至差池不見。

（公使名刺） 何如璋

（何如璋） 璞山。

先生之居、附郭脩然塵、有田圃数十畝、子孫衣食自有餘饒。又得英才而教育

之、足以娯晩景矣。歆羨之至。

道溯唐虞三代還　同趁聖域与賢関　早報傳教漸東海　共此宗風仰泰山
奉使我曾来日下　能文君不譲雲間　喜陪郭外先生座　絳帳高懸隔市寰
即席和亀谷先生韻、兼博沢芳野先生一笑。　何如璋　未定稿

（黄遵憲）前讀大著序文、欽仰無似。今日邂逅、甚適我願。川田先生旧屢読名詩、初見欣幸之至。

（亀谷行）已忝正副二公大人青眄、今又得披雲、幸甚。

（黄遵憲）有葉松石者、当所素識。僕来時、遇之於滬上、為我数東京諸老、故得聞名而讀諸詩。

（亀谷行）代川田。拙詩謬傳、愧赧々々。

（黄遵憲）比来積稿想益厚矣。

（黄遵憲）亀谷先生古文、沈鬱簡勁、卓然名家。向於敝邦古文、喜治誰氏、敢問。

（亀谷行）過蒙奨推、不敢当。僕夙好古文、第廻環之讀、未能通文理。唯所願、求栽於大方耳。

（黄遵憲）何言之謙也。僕所以請命者、正欲乞大方指示耳。

（亀谷行）以公辞藻、目撃風物之殊異、想必有瑰句麗辞之満嚢橐者。

（沈文熒）得観佳句（景）、媿鮿生才寡言之不文。承台命、当勉呈俚辞、以従諸大夫之後。

（亀谷行）大島堯田有詩、贈主人、請正之。

（亀谷行）讀趙執信聲調譜、知古詩有声律。不知一家之言邪、抑天下公論邪。故問。（一）

（何如璋）古詩雖有聲調、亦是出於自然。必拘々於此、未免一家之偏見。第用此字佳、易一字覚減色、所謂律細者、杜老曽言之矣。（二）

（何如璋）唯詞曲一道、僅用四声填之、多有不叶者。故又有七声五声之辨。此等似須於声調細々推求。（三）

（亀谷行）方今以詩名者何人。

（何如璋）北京同官中、張香濤之洞為最。此君経術亦深、文筆更遒健、人品亦高。又謝麟伯維藩・藩伯寅祖蔭。吾粤州李葯農文田・陳一山喬森・譚叔裕宗浚、此係僕所識者而言。其他尚多。縁鄙邦以此取士故也。（四）

（亀谷行）貴邦詩曾有沈帰愚・袁随園二派。方今言詩者、不知宗沈邪、奉袁邪、抑別開生面邪。

（何如璋）近日能詩者、均不宗沈。至随園之派、則作手挙以為戒矣。大約宗唐宋八為多。学焉内各得其性之所近。如曽文山詩則近山谷也。（五）

（亀谷行）方今有許多鉅匠、烟波万里、無由相見。不知有其詩上梨棗者乎。

（何如璋）所言諸子、其人尚在、所著均未發刊。此亦敝邦近日風気使然。大約自己刻集者、如方子箴之流、均非高手。頃有刻曽文正遺集、其詩文頗可覧観。（六）

（亀谷行）聞有陳碧城者以詩鳴。未得其集而讀之。不知高評何若。

（何如璋）僕亦未見其詩、不知所造如何。（七）

（大嶋信）文待詔書帖、酷似山谷、運筆異本量。弟竊謂、此翁胸中無所不有。先生以為何如。

（何如璋）此実待詔真迹入石。嘗見董文敏書、有絶老勁奇崛者、能出本。固不可一律論也。

（黄遵憲）敬悉厚意、当以轉達公使。尊人身近八十、東国儒宗、不必拘往来礼也。敢謝辱顧。村醪野蔬風味自古、大使意極喜之。其在浙江所産、曰龍井、味畧与貴国茶。若福建武威、則較異。今所食亦福建武夷之類。貴国人頗解此事、碾茶尤古雅。西人食必下糖、則於此道茫乎不知也。帰幸祝尊人康強。

二　芳野世経宛　円山溟北書簡　明治十二年（一八七九）十月六日付

秋冷日増相成候。高堂弥御安泰奉恭喜候。随而弊廬無事、乍憚御省念可被下

候。扨先般以郵便呈寸楮候。其節申上候通り、此度郷商万屋長蔵ト申者出京仕候。同人事富沢町稲荷新道玉屋久五郎ト申逆旅ニ逗留ニ御坐候間、御先代遺稿上木竣工ニ候ハヽ、右之者ニ御託被下度候。外ニ所望之者有之候間、二部宛ニ而三部ニ而も宜候間、左様御承知可被下候。尤代価ハ万屋江委細託遣候間、同人より御受取可被下候。昨年上堂之砌拝見仕候清公使御享応之節問答書、如何ニ候也、是又上木可相成候。乍序御伺ひ申上候。右時候御見舞傍如斯御坐候。不備。　十月六日　葆　芳野雅契　高梧下

〔封筒〕東京小石川大塚久保町二十五番地　芳野世経様侍史　丸山葆　平安

従佐渡相川壱丁目

〔消印〕「相川／佐渡・雑太・一〇・一五」「寺泊／□□・三島・一〇・一八」「東京／一二・一〇・二二」

三　『三島中洲・崔成大・張滋昉筆談』（明治十四年六月二十五日）

（三島中洲）

隠居未遽向青山　淪落紅塵万丈間　多幸猶従大夫後　新年依旧拝天顔

己卯新年作六位三島毅（番外）」

（中洲）明治十四年六月廿五日朝鮮崔成大来問律、因招清人張滋昉三人酌酒、献酬筆談、入夜。時家兄与妹自備来在座、乃贈筆談章、供帰後話柄。

中洲毅（一）」

（中洲）昨友人松岡康毅走价告先生横駕、驚喜虚左而待、今拝芝何幸如之。先生旅舘為何町何番地何人家。（二）」

（中洲）近来五洲人皆来在弊国、而弟皆接之。然見洋人白頭如新、支那及貴国人則傾蓋如故。蓋以同種同教同文也。

（崔成大）接得先生一面、足慰大願、何念及此。感謝之外、極渉不安。（三）」

（崔）僕来寓此地、幾匝一月矣。得聞大名宿矣、而趍未能趨造拝識。今幸趨于下風、夙願足矣。（四）」

（中洲）厳公現在何官。

（崔）厳公文三品散秩。僕武班三品。

（中洲）頃来游弊国諸公、為何人。

（崔）朝士十一人、随員二十餘。

（中洲）日前屢接洪英植・魚允中諸君。二君為何品。

（崔）　―正三品　―従三品。（五）」

（崔）僕与厳公偕来、方留甲賀旅館。与松岡公有契、得聞先生大名、傾慕不已、不擬一接、而宿憊成祟、数日呻囈、所以使僕替探。請先生恕之。病固不甚、惟憊薾、不能振作也。（六）」

（中洲）松岡氏書中云、厳公来臨、今唯得謁先生一人。心竊怪之。承尊喩、始知其臥蓐。病状差劇如何。（七）」

（中洲）諸公滞弊国、凡期幾日。

（崔）姑不可指期以對。

（中洲）先生与洪魚二君同逆旅乎。

（中洲）貴国煎茶方、定与我異。不適口乎。

（崔）弊邦茶味太重濁、貴国則清淡、味性雖為不等、清淡亦好耳。（八）」

（中洲）僕幼少好漢学、既長仕一諸侯、又仕本朝、掌理財聴訟等事殆二十年。近隠居下帷、再為書生専埋頭経史中、今謁先生。々々聞之松岡氏、亦邃漢学。今後屢拝趨乞教、幸勿見擯。（九）」

（崔）僕学書未成者也。毎接学書者、輒畏之。今見先生、甚畏惧之也。謙甚々々。曾所聞知、其正本、既有嘱訳人、非所可望。若得見両人稿草則甚幸々。請先生做主焉、学之而不能解、則寧已之而已。使朝鮮少年就学仏語、固所不願也。（十）」

（崔）然則、先生既経法官、当為先生、僕方欲学得、当為生徒、願以束脩就学焉。

（中洲）邦律大凡採仏蘭西、則謂之洋律亦可。貴国使少年生学仏語、則解之甚易。優漢学老生如僕輩万々。（十一）」

（崔） 書不尽意、甚恨々。

（中洲） 僕前日職在判事、少知法律。故清参賛官黄遵憲氏来嘱漢文訳邦律。僕受業無聞、因托之社友二人。一人訳治罪法、艸既畢、今方浄写。一人訳刑官、未脱稿。（十二）」

（崔） 幸蒙先生不遐示以瑤唫上下数回、其修旧潔外之意溢於詞表、滿心感格。且以傾蓋如故為教、尤不勝欣洽万々。

（中洲） 僕甚愛客、況海外貴賓枉駕、寒廬生光輝。聊表欣喜之意、欲供薄酒、幸下箸。（十三）」

（中洲） 弊国本用明律、因邦俗稍増減之耳。近来取洋律亦然。洋明二律、雖有寛厳粗密之異、要之聖人罪疑惟軽之一語、則皆奉之。嗚呼貴哉。（十四）」

（中洲） 訳書本係黄氏嘱。故脱稿、先致之黄氏、然後副写一本欲呈先生、如何。

（崔） 多感多謝。将於何日可以惠貺耶。

（中洲） 頃方浄写、未告成。成則必報。僕未可期何日奉呈。

（崔） 要在何間乎。（十五）」

（中洲） 治罪法之訳、凡在我七月中旬、浄写始成。如刑法則未可豫期何間。

（崔） 第有一時権使之道、幸勿以燥妄為咎。請賜指導焉。已浄写之稿草、可以得見乎否。浄写之役、想已過半。故如是仰請。（十六）」

（中洲） 浄写全本、然後僕欲校之。其本今方在友人、所憾不能応貴需。

（崔） 略有見聞而知之矣。其施措之綜校、欽恤無往不然、真盛徳事也。（十七）」

（中洲） 洋律之弊在寛、然聖人与其殺不辜、寧失不経之意、則彼実奉之。弊国本崇武断法律過峻刻、故采洋律正枉耳。（十八）」

（中洲） 聞貴国飲食味甚濃、故不呈邦肴而呈洋食。酒則有邦醸有洋製、任先生適口。

（崔） 一自駕海之後、所熟習者尽是貴邦食飲也。洋製則誠不欲之也。（十九）」

（崔） 酔飽終日、兼拝大先生極感且幸、但渇求之律書未得為恨。何先生渇死我耶。

（中洲） 近日訳成必呈覧副本、今日不在弊宅、甚負高意。謝々々。（二十）」

（中洲） 先生酒量如何。幸為弟勧数杯、忘旅愁。（二十一）」

（崔） 泰西人之来在貴邦者甚衆。維新之政率多其規。獨先生之不与世俗推移、而業漢何也。棄官隠居何也。半日陪話、待之以傾蓋如旧、故請問至此。請勿為咎、如何。（二十二）」

（中洲） 僕性狷介不合俗、且近来弊国新進少年専学洋籍、聖人道徳之教将掃地。故罷官下帷、現在塾生徒殆三百、竊喜漢学将再興也。非有他意。（二十三）」

（崔） 先生操守元来如是也。僕遠遊者亦不得不逌然悚然耳。

（中洲） 在此者為豚兒、幸賜一顧。現在興亜校、受張先生教。（二十四）」

（中洲） 陪席末者、為僕門人松浦久彦、今任法官在地方、今方来過、聞先生在堂、来請謁也。

（崔） 現在地方裁判職耶。

（中洲） 埼玉裁判所。（二十五）」

（中洲） 更勧数太白、不然欲供飯、如何。

（張滋昉） 已酔酒飽徳矣。謝々。（二十六）」

（中洲） 今方来者為支那張滋昉先生。現聘在我興亜校、与僕交好。先生宜結交。其人篤実而学問博洽。（二十七）」

（張） 前日於開化楼得晤貴国三四君子。今日得邂逅大駕、快幸奚似。張滋昉（二十八）」

（張） 前日得陪末座、殊覚酩酊失儀。先生幸不見責、復承寵召。銘感之至。（二十九）」

（中洲） 久不候尊寓、不知既聘阿喬否。

（張） 僕寓則一書生一竈下老嫗与老鰥三人而已。先生若以為妄、請他日枉駕。（三十）」

（張） 去歳信使金君竝随官数人、皆得相識。内中頗有曾游敝国者。閣下曾至敝国否。（三十一）」

（崔） 不敢々。但朝鮮情形、已是上国所諗、燭何庸多覧乎。（三十二）」

(崔) 与黄大人遵憲旅館異所乎。

(張) 僕寓在此左近、即五番地十八番地。得清暇被過談為幸。日前、金君鏞元、李君商在、均来敝居也。（三十三）」

(崔) 渾行中多有之、而僕則有意未就也。（三十四）」

(張) 歴観賓主問答之語、皆学有本原。中洲先生学通群籍、明洋法而不泥於洋、与鄙見正合。閣下有学、而不得不願少年学仏語。足見識力超人、実事求是、佩服々々。（三十五）」

(中洲) 開化楼上、僕不勝杯杓、先先生而去。先生為開—開解音通語花留連、入夜而去乎。健々羨々。

(張) 先生帰後、僕為諸友所迫、連尽大觥、酔不知人、無暇問花解語矣。（三十六）」

(中洲) 三国皆奉孔教、而大清実為師、韓日両国則弟子耳。今日隔海師弟聚首一堂款話、不亦快乎。

(崔) 誠然。（三十七）」

(三島桂) 請書詩。

(中洲) 先生為豚兒大書高作幸甚、不問作之新旧、敢請。邦人甚貴貴国書、即所以敬貴国也。

(崔) 改日当副嘱也。

(中洲) 今日酔筆為妙。（三十八）」

(崔) 拙筆何可唐突於方家眼前。然所不敢辞者、惟貴々国書敬貴国品、句話故耳。

(中洲) 先生欲去則去。将期他日再晤、帰寓幸致鄙意厳公。（三十九）」

(崔) 奚翅再晤而已也。従茲以往、陸続而来、幸勿苦之。他日当進晤。（四十）」

(張) 韓友崔君筆致甚暢且懃々。被教於先生、可謂篤信好学者矣。聞此来以参判（官名）趙君為領袖、廿七日内村君約飲、聞此君在坐。（四十一）」

(中洲) 韓人近貴国、其字優弊国。

(張) 韓友善書者頗多、而貴国佳書亦復不少。何撝謙之甚也。

(崔) 不敢当。（四十二）」

(張) 僕房主為日高誠実君、亦文人也。現仕参謀本部。先生識是乎。号如淵。仙台支傾録、是其所作。

(中洲) 僕未識。日高礼蔵則僕知之。

(中洲) 石油之生者。（四十三）」

(中洲) 貴国節署有楊守敬君者来寓、頗邃金石学。先生相知否。

(張) 僕知之而未晤。聞公度云頗講求金石之学。（四十四）」

(中洲) 豚犬足教、待年稍長、欲使遊学貴国、如何。

(張) 文郎甚聰穎、他日若游敝国極妙。必為遠大之器。（四十五）」

(中洲) 煩枉駕而供給粗薄、不堪慙愧。然粗糲腐儒常食、幸宥之。

(張) 先生以洋食為粗薄、則藐視洋人甚矣。然腐儒亦僕同類。

(張) 既酔且飽。又聞君子之言敢不拘嘉。且謝且辞。遅日再飲。（四十六）」

(張) 僕獨居寡懽、偶来友人、飛觴命酌、而苦無酒純然。麹町皆山猫、佳者頗少。於是於衆猫之中拔其尤者、曰梅吉、敝寓梅花。頗多賓朋、常集皆招之。故此犬亦效其名曰亀吉耳。（四十七）」

(中洲) 梅吉蒙愛亦如亀吉耳。可妬々々。

(張) 陸機有黄耳。故僕有黒川皮亦遙々相對、非獨梅吉也。（四十八）」

(中洲) 黒川亀之助吉。選名甚風流、因知先生非木石無情之人。寡居恐不信。

(張) 似藝者三名。

(張) 貴国礼法、致酒於侍坐者是也、近日稍知之。語言亦稍能解、無謂秦無人也。

(中洲) 川田以近日随国君遊北海道。（四十九）」

(中洲) 僕舌耕匆劇、唯待日曜間暇、接来賓。先生若来訪、期日曜。弟亦将以近日拝趨。

(張) 先生或有清暇、以日曜早間臨敝寓、当致無清談。然明日早間已有他約。

(五十)」

(中洲) 韓人畏洋人如虎。彼亦人耳。言忠信行篤敬、彼無将奈我何。先生以為如何。

（張） 偉識卓論、僕亦云然。近日僕所識洋人亦平易近人。且無鄙吝之気、深慕漢学、殊出意外。（五十一）」

（中洲） 筆語意至、而言不至。毎謁海外貴賓多憾。

（張） 僕見侍酒者甚労。不能不労之以酒、而先生則想入非々令僕無詞以對。

（五十二）」

（張） ツキ日曜早間八時、請枉駕、僕将参候。

（中洲） 七月三日必拝趨、車価既給、先生勿再償。（五十三）」

四 『三島中洲・崔成大・川北梅山筆談』一巻（明治十四年七月九日）

明治十四年七月九日午後三時、朝鮮武班三品崔成大来訪。因招川北梅山、三人同酌筆談、至七時而罷。如左。　寒流石上一株松舎主人三島毅識。

001 崔成大 既雨且熱、文体葆安。不欲更話、果数次造門、而未能拝穏。於中忡悵矣。

002 三島毅 屢辱枉駕、屢不在家、多罪多罪。今日幸少閑、緩話至晩間亦不妨。

003 毅 雨後俄熱、宜脱衣冠納涼。

004 毅 貴国煙管長且大、夫人平生所用皆然乎。

005 成大 客地也、故甚短、居家則倍之。

006 成大 弟子之進、如彼其多。雖極欽慕、日事悩神、能不労乎。

007 毅 労精神、実如諒察。然比之農夫労筋骨、或優。

008 成大 所以有大人事、小人事。

009 毅 貴国郡県為制古矣。然官人猶世禄乎。

010 成大 郡県則本無世禄、而但勲裔通籍、秩高則入勲府、襲世禄。

011 毅 現今官人多勲裔乎。

012 成大 然。

013 毅 其制郡県而其実如封建。

014 成大 忠勲府是内職非外官。

015 毅 弊国封建三百年、弟輩亦曽仕一諸侯。明治雖廃封建、旧諸侯称華族、旧藩臣称士族。

016 成大 曽経何国乎。

017 毅 備中国高梁藩臣也。藩侯食五万石、為旧覇府執政。

018 成大 昔有今廃。当之者、其非敢怒而不敢怨之地乎。

019 毅 弊国古代王政、而郡県為制。中代覇府代執政、封功臣為諸侯。至近時、覇府還政朝廷。為之陪臣者、豈敢怨之。

020 成大 一日万機、在昔猶然。況今維新之後、庶務書叢集、総察恐為劇煩也。

021 毅 貴国正史為何、記制度者為何。

022 成大 弊国有国朝宝鑑、此非一人作也、乃国朝以来近臣記述之者也。

023 毅 宝鑑蓋記制度。如君臣言行、無記述之乎。

024 成大 非特言行而已、凡百事為随有随記者。

025 毅 巻数若干。

026 成大 三十許巻。

027 毅 始何時、終何時。

028 成大 建国今為五百年、所記載者三百余年。

029 毅 上木売之乎。

030 成大 或有之。

031 毅 外邦人見之亦許之乎。

032 成大 （掉頭）

033 毅 書肆公売歴史為何。

034 成大 経史諸子百家、及本国文章書稿、以至俚語野談諺書等属。

035 毅 貴国文章大家、古今推何人。

036 成大 不可勝記。近日則別無超越。

037 毅 先生見此書乎。（指黄遵憲新著日本雑事詩）

038 成大 来此復見之。
039 成大 此人現居何地面。（指雑事詩跋撰者石川英）
040 毅 弟与此人交疎、不知其居。
041 成大 悉網羅無遺云々、果然乎。（指跋中語）
042 毅 蓋諛言耳。
043 毅 清客好諛言、故我邦人交之者亦效顰。
044 成大 蓋与黄氏阿好也。
045 成大 然則何以能刊行於貴国乎。
046 毅 世人喜新聞、故書肆刻之射利耳。
047 毅 先生姑抛筆喫茶。
048 成大 事係貴国政体、至及閭巷風俗者。有謬而不禁、何也。
049 毅 旧政府之時有厳禁、今則無之。蓋学洋政也。
050 成大 向日投示之貴稿六冊、果是方家大匠手段。方次第玩味、読既奉還也。
051 毅 拙著不必還。読了裂之可也。
052 上 成大 非徒感謝、将於帰国之日、周視有眼者、以知貴公之如是文章也。
052 下 毅 貴国取士之方、猶清国乎。
053 成大 多以科試主之。以是之故、俗尚都在於功令程式。文章従以降殺也。
054 毅 儒者独学古文乎。
055 成大 多読経史。此外自大国出来、自古劇煩。
056 毅 来者為友人川北梅山、名長顒。曽仕為史官、今隠居灌園、且読書自楽。
057 川北長顒 愚退栖後文酒自娯、不敢列官吏之席。且近患腰痛、杜門屏居。今日聞閣下之至、力病来謁。幸勿吝手教。
058 成大 文酒之娯、聞之者亦不無与娯底意、景仰万々。至若聞僕来臨、何感如之。
059 長顒 愚与主人、三十年来旧交、常放意談話、不敢為修飾。
060 毅 先生不好洋食、故供腐儒平生所用粗餐、幸下箸。
061 成大 毎以酒饌饋之、感悚之外、不安極矣。
062 毅 気候与貴国寒温如何。
063 成大 此為弊邦六月中旬天気。在弊邦、当著布単衣、而袷衣尚不能脱。
064 成大 可知貴国節序之稍緩。
弊邦人常処温突、不能耐寒湿。来此之後、所旅客館不是楼屋、庁軒貼地、湿気上升、易於生病、是以為悶。
065 毅 弊邦気候最好処、為西京及大坂。如東京則稍寒、易生疾。真如貴喩。
066 成大 此亦受湿所祟耶。近以歯痛為苦、酒後愈甚。
067 長顒 今日驟暑、請先生脱冠縦談。
068 長顒 貴国酒与弊邦味如何。下物多用何物。
069 成大 麹米醸成則一也。而我酒較醲。
070 成大 下酒之物、多用魚肉菜果。
071 長顒 先生嗜酒乎。生毎夕与妻対酌、至七合而止。飲畢即寝、東坡所謂早眠不見灯。毎々然。
072 成大 可謂如此風流、如此文章、何渠不若古人乎哉。
073 毅 貴国人王仁、始伝経書於我。我邦修周孔之学、此為嚆矢。貴国史伝亦載之乎。
074 成大 只聞其伝、未見其蹟耳。
075 毅 我邦称之為饂飩、貴国之称如何。
075 成大 称麺。
076 毅 此肴称膾、貴国有似之乎。
077 成大 近海之地、多食之。
078 毅 并脱外套。（此時成大脱冠、故云。）

079 成大　此則便是常着。
080 毅　有弊国之書、伝于貴国者乎。
081 成大　非曰無之、僕之固陋、曽未得見也。
082 毅　常食用獣肉乎。
083 成大　近畿之地、多野少峡、不能常食。
084 毅　飯用稲乎、用麦乎。
085 成大　国内峡野交錯、野則用米麦、峡則食粟稷。
086 毅　聞多虎、其皮当我金若干。
087 成大　果多之。而此本害人之物、捉得不易。若得其皮、国人亦珍之。
089 毅　我有熊而無虎、所以為島国。
090 成大　然則熊膽買得不亦易乎。
100 毅　易。
101 成大　敝邦銃手輩、多有和他失真之弊。貴国無此弊乎。
102 毅　同。
103 毅　近来邦医八九学洋技、用洋薬、故獣膽不甚貴。
104 成大　如欲得其真者、将何為計。
105 毅　弟周旋、捜索其真献之。
106 成大　敝邦之人、服則有効。故従以有失其真之弊。
107 毅　弟非医、不知其真否。然質之医、然後献之。
108 成大　幸為弟周章焉。
109 成大　有真者、則多少買之也。
110 毅　若有真者、当告其店主。
111 成大　同伴厳公毎擬一来叙話、而幹事律書鞅掌、尚未得偕。
112 毅　憾々。
113 毅　近文一篇乞正。
114 毅　先生若欲訳邦文（即称仮名者）為漢文、有友人閑居能漢文者、弟紹介之。
115 成大　若得向懇治罪法翻訳者、則別無更翻者。方苦待中旬之約而已耳。
116 長顆　筆談太煩、則意思亦煩。先生且放心痛飲。
117 成大　得陪両先生、寔不易之奇縁、安得不開懐暢話也哉。
118 長顆　愚年齢、先生為做如何。
119 成大　順而有奇。
120 長顆　洵如高喩六十。
121 成大　毎有従遊之意、而所不能遂者。其奈先生之不暫閑何。
122 毅　自今毎有閑、馳使或書招閣下能来否。
123 成大　固所願而不敢望。
124 毅　来此以来、読敝邦何等書。
125 成大　本為遊覧而来矣。幹事経心、他不能暇及。良歎々、請頼先生之教。
126 毅　貴国坊間、有売貴国古今史述之書乎。
127 毅　不許外人見之、則或疑其不許売買。
128 成大　在昔伊然、今似無碍耳。
129 毅　僕欲呈日本史、先生賜国朝宝鑑否。
130 成大　事固両幸、但無碍与否、現無朝令、今不可特言質対。如其無碍、
131 毅　則釜港自在、何難之有。
132 成大　李退渓先生之名、高于弊邦。今有其後裔、在朝乎、在野乎。
（施圏）
133 毅　為何品官。
134 成大　（加二字）。
135 毅　先生齢已踰知命乎。
136 成大　賤歯今為四十有八。
137 毅　有男女若干。
138 成大　（加一三両字。）

139 毅 僕則反之、男三女一。
140 成大 過於僕四之三。
141 毅 先生曽遊清国乎。清人遊貴国者定多。
142 成大 惟有節价別使而已。留遊之規本無。
143 毅 近年僕多接支那人、大抵過文而少質。貴国人則反之。是僕所最敬重也。
145 成大 如弟狂狷、何足以当之。大抵文質彬々、然後君子。今於先生見之矣。
146 毅 是諛言也。
147 毅 先生亦或過文乎。
148 成大 此則有不然者。存観以儀範、参諸著述。其文質未嘗不在於二者之間。尊非宮墻、安得無窺見之門乎。
149 毅 弟元修儒学者、然多年在法官、読洋律又与洋人接、知其長短。如道徳則周孔不可不奉、但其技術取洋所長、恐公平。貴意如何。
150 成大 古今天下安有抛道徳尚技術而致治之理乎。寧互済之、則無怪耳。
151 長顒 評曰、万世不易之論。
152 毅 然老荘亦自称道徳、釈氏耶蘇亦然。故余以周孔為真道徳。
153 成大 不能弁似是之非、則何足道哉。
154 長顒 使周孔在今日、則必不唱道徳、而真道徳在其中。如何。
155 成大 同我亜細之国尚矣無論、并与西人而入我道徳之域、道徳弥天地、則更有何功利技術之可論乎。
156 長顒 功利技術不可不論。但以道徳為根柢、則不陥詐譎。
157 長顒 愚三腹十子、亡其三。
158 成大 俄者与老妻共酌之教、何也。
159 長顒 名而已。
160 成大 猶有七子而偕老之、多福々々。

161 長顒 名雖偕老、其実則無。
162 毅 聖人代天生養斯民、古帝王製網罟、耒耜諸器、皆所以生養之也。西人製器械為生養之具、是奉古聖人之遺意。我取之助生養亦聖人之遺意也。
163 成大 豈其然乎。不其然乎。
164 成大 先生固戯我蔑裂也。
165 毅 決非戯言、僕持論如此耳。蓋取長捨短之説也。温故知新、聖人之教、本来然。晟.
166 成大 其長其短、固在我之如何取捨。何庸取法於西人乎。在昔晟世未聞取長於西也。
167 毅 此論也非今日所尽、待数年再会之後、更尽之。
168 成大 惟天而已耳。
169 毅 弊国十数年前議論、皆与先生一致。明治初政、矯枉甚過、遂心酔西制、百事模效之。今則稍悔之、是漢学之所以再興也。於是始有取長捨短之論。
170 成大 先生衷曲之言、今始得聞。向前所云長短之論、僕豈深信也哉。
171 長顒 貴国之稍悔、当為弊邦鑑轍之明証也。
172 毅 評曰、是的確之論、不得不左袒。
173 成大 箕子廟在何所。
174 毅 在平壌府。此其故都。
175 成大 今京在別地乎。
176 成大 京都見在漢陽、距平壌五百里。貴里五十。
177 毅 在敝邦未接外人之時、自不能不趁且于心矣。及至貴国留連数月、非徒修旧睦新、貴国遇人優異逈逈出尋常接面数三、多有終不可諼者、如弟初見之膚浅、未免井蛙而已。此是肝膈之語、請勿怪之。仲尼不云乎。言忠信、行篤敬、雖蛮貊之邦行矣。

178 **成大** 多頼貴国人待之以忠信篤敬也。

179 **成大** 不敢賛一於其間、然此亦不幾於長短者耶。（時観余近文、有此言。）

180 **成大** 此皆生存之人耶。（時観都下文人姓名録、有此言。）

181 **毅** （加圏）

182 **成大** 凡幾人。

183 **毅** 数百人。

184 **成大** 文風此蔚、欽敬万万。

185 **成大** 市肆亦有此乎。

186 **毅** 固有。

187 **成大** 此為六百余人。

188 **毅** 苟主忠信、雖洋人如同胞耳。況同種同文同学之国乎。

189 **成大** 大抵人之有行、不及於中人以上、則其烏能事々忠信、言々篤敬。然苟以忠信篤敬為心、其離不遠、復之有期、可不貴哉。至如西人、是一種異類、不欲聞之。斯文不堙、則天将有徇鐸之日也。

190 **毅** 西人固与東人異種、然自天視之、均是人耳。古人所以有一視同仁之言。

191 **成大** 桀犬吠堯、堯可吠之者乎。

192 **長顒** 一視同仁、豈有堯桀之別乎。

193 **成大** 有穀、則稗亦有之。

194 **長顒** 穀則養之、稗則除之。只在方略如何而已。

195 **成大** 所以天将徇鐸之耳。

196 **長顒** 桀犬私其主耳。非公平之論、故有一視同仁之説。愚説不満高意、慙謝々々。

197 **成大** 莫非是野人高談、請扯丙之。

198 **毅** 無敵国外患者、国必亡。今有洋夷猖獗于外、無乃我亜細亜之幸乎。

199 **成大** 誠然、高論也。

200 **成大** 惟修攘是図而已。

201 **成大** 日且暮矣。請辞焉。退俟辱招。（対毅有此言。）

202 **成大** 請更陪話。（対長顒有此言。）

203 **長顒** 今夕幸蒙佳話、何幸如之。多謝々々。

204 **成大** 有懐難尽。良歎且惜。

205 **毅** 半日清談、忘平生煩忙。多謝々々。

206 **成大** 不信塵寰万事忙。

五 『日清迎春筆話』一巻（明治十五年一月七日）

明治壬午人日、招飲南摩羽峯・川北梅山・桜井竹崖及支那人張滋昉於艸堂。酔後筆談如左。会甥日笠竹在席末、乞零紙。将供帰国後談柄、乃付之。

寒流石上一株松　舎主人　中洲酔識「三島毅印」「弐松学究」

四海一家年正新　蔬羹椒酒会佳（嘉）寅　最欣皇化宣遐邇　人日逢斯邦外人

右席上卒賦拙甚、乞諸君大政。　中洲

（三島中洲） 今将使弟少女薦点茶。貴邦茶技（方）、定与我異。供他日帰国笑話耳。

（張滋昉） 貴国点茶、大約与敝邦所謂工夫茶者大同而小異。得潤燥吻為恵多矣。

（南摩羽峯） 問工夫茶者、所由来古乎。

（張） 工夫茶行於福建・廣東両省、他省則無。其所由来、大約是蔡忠恵之遺法。

（羽峯） 毎人喫一碗乎、将数人連喫一碗乎。又茶之製法如何。

（張） 敝国茶皆用大碗飲之。而工夫茶則一切茶具皆同貴邦之小者。而器具之精、一砂壷可値百餘金。其茶種類不一、佳者毎斤値七八十円。自注水点湯、層々皆極其留心、非深於此道者不辨。其茶、先用数円一斤者、注而棄之。然後用極上之茶入壷、注以湯、蓋好、外用湯灌壷者数次、毎人一小杯、分而飲之。僕雖不解茶味、然極佳者多入、其味必濃。惟此工夫茶、雖佳茶而且多、其味則甘滑留舌本、酔飽之餘、如飲甘露矣。

（中洲） 過日所汚高覧新年拙詩、川北梅山君次韵如別箋。先生亦賜次韵、何

栄如之。

（張）先生与川北先生両詩、所謂珠玉在前、僕雖勉歩後塵、自慙形穢矣。

（中洲）茶味消肉食毒、故唐代始輸之北邉、与胡人互市。胡人多食肉、求需不已。終至今日之盛。弟所聞如此。果然否。

（張）誠然。如歐洲、今日皆需亜洲之茶相同。然末茶宋以前盛行、今日則無。貴国点茶亦唐宋之遺欤。

（中洲）弊国点茶之儀、創于足利義政、成于豊臣秀吉茶博士千利久。利久蓋折衷貴国方者。

（張）今日甕江先生恐不来、僕日前晋賀、適有目医在坐、亦未遇也。

（中洲）過刻有来簡曰、不能踏約、真如先生言。

（中洲）弟去臈贈張先生詩、如左、請正。

誰留劉阮此盤徊　唯有胡麻飯一杯　他日知君帰国處　回頭蓬島是天台

（中洲）先生寓有佳鶴、定欠伸待帰。然為弟強為長求之飲、幸甚。

（張）恐是羊公不舞之鶴。

（中洲）不関舞不舞、僕日前拝趨、驚其婉美。故妬言至此耳。謝々。

（川北梅山）侍姫貌寝而先生為無塩生色、感謝。更有新年一絶、拙益甚、幸賜斧正。

喬松茂竹似山家　不省門前斗馬譁　彷彿鳥声来入耳　半窓紅日夢梅花

（張）先生身分与梅花倶高。

（梅山）先生始賜謁見、脱畧如此。僕安得不脱畧。然談至猥褻、神交之久、可見矣。

（張）未見之前已称神交、既見之後安可不脱畧。形骸若拘々於礼文之間、則俗士矣。非先生与僕之交誼也。

（梅山）交異邦之人多矣。未見如先生豁達者。可謂真契合矣。

（張）僕疎狂性成。先生不鄙之、則幸甚矣。

（張）往日先生在興亜会席上、所贈韓客之詩典雅甚妙、弟推為近作之傑、先生一揮示之座客。

傾盖相逢若弟兄　興酣意気更縦横　使槎忽動星河影　樽酒欣聯縞紵情
東去高名同魯仲　西来奇策問侯生　諸君不渉匡時略　好向瀛洲共結盟

口占之作殊不成詩。承奨汗顔。

（梅山）二聯的当、格調亦高。置之唐賢集中、不易辨。

（梅山）僕将訪先生謁深閨佳人。不知先生許否。敢請。

（羽峯）先生、塩蘿蔔適口否。

（張）ツケモノ皆適口。若奈良ツケ及ミソツケ、尤妙。

（羽峯）何物慧兒夙曉吾邦味与字。

（張）ミナウソ。

（中洲）此皆由閨訓。

（梅山）吾保証之。

（張）先生請枉駕、僕当敬俟、断不学両行紅粉一時回之敗興也。

（張）養在深閨、人未知。知之自吾始之。豈然、豈其然乎。僕亦不能之諱。

（中洲）乞酔後揮灑。

（桜井竹崖）先生応興亜会聘教諭周到、感荷何堪。僕亦連同会末、興亜之事頗熱中者。乞尓来不棄駑鈍見顧幸甚。純拝。

（張）久欽大名、前幸識荊、今得相遇於尊酒之間。僕学薄才疎、承奨愧悚。他日当登堂以聆雅誨。

（竹崖）近日将与宮嶋・北沢等之諸子小集於草堂。先生清閑被枉玉履、幸甚。

（竹崖）先生為主人労筆、僕等乗間偸飲、酩酊甚矣。先生請重盃取均。

（羽峯）不知此楽与先聖、果如何。

（梅山）三日不朝則去、此女楽之禍也。三月不知肉味、此韶楽之美也。僕不知先聖之意何在、僕則以為女楽勝於韶、亦侮慢聖言不敬之大罪也。亦各言其志也。何妨之有。

（中洲）去秋先生与韓客会飲于茅堂、此川北君在坐。先生記無。

（張） 昨歳承寵召、有韓客在坐、並有貴門人同坐、而川北先生似未邂逅。然嘗見佳章、則神交久矣。

（張） 聞貴国飲此茶頗有礼節、僕如野人、祈諒之。

（中洲） 苦味不適口、不必尽。

（張） 聞先生大名久矣。今夕始得陪坐、何喜如之。如拙詩、昨日雨窓所得、極属率作、賜痛刪幸矣。先生詩已見之於諸集中。今始得識荊、親承謦咳欣慰矣。既此作淡遠而味腴。佩服々々。何謙之甚也。

（梅山） 僕三腹十子、不亦快乎。

（中洲） 弊邦所学古文而已、故与貴国人往復亦皆用之。用之貴国商賈、亦通否。

（張） 敝国商人、若用深奥古文、必不能通。且目不識丁者甚多。女楽勝韶頗有明証。如貴国諸友人同至新橋則喜、若同聴加藤桜老古楽則顰蹙矣。

（羽峯） 先生亦識吾桜老乎。彼老以古楽自任、余輩聞其音、倦怠欲睡、観美人顔、則眼始明。

（張） 此亦先聖吾従衆之意。

（羽峯） 妙々。

（竹崖） 人情無東西、似有古今。我則従今矣。

（竹崖） 客自凍雲堆裏過　蔬縦酒薄奈寒何　頼添詞伯唱酬興　喜聴陽春白雪歌

辛巳十二月十七日招飲中洲・青邨等諸賢于草堂。此日凍雲積雪寒甚、無復紅裙之賄酒。短句謝之。　純拝草。

（中洲） 壬午新年試筆、如左、乞正。

満舎生徒坐作團　拝年又對五辛盤　早梅一朶香吹暖　新酒三杯酔壓寒
寄志烟霞如在野　置身冗散似無官　皇恩許我称中隠　世上風波袖手観

（梅山） 次韵中洲三島君新年作

東窓擧酒日團々　喜見春蔬已上盤　先世遺規遵倹素　一家生計免飢寒
逃名我獨全真隠　厭熱君方愛散官　只有丹心灰不尽　忍将世事付傍観

（梅山） 先生酒量如何。僕毎夕与妻婢　兼房　對酌、至七合而止。一酌就寝、不待鴉鳴啓戸。毎々如此。

（張） 十年前、僕殆過之。近日則服先生之海量、為不可及。

（張） 少年頗嗜酒、毎飲敝国紹興酒　如貴国ヲサケ彷彿　七斤・高梁酒　此即貴国焼酎也　一斤、尚不至酔。今則望洋而嘆。

（梅山） 毎夜飲過量、不覚就寝、至夜半方応侍婢需。先生如何。

（張） 元人詩云、只消幾度瞢騰酔　看得春光到牡丹、此情此景似之。僕病未能也。

（羽峯） 夫子自道、蓋此永夜不下再三度也。

（梅山） 僕毎々酔甚、淫而不發（淫発）者屢。老境可憐。

（羽峯） 先生謙極矣。

（張） 諸先生高論如枚乗七発、雖有痼疾、亦当蹶然而起。

（羽峯） 僕則多々益辨。請勿其老耄。語曰、老当益壮、僕晨昏遵奉之。

（張） 僕未及老耄而衰頽実甚。今聞先生之語、不禁起頑廉懦立之志。可謂益友矣。

（羽峯） 酔而入温柔之郷、其味八珍不啻、其楽王公難換。先生以為如何。

（張） 先生真知味者、恐三月不知肉味、無是楽也。

（張） 僕若大酔而帰、聞侍姫吟唐人詩。云、酔則従他酔、猶勝獨睡時。与先生蓋同。

（梅山） 二句妒意爛漫。

（張） 不断海風吹月上　渭城一　日本吟声。

唐時詩皆入美人之口、今則無矣。此今昔之感也。

（羽峯） 日本亦然、不獨貴国也。

（張） 今日甕江先生不在坐、殊覚歉然。

（張） 僕毎日閲新聞見報告中有可嗜之者、必購而嘗之。

（羽峯） 何物乎。

（張） イロ、、太クサンアリマス。

（羽峯）　一々応先生之索。請擧其一二。

（張）　カスツケウシ　トリ　シジチ　カツヲブシ

（張）　種々不一、皆由新聞而得之、僕甚幸焉。

（梅山）　由新聞而得之、蓋避嫌之辞。中洲先生由閩訓之語、得其要者歟。僕於実験証焉。

（梅山）　先生近敝国婦人肉味如何。

（張）　味美而腴、此貴邦之名産也。

（中洲）　先生須尽酔、然後喫飯去。

（張）　亦尽酔飽徳矣。再遅恐妨清興。他日請先生賁臨、聊献蔬酌。如何。

六　『三島中洲・楊守敬筆談』（明治十四年五月二十四日）

辛巳五月廿四日筆談零紙

三島毅　弟蒙何公使黄参賛下接已久矣。聞公使任満、将以近日去。先生亦同行乎。

支那人楊守敬　弟之行恐猶先之。新公使許君丁艱、又新公使之来、尚未有期也。

三島毅　聞先生邃金石学。今得観摺扇上手書、書法蒼老古雅、非近世人之筆。益服其学根柢不浅也。

楊守敬　此戯為之、不佳之甚。

七　『三島中洲・孫点筆談』（明治二十年五月二日）

（孫点）　往返蒙照払、大感大感。昨承枉顧、失迓、為罪。其時適在鳴鶴先生処、致失之交臂、恨甚。読新詩甚佳、感謝無既。是日途中尚有奉贈之作、今特面呈。闔府想皆安適、聞鳴鶴云、尊体以途中略有感冒、近全愈否。

（中洲）　懸念及余感冒、謝々。幸全愈、勿以為念。

（孫点）　僕亦略有感冒、惟精神尚可強支耳。昨与鳴鶴談内地遊歴、恐不能行。東都可図擬。且商之重野先生即定去留。若去、恐期必速。

（中洲）　内地謂弊邦内乎、将中華乎。

（孫点）　謂貴邦内地。

（中洲）　与鳴鶴同遊、不然、不得不携訳官。

（孫点）　欲遊内地、恨言語不通、且恐郷人之欺。如鈴木氏者、聞甚多、因此絶意遊歴、欲返中華、或有再来縁、甚為大幸耳。

（中洲）　大然々々。欲還中華、甚可恨。

（孫点）　相見恨晩、相聚恨少、相別恨速、可謂三恨。然明歳或重来、則可作三年之聚也。

（中洲）　在数年前、弊邦亦漢学猶行、故貴国学士遊歴不為無所得。今日漢学落地、雖邦人僕輩、不為坑中之人幸耳。故与数輩同志生徒講習相楽。蓋亦曲肱飲水之楽耳。先生絶意遊歴、僕亦賛之。

（孫点）　是甚敬聞命矣。頃与重野成斎約四時見、今且別。俟定行止、再談筆記、俟録出、送上。

右支那孫典（ママ）筆話。　中洲

八　『瓊浦筆談』一冊、三島中洲自筆本（文久二年十一月二十二・二十四日）

壬戌十一月廿二日与清人林雲逵筆談于長崎英舘。

僕姓三島、名毅、号桐南、聞君近日与横山鈍軒接話。鈍軒即僕友人也。昨有一緘、托柳小春転致鈍軒、君見否。

近来偶与鈍軒契闊、故不見尊書。

想仍在柳氏処、未曽寄去。

偶携鄙稿数篇来、賜覧観幸甚、有閑見評正、更妙。

鈍軒文甚高古。君与為友、佳製定相伯仲、僕当刮目。

僕与鈍軒、年相伯仲、而文則否。慙々汗々。

観君首二作、其規矩準縄、実与鈍軒伯仲。而洗伐研錬功夫似優鈍軒。僕当細評、遅日奉璧、何如。

僕滞本地不過両三日、明日再訪、見返与否。
明日可以奉送。
貴邦近世、博学能文、為誰（1a）。
康熙乾隆間、則袁枚・蒋銓号称才子、各有文集行世。其餘詞舘中新進亦多有文稿、但不如二子之名動四遠耳。
二氏文集、僕亦曾一読過。詞舘新進中、誰為翹楚。近来修考挋者、有大家否。
前者太平之世、文風昌熾。故文章一出、天下向慕。今干戈四起、科場時亦勉強、文人学士避難不遑、何暇為此。即使聞其名、亦未見少文也、而所見不過時文八股数篇耳。
長毛猖獗、目下如何。数日前聞之一友人、曽元帥復南京、確否。
如前擾乱、南京未復。
兄書生隠於商乎、将商暇読書也。
中土多故、奔走不遑。自顧無才、不堪任事、為苟全計。避地而来貴国、即借商賈以贍衣食而已。無徳無才、何為隠也。
不寓唐舘而洋舘、何故。
唐舘作事、諸多不便、凡事掣肘。不如外辺可以自如（1b）。
兄何許人、以何歳月来于此。
僕嶺南人、来此已三年矣。
見示高稿、幸甚。
即当請教。
篇々簡明、而論又公平、足以知吾兄為人矣。
蒙過奨。
今日有事、不得長談。明日当再訪。
既有事、請尊便。
明日不来、期明外日。鄙文評正、勿食言。
敢領教言。

廿四日再訪筆談
再昨蒙欵接、今又受鄙文評正之賜、感謝不可言。
愚見僭評、実未能尽其高妙。尚祈原諒（2a）。
高評溢美、不敢当。
伏読大文、眼界一濶、足下抱才如此。何不出而試之。況今正用人之秋、安可懐瑾抱瑜不一見于当世也。
僕仕一諸侯。至天下事、則可言而不可行。
使足下之言而当道者能用之、亦与行之無異。孔子云、一言而可興邦。言亦非細故也。
北京近状、如何。
北京、目下無事。
聞長毛賊奉天主教、的否。
是実、然亦有不奉者。
国有禁、僕未読洋教書。然察之、与浮屠方便相似。其意不過勧善懲悪、果中否。
其意亦欲人為善、本無大錯。但其立言甚偏、凡百事業功徳、皆帰耶蘇一人、未免穿鑿、令人難従。如吾儒尊孔子固是極其推（2b）崇、而其前何常不美堯舜文王。豈自孔子以来、便可将堯舜文王抹却耶。彼之推崇耶蘇、適足以見膠執偏私也。
洋人視孔教、若何。
洋人於孔教亦甚尊崇、不敢下貶詞。
彼欲施其教於貴邦及吾地、其意似駸々、如何。
彼意本欲偏処伝教、愚者従之、智者哂焉。然彼所伝、毎多郷愚貧民、或貪其些小滋潤、比之乞丐為稍易得、而出此。或婦女無知、聴其天堂地獄之説、以為彼真、能為我贖罪也。識者吐之。
彼視吾邦、若何。
洋人到処、皆欲肆其蠶食、以漸而入、非大創之不可也。僕即其情、不久必

有兵交。蓋夷人之性、好事喜争、貪得無厭、得寸則思尺。若竟従順、靡所底止。一払其意、便藉以起兵端。比々然矣。留心当世者、不可不慮也。

達観五大洲、不過一同胞。況貴邦与我、地近而風同、共奉孔教。今接足下（3a）情好如旧。是所以布心腹洩杞憂也。有所見、勿惜指教。

承殷々下問、敢不略陳鄙見。但空言無補耳。如大文所言、航海通市可以裕国、此亦一要領也。然其中之節目条貫、又非一時片紙所能尽。要在当事者、集衆論而斟酌損益之。至夷務一節、更難懸議。要当事者、随機応変、不可以言伝。過剛則憤事而激変、過柔則自懦而不震。将来有不可問者矣必也。外則剛柔適中、随時変通、内則杜漸防微、兵食預足、有備所以無患也。又時訪高才碩徳以備咨謀。其大要如此。貴国職官多世襲、則草野豈無遺賢。朝廷有事之秋、固当破格用人也。

高論的切、金玉不啻也。本邦旧俗崇武、而三百年昌平、人稍遊惰。然洋夷入津以来、視彼為敵国外患、上下一心有復旧之志。目下廟堂賢才抜茹、而下則切歯捥腕建言陳策者不絶跡。想武備逐日而盛矣。

亦聞貴国武備早預各諸侯及士大夫、皆抱同仇之志。然将相不和（3b）、亦戻事也。漢書云、天下治注意相、天下乱注意将、将相和事乃有成。此陳平・周勃所以交相結納以安劉氏也。宋南渡、岳武穆大勝朱仙鎮、金兀朮大懼欲逃。有書生扣馬諫曰、未有権臣在内而大将能立功于外者。兀朮悟因止、而秦檜乃以十二金牌趣班師而大功、遂隳于垂成、宋室于以不振。此将相不和之明験也。即近日天津之敗、亦半因大将掣肘、不能尽用其謀之故。又東晋偏安江左、王猛臨終謂苻堅曰、晋雖偏小、正朔相承、君臣和睦、上下同心、幸勿妄動。苻堅不以為然、自率八十万精兵攻晋、敗於八公山、遂致身亡国滅。此以見君臣上下同心、所以能禦強敵以自振也。孟子云、天時不如地利、地利不如人和、信然。

古今同一、慨真如高論。

西洋陣法、果冠五大洲乎。貴邦近日演洋法乎、将守旧法也。

当今用兵、専以火炮為主。不畏死不逃遁者勝、並無所謂陣法也。如果兵糧豊足、火炮利備、守死不移、安能破之。若見賊（4a）先走、安問其他哉。

洋夷貪欲而狡黠、邦人視如犬豕、貴邦視之如何。

犬羊豺狼、尽之矣。

彼捨朝鮮而不問、有故乎。

洋人所貪此利耳。朝鮮貧甚、土産又不多、且往来船隻、又不靠彼土屯泊。故捨之。

有事当辨。

無甚事。有話、不妨見教。

聞近年北京覆没、典満州地于魯西亜、輸其金于英仏、以請和。不知有此事否。

旧年北京乃在天津口交兵、有不良者為之嚮導、由間道潜入円明園、焚焼搶掠一空、遂以講和。園離京城尚四十里、安有覆没之事。如果覆没、則僕已為左衽矣。和後亦非輸金（4b）、但於各関口量減収税餉耳。

愚見、貴国之患、不在長毛、而在西洋。

尊見亦是。然長毛亦非細故。

隴蜀地方、経毛賊兵劫否。

前有到過、随亦他遁。

貴邦北疆与魯西亜接、有交兵之事否。

一向和好、無交兵之事。

同治帝賢否如何。文官武将、傑出今世者為誰。

帝年止七八齢、賢否固未能知。文官煥然一新、亦未知其確。武将則僧格林沁・勝保為最。其餘亦未詳悉。

僕見清史、不過満漢名臣伝・東華録・三朝実録数部。更有好書見教。

近則皇朝経世文編、及聖武記、貴邦人亦喜看（5a）。

二書則僕亦曽一読了。架上簡明目録、実価当邦銀若干。

此部乃本処友人托代購者、洋銀三枚、即同壹両貳歩。

近人詩文集、有可購去者否。

不多見、未知若何。

聞有越匪紀略之書、現蔵否。

此属私書。僕曽一看過、而無其本。

邦人著書、有至貴地者乎。

向未見、聞近間有之。如外史一部、僕亦曽購過一部、寄与友人。

足下未来本地前、有聞本邦古人姓名乎。

曽見刻本著十許人姓名、並著某人曽著某書若干巻。某書若干巻、但止見其目、仍未見其書也。

僕携貢紙数枚来、煩兄揮毫、欲誇示郷友。見許否。見書本地近製詩、更佳。

敢如命。

僕将以明日去本地。敢煩席上揮毫。

亦可。

僕郷距此邦程百五十里。然舟舶来往、而郵信亦不絶、欲以書牘請教、可乎。

足下錦旋後、遇有鱗鴻、不妨書牘来往。文字相交、千里不間也。（5b）

十三　黄遵憲撰『日本雑事詩』（三島中洲書入本）

避秦男女渡三千　海外蓬瀛別有天　鏡璽永傳笠縫殿　倘疑世系出神仙

（批点）総之今日本人実与我同種、彼土相伝本如此、寛文中作日本通鑑、以謂周呉泰伯後、源光国駁之曰、謂泰伯後、是以我為附庸国也、遂削之、至頼襄作日本政記、幷秦人徐福来亦屏而不書、是皆儒者拘墟之見、……日本要非我藩、不必以此自疑也、

（評）「或然」

女王制冊封親魏　天使威儀拝大唐　一自覆舟平戸復　有人裂詔毀冠裳

（批点）以小事大則有之、以臣事君則未也、

（評）「議論公平」

載書新付大司蔵　銀漢星槎夜有光　五色天章雲燦爛　争誇皇帝問倭皇

（批点）二百年中徳川氏主政、講道論徳、国方大治、

（評）「確論」

鱷吼鯨呿海夜鳴　捧書執耳急聯盟　羣公衮衮攘夷策　独幸尊王藉手成

（批点）孝明欲攘夷、徳川家定主政、審力不敵、不敢奉詔、処士横行以外夷披猖大辱国、而幕府孱弱偸安、不足議、始倡尊王以攘夷之論、

（評）「数句能書当時紛紜」

玉牆旧国紀維新　万法随風倏転輪　杼軸雖空衣服粲　東人贏得似西人

（評）「譏刺之言」

前朝覇主識龍蟠　富岳荒川極大観　留与東遷新定鼎　万家春樹錦城寛

（評）通国以武蔵上総為坦沃、「坦則有之、沃則未」

夕陽紅樹散雞豚　薺麦青青又一村　茅屋数家籬犬臥　不知何処有桃源

（批点）商人所傭客作人、輒令司管鑰他出、帰無失者、盛哉此風、所謂人崇礼譲、民不盗淫者耶、

（評）「長崎互市既久、狡黠類横浜神戸、然僅入近傍村落、皆渾撲如此編所記、況其他乎、外人欽仰如此、可以知我風俗之優彼数等矣」

薩摩材武名天下　水戸文章世不如　幾輩磨刀上馬去　一家修史閉門居

（評）称文学者有肥前安藝水戸三藩、「津藩文章不譲安藝」

議員分撰初登席　元老相従語踦閭　豈是諸公甘杖馬　朝廷無闕諫無書

（評）「譏刺隠然」

減租恩詔普醲膏　碩鼠疲民告敢労　帰語老農吾土楽　寛仁長戴帝天高

（批点）……四十取一、

（評）「不必然」「租実重于彼、然民未困、可以知我土之沃」

鑄山難得鑛常開　永楽銭荒不再来　海外有商争利藪　国中何地築謝台

（評）源義政上表成祖、「筆帯誇気」

削木能飛翊鵲霊　備梯堅守習羊玲　不知尽是東来法　欲廃儒書読墨経

（批点）余考泰西之学墨翟之学也、……此化学之祖也、……西人淡気軽気炭気養気之説倣此、……此重学之祖也、……此算学之祖也、……此光学之祖也、……非機器攻戦所自来乎、……非所謂地球渾円天静地動乎、……中国之言電気者又詳矣、……奇巧殆出泰西上、

（評）「西学源于東来或然、然昌黎不云乎、師不必勝弟子、以師自任軽視弟子、亦漢人通弊、可不戒哉」

（圏点）第我引其端、彼竟其委正、

（評）「公平」

（批点）……甚善法也、

五経高閣竟如刪　太学諸生守兎園　猶有窮儒衣逢掖　著書掃葉老名山

（評）「此則数年前事、今則東京大学文学部講習四子五経諸子資治通鑑等書」

航海書来道遂東　虚辞助語惜難通　至今再変仏盧字　終恨王仁教未工

（批点）余因思日本於漢文、通実字而不通虚字、以虚字無可象、故仍参以土語、其土語皆実字在前、虚字在後、故後来有顚倒之読也、

（評）「大然々々」

釈氏呉音儒漢音　後来更雑蟹行書　舌人口既経重訳　学徧華言総不如

（批点）士大夫文言語長而助詞多、

（評）「作漢文者適症薬石」

論語皇疏久代薪　海神呵護尚如新　孝経亦有譔康成註　合付編摩鄭志人

（批点）海東学者尚無僞譔古書、欺世盗名之習、決非贋鼎、可宝貴也、……

（評）「眼光如炬」

西条書記考文篇　曽入琳瑯甲乙編　道学儒林尋列伝　東方君子国多賢

（批点）蓋日本之学源於魏、盛於唐、中衰於宋元、復興於明季、……自藤原粛始為程朱学、……為陽明之学者凡六人、……（伊藤維楨）不甚喜宋儒而講学自樹一幟、其徒七十人、……物茂卿之学近伊藤而指斥宋儒、過之門徒六十四人、……更有古学家喜治漢唐註疏、

（評）服部元喬、号南部「部郭訛」

（評）「豬飼敬所経学、不在松崎安井下、此編逸之何也」

（批点）説経之書、自七経孟子考文外、則有論語解、四書古義

（評）「我邦説経者猶多、此所載九牛一毛耳」

斯文一脈記伝灯　四百年来付老僧　始変儒冠除法服　林家孫祖号中興

（批点）三百年来文教大興、徳川将軍抜用林氏父子、為之倡也、

海外遺民竟不帰　老来東望涙頻揮　終身恥食興朝粟　更勝西山賦采薇

（批点）亡国遺民真能不食周粟者、千古独渠一人耳、

昌平廟貌尚崔巍　列郡膠庠半劫灰　幾輩斷斷守殘缺　捧経抱器拝門来

（批点）近年以来西学大行、各藩文廟或改為官署、廃棄者半、一二漢学之士潦倒不得志於時、猶硜硜抱遺編守祭器、可哀也已、

叩閽哀告九天神　幾箇孤忠草莽臣　断尽臣頭臣筆在　尊王終頼読書人

（批点）自徳川氏崇儒術、読書明大義者、始知権門顓柄之非、……然卒頼以成功、実漢学之力也、

（評）「高山蒲生時未発廃藩攘夷之論」

徂来而外有山陽　餘子文章亦擅場　南駕越裳北高麗　六鼇暁策躍扶桑

（批点）鹽谷世宏、安井衡、斎藤謙、（古賀樸）実卓然能成一家言、……林孺、……柴野邦彦、……中井積善、中井積徳、……佐藤坦、安積信、……柴野允升、……斎藤馨、……篠崎弼、……坂井華、……野田逸、……松崎復、……聞皆以文名世、余所交諸友亦多名手、蓋東人天性善属文、使如物茂卿之言、以漢音順読之、誠不難攀躋中土、高麗安南何論焉、

（評）「叙列古文家玉石混淆、蓋聞其名而不読其文耳」

（評）藤森大雅、注字純風、号宏庵、「宏弘訛」

観風若採扶桑集　圧巻先編侍宴詩　読尽凌雲兼麗藻　終推帝子独工辞

（批点）皇明光日月、帝徳載天地、三才並泰昌、万国表臣儀、

（評）菅晋卿、注字礼卿、号恭山、「恭茶訛」

処胎累劫出経蔵　片羽猶留熟紙黄　昼夜六時丁甲守　一千餘載墨猶香

（批点）然僞者至多、

竭民膏血造浮屠　佞仏甘称三宝奴　匹馬出宮偸祝髪　上皇尊号半僧徒

（批点）僧徒盛時、上至公卿下至庶民、不建寺塔不列人数、

解鞘君前礼数工　出門双鍔挿青虹　無端痛飲囲鑪酔　笑看仇人頸血紅

（批点）倭国衣冠帯剣矣、……惟日本為甚、

（評）「今則此風稍止」

朝曦看到夕陽斜　流水游龍闘宝車　宴罷紅雲歌絳雪　東皇第一愛桜花

（批点）桜花五大部洲所無、……種類桜桃花、……東人称花王、

（評）種類桜桃花「恐別種」

斜陽紅映酒旗低　食榼帰時袖各携　都為細君留割肉　自拚空酌酔如泥

（評）「不必然、但主人筐残肴恵贈、則持帰遺妻子耳」

Ⅱ　書画

十四　書画帖『万花縁』（昭和三～五年 1928～1930）

高孟賢題簽　一九二八年八月

（外題）万花縁　戊辰秋八月　起元偶題「暇軒」

1扇　曽毓雋　五言律詩

詩人偏愛菊　手自理蕞盆　夜静頻焼燭　官閒早閉門　淡交可同調　小疾且開尊

耐久秋容好　唯君可共論　清宮仁兄属正　曽毓雋「雲沛」

2扇　呉光新書　五言古詩（王維「送別」）

下馬飲君酒　問君何所之　君言不得意　帰臥南山陲　但去莫復問　白雲無尽時

戊辰夏初、録古風以応清宮君雅正。呉光新「呉光新氏」「自堂」

3扇　張弧書（李嶠「麓山寺碑」による）

空慧双銓　寂用同轡　慈目相視　浄心相続
　清宮仁兄属　張弧「張弧之印」

4扇　時中書　一九三〇年八月
不如人和　五年八月　時中

5扇　斎藤恆書　一九二八年八月
「悠々自適」
天地正大気　凛烈貫日月　清宮先生正、昭和戊辰季夏於瀋陽旅次。
北星「斎藤恆印」「北星」

6扇　太陽道人　短歌
あまつひとひとつこゝろになりてこそ天のみなかの神もみゆらん
　太陽道人（花押）

7扇　高孟賢書　七言絶句（李白「早発白帝城」）
朝辞白帝彩雲間　千里江陵一日還　両岸猿声啼不住　軽舟已過万重山
　戊辰秋八月為清宮先生書。　起元「独醒」

8扇　高孟賢書
神龍春水　老鶴秋心　再書「孟賢」

9扇　張国淦書　古詩（劉徹「西極天馬歌」による）
天馬来兮従西極　経万里兮帰有徳
　清宮先生　張国淦「張国淦」

10扇　孫伝芳書（『列女伝』による）
大魚離水　有龍無尾　墻将内崩　君王不視
　清宝先生正之　孫伝芳「孫伝芳印」

11扇　張福増　七言絶句　一九三〇年十一月
一年幾見月当頭　事大如天酔亦休　庭有梅花樽有酒　是真名士自風流
　庚午仲冬、書奉清宮先生。　張福増「張福増印」

12扇　閻錫山書　七言絶句（蘇軾「望海楼晩景」）　一九三〇年
横風吹雨入楼斜　壮観応須好句誇　雨過潮平江海碧　電光時掣紫金蛇
　庚午冬日、為清宮先生雅正。　閻錫山「閻錫山印」

13扇　宝熙書　七言絶句（李白「客中行」）
蘭陵美酒鬱金香　玉椀盛来琥珀光　但使主人能酔客　不知何処是他郷
　清宮先生正　寶熙「寶熙私印」

14扇　細田謙蔵書
雪泥鴻爪　剣堂謙書

15扇　鄒魯　四言古詩
大洋茫々　惟見朝陽　白波相接　碧水飛揚　楼船乗浪　稊米太倉　壷中天地
飲食安康　万有羅列　我心是王　何小不入　何大不蔵　挙頭四顧　渺乎八荒
　清宮先生両政　鄒魯

16扇　張文書
親善　清宮先生嘱　張文

17扇　桜井忠温書画
あの村へ百よ里あまり枯野かな　昂々渓遠望　忠温（桜）

18扇　後藤朝太郎書　一九三二年七月十一日
「我忘吾」
（篆文）文曰、民徳帰于厚
　昭和七年七月十一日　縢石農「後藤朝印」「石農」

19扇　温都爾親王書
正大忠義　清宮先生雅正　陽倉札布「温都爾親王章」「陽倉札布之印」

20扇　薫書画
ゴムの芽のいくつもの一ツの赤き衣脱ぐ　都ホテルにて　薫「紫」「風月翰林」

21扇　車林諾爾布書（『素書』正道章）
徳足以懐遠、信足以一異、義足以得衆、才足以鑑古、明足以照下、此人之俊也。

行足以為儀表、智足以決嫌疑、信可以使守約、廉可以使分財、此人之豪也。守職而不廢、處義而不回、見嫌而不苟免、見利而不苟得、此人之傑也。

清宮先生嘱正　車林諾爾布「車林諾爾布章」

22扇　謝介石書

書有未曽経我読　事無不可対人言　清宮先生正之。　謝介石

十五　書画帖『翰墨因縁』（昭和六年 1931）

劉希淹題簽　一九三一年六月

（外題）翰墨因縁　辛未六月　良斎先生属題。　叔文劉希淹「淹」「叔文」

1扇　恭親王　七言律詩

振衣長嘯海門東　禾黍連雲処々同　放眼平疇青市地　当頭孤嶂碧摩空
扶揺墟里炊煙白　寂莫江湖落照紅　慷慨登臨無限意　蘆花桐葉又西風

清宮先生両正。　恭親王「恭親王」「錫晉齋」

2扇　潘復書

龍跳天門　辰臥鳳閣　清宮先生属。　潘復「濟寧潘復」

3扇　李経方書　七言絶句（白居易「閑吟」）

自從苦学空門法　銷尽平生種々心　唯有詩魔降未得　毎逢風月一間吟

白香山詩　清宮先生雅属。　李経方「李経方印」「光風霽月」

4扇　国分三亥書（司馬光「玉徽亭」による）「光風霽月」

人事有憂楽　山光無古今　漸庵国分亥「国分三亥」「號漸庵」

5扇　山田準書（王陽明「与楊仕徳薛尚謙書」による）

破山中賊易　破心中賊難　濟齋準書「山田準」「士表」

6扇　奥忠彦　七言絶句「小金井行幸松」

駐蹕碑成在澗阿　春風堤上落花多　道人猶感君王沢　行幸松前額手過

小金井行幸松。　無聲

7扇　鯉魚図

素軒画「素軒」

8扇　李思浩書　七言絶句（蘇軾「六月二十七日望湖楼酔書」）

未成小隠聊中隠　可得長閒勝暫閒　我本無家更安往　故郷無此游湖山

清宮先生属書。　慈水李思浩「李思浩印」

9扇　西澤道寛書

一片冰心在玉壺　蘭溪学人

10扇　菱刈隆書（西郷南洲詩）　一九三一年夏

一算投機扶百世　片言窓令斃千兵　録南洲翁詩句。　辛未盛夏　隆

11扇　呉郁生　七言絶句　一九三一年六月二十三日

八年旅島挹清風　小別重逢一瞥中　他日遅君労頂上　白頭同看海霞紅

余識良齋先生十八年矣。重来青島見訪、君已華顛、余亦近八旬矣。臨別小詩奉贈、以当紀事。時辛未夏六月廿又三日作於青島。鈍叟呉郁生「鈍齋」

12扇　王**垿**書（「曹全碑」による）

紀綱万里　朱紫不謬　良斎先生正。　寄叟王**垿**「**垿**印」「寄叟」」

13扇　劉希淹書（「張遷碑」による）

存恤高年　路無拾遺　清宮先生雅令。　叔文劉希淹「希淹之印」「叔文」」

十六　『占春園詩文巻』一巻（明治八年 1875 四月）

橋本雪蕉　題画

雪蕉素写「橋本」「素淳」

林学斎　七言律詩

「詩思驢背」

乙亥四月十有六日酣春園盛集席上漫綴蕪詞

聞説騒人此下帷　佳招幸得接芝眉　園池各趣皆新意　座上群賢咸旧知

数樹桜花香郁々　満簾春色日熙々　高談幽賞無知久　遂及黄昏秉灯時

学斎林昇「林昇」「学斎」

岡松甕谷　五言絶句　七言絶句三首

「聊復爾」

桜花凝紅艶　斕斑映軒楹　謂是侯家苑　夙得占春名」

先生旧抱愛花癖　一擲不惜傾嚢橐　榛莽已化成沃壌　茫々連雲千畦麦」

非独花木輔清游　一家衣食亦已優　駘蕩春風花下宴　相逢総是第一流」

慙吾西海煙波叟　当筵漫尽幾觴酒　放歌一曲且休笑　為君長献千秋寿」

右占春園集賦呈匏宇先生　　岡松辰拝具「岡松長印」「岡松君盈」

望月毅軒　五言古詩

乙亥四月十六日金陵先生招同諸故旧及余于占春園飲桜花下賦以呈似

十里楊柳村　路廻水復複　四囲織木茸　高低森如束

中有高人居　桜花擁其屋　花帯昨夜雨　況逢春晴燠

清姿何所似　佳人新出浴　凝脂浮輭膚　香汗欲透肉

不嫌不解語　只覚風情足　看々影亦妍　向人送余馥

為挙花前杯　浮蟻嘗新漉　瑪瑙盤三尺　生割鱗六々

座客半相識　双鬢非昔緑　休辞対此花　痛飲到夜灯

公謂廿年来　万想久折伏　世味淡於水　世縁薄於穀

今日可憐色　何妨一娯目　余也劫後人　残生空碌々

唯余麋鹿性　形骸比土木　塵識却未断　猶愛風花触

勝会豈止此　比隣久已卜　待君三徑秋　来看貧家菊

毅軒望月綱具稿「名綱字曰孟玉」「只怕有所」

青山延寿　七言律詩

春日宴占春園、々係旧守山侯第、即金陵先生居也。有碑鐫旧藩主哀公詩。歩其韻、賦以乞政。

公侯旧第野橋東　紅緑占春名不空　人吸芳雲盈盞酒　日薫花気一簾風

拝塵愧我追消老　帰潁羨君類酔翁　座上清賓尽同臭　心兼春煦共冲融

青山延寿「処世鈍如椎」

藤野海南

「和光」占春園看桜記

東京城北大塚里有園、曰占春。金陵芳野先生居之、其地高爽、南望城市、北蔽林樾、東有傳通院、西有護国寺、皆徳川氏之所建焉。樹森鬱頗称巨刹而斯園則水戸氏支封守山侯之邸址、占地三万餘歩、昔日之壮麗可想矣。革新際廃棄数年。先生購而徙焉。中央存一宇、四面種桑茶蔬果、宛然一農家。先生年七十餘、秀眉黄髪、督蒼頭載南畝、書生従学呫嗶之聲沸於麥浪菜花之間、暇則曳杖徜徉、樹竹泉石、魚鳥游泳、娯情頤神、身世両忘。人望之以為神僊矣。先生学該古今、尤邃乎六経。其所与交安井息軒藤田東湖藤森弘庵鹽谷宕陰、皆一時名賢。先生与之上下議論。諸賢各有所長、或富乎辞章、或雄乎材略、其才雖異、其徳則同。文酒徵逐、相得無間海内之士。聞者艶慕以不得執鞭為憾。蓋我邦文学之隆、以享保寛政為最。繼而興者於弘化嘉永間為多、而為之領袖者実先生与夫四賢也。宜乎為世所仰望也。予時在僻郷誦其文辞、想望其丰采。既而外事起、諸賢慷慨、論時務、頗挑撃俗論。後生少年依聲附和、激成奇禍。東湖弘庵相尋歿。先生与息軒宕陰幸而得免。迨王政興復、宕陰已逝、息軒病不能起。先生獨擢為大学博士。予亦叨員末。於是始接謦咳、平生素願得由以酬焉。居一歳、大学廢、先生決然去隠於此。嗚呼先生儒林之碩果、今未及尽其用、又不恤其業、将無繼、浩然去而不留、豈不重可惜乎。歳乙亥偕諸友訪占春之園、時方清明、桜花盛開、烟靄搖曳、且賞且酌、薫徳風而酔霞杯、諸友皆賦詩揮毫。予不能詩。先生命以記。昔唐王維以一詞人与襲迪輩唱

和于輞川別業。好事者図而傳、後世嚮慕之。況斯園賁以先生之徳業、足傳之千載、獨予之不文、不能垂諸不朽、是可愧也已。

辱愛弟藤野正啓

拝具「藤野啓」「海南」

島田篁村

金陵芳野先生既罷官、得松平氏廢園於城西大塚。園廣数万畝、竹樹靚深、泉石幽邃、翛然有塵外之想。乃徙家居之、蓋植梅杏桃李之属数百本、榜曰占春園。乙亥四月觴同人於園中。林学齋藤野海南其他来集者十餘人、余亦与焉。時宿雨初霽、蒼翠如新沐、百花璀璨、与秀林佳木相掩映。禽鳥和鳴、落英随風飛舞簷際。若与人同其楽者、把杯更酌、或語或笑、興趣淋漓、主賓莫不歓愜。嗚呼佳辰也、良朋也、名園也、三者合、今日之遊、陶然可以楽矣。余因此竊有所慨焉。雖当幕府盛時、海禹寧謐、民物富庶、上下争以豪侈相高、名園廣宅徧于四郊、其瑰麗雄潤、倍蓰此園者何限。既而世局一變、蕩然為榛莽、欲求其彷彿、而頽垣断砌有僅存耳。抑不拘是也。先生夙下帷都下、其所交皆一時俊彦、或以道徳気節、或以経義文章、以負大名於天下者、指不暇屈。先生与之講経論史、文酒徵逐、殆無虚日。可謂盛矣。曾幾何時、嚮之朋輩淪謝就尽、而今日所会、僅々不過十餘人。其中有晩進如余者、何其零落如此也。觴詠之餘、相与談往話旧。回首曩時、則数十年来、世道汚隆盛衰之故、交友存歿升沈之感、其亦有黯然興歎、不能自已者矣。夫成毀無常、誰昔為然。得此園、獨為先生所得。泉石竹樹依然如昔。又時会良朋、賦詩飲酒、其清曠幽間之致、視之前日殆有加焉。豈非幸耶。且先生年逾七十、貌益豊、神益充、霊光巍然、碩果不食、即由此而耄而期頤、福履之遐不可得而測、則他日復開宴以追今日之遊、必可期而待也。不知当其時、園之樹木与今孰欝葱。卉花与今孰鋪榮。同人之来会者与今孰老孰壮。而世道之推移、人事之變遷、又与今果何如也。嗚呼其可以楽也。夫其亦可以慨也夫。

島田重礼稿「島田重礼」「敬甫」

猪野中行

遊占春園記

春風何在、不在熱閙繁雑之地、而多在花柳樹竹清泉鳴禽之邊焉。春興何在、不在放酔狂呼管絃如涌之境、而多在詩賦觴詠清話茶酒之中焉。然則有園池者、可以占春風矣。有文章者可以弄春華矣。乙亥四月、金陵先生会客于占春之園。此地也、静閑而幽邃、風月清明、花紅柳緑、禽鳥相呼、有丘可臨、有池可釣、或移牀而對花、或踞石而観魚、終日遊憩於茂樹密竹之間、楽而不知倦焉。既而坐閑亭、擧杯相對、高談漸熟、紅暈上臉、翁掀髯揮毫、客分韻賦詩、佳作翩翩、筆下生花焉。此豈非終日所飽之春華醸而成錦繡之章者乎。於是翁楽焉、客亦忘帰、相与酣酔乎芳筵、不知長日之将暮。此日所与遊者、藤野伯迪岡松某青山季卿林学齋望月孟玉木原節夫島田敬甫信夫文郁、皆一時名士而余以謬劣得預焉。豈非幸哉。乃為之記。

猪野中行拝具「中行之印」「字曰尚甫」

信夫恕軒　占春園賞桜記

東京之為地、瓦屋朱門、巨室連第、城歩十万、人烟接天、真一場閙熱海也。大塚里、距城里許、人迹稍罕、竹接蕭密、平疇疎林、白雲浴々、出護国之山、細泉涓涓、趁礫川之流、而金陵先生占春園在焉。園廣数万畝、槿籬周之、南圃拉桑、東園培茶、野菜嘉蔬、塍田相錯、青紅紫白、莫時不可愛矣。今茲四月桜花方開、幽艶濃郁、燦于射目。先生檄招同人、大張宴花下。是日天気晴朗、光風扇和、紅雪繽紛、乱點盃酒間、分韻賦詩者、調琴写懐者、取適於手談者、遣興於揮灑者、玉山既倒不可支持者、賞娯終日使人不倦而相会者、皆一時之文宗名士矣。不知先生何以得之、蓋先生木鐸東京殆五十年、其鑄才陶人、循々有法、前後成器達才者不為不多。平生所著、陽開春生之文、陰閉秋殺之筆、清艶濃郁、亦与桜花爭妍、先生学之徳之加於一世者、可知矣。然則占春之園賞花之楽与彼永和西園之雅集、将東西竝傳、以卜其不朽也。頃先生命能画者雪蕉図之、又徵記於粲。因竊有所感焉。夫政教之醇醨、候奎運之隆

替而知之、奎運之隆替、徴賢豪之聚散而見之、則是図之与記、其可愛重豈特拱璧哉。嗚呼方今老儒宿学相踵凋落、而先生齢垂八旬。矍然霊光、不知自今以降能続其賞而能楽其楽者誰也。謹記。

信夫粲拝撰「粲印」「恕軒」

木原老谷

「小自在」

明治乙亥四月十六日、金陵先生会諸同人於其園。時城中桜花飄散略尽、而先生園中独爛熳盛開、隠映於脩竹茂樹之間。此日天気清朗、暖風扇和、花片数點、時飄落、杯酒間抵掌談笑、呼韻命筆、抵暮初罷。既而先生命画手雪樵画之、雅趣満幅、風度清遠、使人追想当日韻事、示当今之能品矣。嗚呼永和邈矣。西園遠遠矣。其他名賢雅集何限。而其図画在人耳目者、何其寥寥也。此非可歎乎。雖然世之営々者皆是、攘々者皆是。其能遊優于文酒間、而能楽其楽者有幾。則其伝不伝、固不論也。画装潢成、先生命題一言、因書。

辱知木原元礼拝手「元礼」「節夫」

十七　葉松石書幅（三島中洲宛、明治八・九年）

相遇雖未久、辱承雅誼之深、心感已非一日。今又蒙賜瑤章、以光我行李。賜素紙以助我筆談、並拝領謝々。弟行期改卜二十日、五日一俟、俗冗稍暇、当踵門告別。至台駕光顧一説、実不敢当、且恐失迎致罪也。匆匆艸復、鳴謝即頌。文安不一。　辱知葉松石頓首「信縁生」　三島中洲先生閣下

「信縁生」

将帰故国、留別東京諸友。

豈有乗風破浪心　偶然来聴子春琴　閒雲久駐添今雨　倦鳥孤飛出茂林

此日銷魂開祖帳　他年回首感題襟　斯游真箇超前哲　海外論交比海深」

皐比虚擁忝談経　自愧毫無裨友生　浮海徒誇詩格変　出疆幸際聖時清

鄉心梅鶴頻縈夢　秋思蓴鱸忽動情　最是両般抛不得　聯吟諸子墨江桜

回帰有日、再到無期、感賦俚辞、聊抒離恨。所望瓊瑤之賜、藉増巻帙之光、謹此抛纊敢邀贈玉、拙詩並乞敲正。　浙水葉松石初稿「松石」

十八　張斯桂書幅（明治十二年 1879）（資料目録　掛軸・巻子 0076）

人謂東坡作此文、因難以見巧故極工。余則以為不然。彼其老於文章、故落筆皆超軼絶塵了。　三島毅先生属　張斯桂「張斯桂印」「皇華使者」

（外題）「明治十二年清国副使張斯桂書　中洲蔵／廿二号」。

十九　黄遵憲書額「日本雑事詩二首」（書 0046）

西条書記考文篇　会入琳瑯甲乙編　道学儒林尋列伝　東方君子国多賢」

徂徠而外有山陽　余子文章亦擅場　南駕越裘北高麗　六鼇暁策躍扶桑」

中洲先生嘱、書雑事詩、即乞両正。　黄遵憲「臣遵憲印」「公度黄氏」

二十　厳世永書幅（明治十四年 1881 七月上旬、掛軸巻子 0045）

「言忠信行篤敬」

胡安定高弟庠舎難容　孔北海清譚樽酒常満

欲作山中宰相　即是林下一人

纔聴峨洋之絃寸心未尽　帰作山家之宝一幅生輝

歳辛巳秋七月上澣、三島中洲先生写前作一則詩賜余之行、非敢為瓊琚之報、謹将儷句数語奉呈、仍乞斤正。

遊覧人朝鮮厳世永「天官三品経筵参賛」「厳世永印」

（外題）「二松学舎蔵幅　第拾六号」

二十一　崔成大書幅（明治十四年 1881 七月、掛軸巻子 0055）

三島先生得見親　乗槎萬里正其人　立如砥柱層溟故　指若車針大霧因

処世幸同東亜細　有朋来自遠由旬　升堂入室諸高足　問答経論互主賓
謹和寄贐瓊章以呈之、乞中洲先生指教。
歳辛巳秋日　遊覧人朝鮮武三品崔成大「崔成大者隋城氏也字曰士行号為雲皐」
参考：送厳世永・崔成大帰朝鮮
同教同文情好親　相逢不似異邦人　檀君開国国源遠　箕氏化民民俗醇
探水討山経万里　観風察政滞三旬　一朝送別尤惆悵　再会難期海外賓

二十二　諸家寄合書送別書幅（明治四十一年 1908）

（外題題簽）貴州紳士送別之書　明治四十二年装潢　宗親識
任可澄書　七言絶句
閣道縈行入翠微　登山臨水道将帰　異洲結契情何似　春水桃花泛釣磯
清宮・岩原両君期満帰国、同人設祖於翠微閣，書此贈別。夢沼「任可澄印」
唐慰慈書　七言律詩（阮元「貴州省城水南新構小閣、正対渓山、余名之曰翠微閣、幷書扁」）
城南小閣題名後　一段林巒未可忘　黄葉多時有霜気　翠微空処即秋光
眼前画意任舒巻　渓上詩情誰短長　莫怪欄杆人倚久　勾留清景是斜陽
録阮文達公旧作　慰慈「唐」
華之鴻書（朱彝尊「王文成公文鈔序」による）
文成王先生揭良知之学、投荒裔、禦大敵、平大難、文章卓然成一家之言。伝所称三不朽、蓋兼有之。世儒学率寓之空言、先生則見諸行事者也。節録朱竹垞王文成公文鈔序。延儀「延年益寿」
于徳楷書
大清光緒戊申三月念六日、唐慰慈中翰、華延釐部郎、餞清宮・岩原両君於貴陽城南之翠微閣、酒酣耳熱、即席揮毫、以志鴻爪。貴陽于徳楷「臣于徳楷」

二十三　諸家寄合書幅（大正期頃、松井石根・朱大符・張群・戴季陶・善明・宋伯魯・余維謙・彭程万・宮崎滔天、・新田不孤）

清宮先生属
誠　松井
書同文　智　朱大符
日月光華旦復旦兮　天仇
至誠　善明
車同軌　張群
回春　子純
惠風和暢　余維謙
枕戈　彭程萬
吾党之士相會　滔天
誠　新田不孤

参考資料
・三島中洲『霞浦游藻』一八七六年。
・三島中洲『中洲文稿』初集・二集（一八九八年）、三集（一九一一年）、四集（一九一七年）。
・「中洲三島先生年譜」『二松学舎六十年史要』一九三七年。
・山口角鷹『三島中洲―二松学舎の創立者』一九七七年。
・「三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録」『三島中洲研究』四、二〇〇九年。
・町泉寿郎「幕末期の山田方谷・三島中洲に関する新出資料二種」『二松学舎と日本近代の漢学』二〇〇九年。
・二松学舎大学大学資料展示室運営委員会編『三島中洲と近代―其一―』二〇一三年、『同―其二―』二〇一四年、『同―其九―二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち（新収の清宮宗親資料から）』二〇二三年。
・町泉寿郎「三島中洲筆談三種」、王勇編『東亜的筆談研究』二〇一五年。
・町泉寿郎「芳野金陵およびその門人知友と清国公使館員の新出の筆談録」『二松学舎創立百四十周年記念論文集Ⅰ』二〇一七年。
・町泉寿郎「（資料紹介）清宮宗親の事蹟とその旧蔵の陽明学関係資料」『陽明学』三三号、二〇二三年。

編集後記

巻頭に記したことの繰り返しになるが、筆者が筆談に対して関心を持ち始めたのは、この二十年あまりの間に三島中洲の筆談が次第に集まってきたことに加えて、芳野家寄贈資料の中に清国公使館員たちの新出の筆談が見いだされ、その整理作業を行ったことが大きい。そしてほぼ時を同じくして中国の研究者間で筆談研究が盛んになり、求められるままに上記の筆談のほか、養鸝徹定と金嘉穂の古写経をめぐる筆談や明治期の漢方医関係の筆談など、筆談文献について紹介する機会が増えていった。要するに、漸増する東アジア学術総合研究所の資料の整理に従事し、その結果に関心を持ってくださる知友が後押ししてくださったことが主たる要因である。

今回、筆談を展示してみようと思い立ったのは、八月に本学を会場として東アジア比較文化国際会議が開催されることになり、来会される国内外の研究者に本学所蔵の筆談文献を見ていただきたいと考えたからである。昨今の状況では中国からの来会者が少数に止まるかもしれない点はやや残念に思う。

本稿執筆にあたり、印章の解読に関して楊易佳・大森百映両氏の教示を得た。また、企画展と展示図録の作成にあたり、図書館諸氏、丸善雄松堂の山崎和正氏に多大なご協力をいただいた。ともども記して深甚なる謝意を表する。

（町　泉寿郎）

三島中洲と近代　其十二
筆談資料と東アジア文化交流
発行日　令和八年七月二十七日
編集者　大学資料展示室運営委員会
発行者　二松学舎大学附属図書館
〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―十六
印刷
製本　株式会社　サンセイ

（非売品）　2026 ©



二松學舍大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16